

戦国生活日記

武士道

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

相良良晴の同級生の丹羽昌秀は、自分の姓に疑問を抱きながら過ごしていた。

そんな中、友人の良晴が姿を消す。

不安になった昌秀もまたタイムスリップして戦国時代に向かうのであった。

新しい大名家が出てきます。時系列は狂っちゃうかもしれません。

目次

俺の生活	1	昌秀 美濃へ向かう	76
主人公紹介	6	昌秀 旧友と再会する	85
ココは何処だ？ えっ？ 戦国時代？	9	人物紹介	91
昌秀 長門家の面々に会う	16	昌秀 鬼柴田と槍を交える	95
昌秀 修行に入る	23	昌秀 ご先祖様と出会う	103
浅井侵攻	29	昌秀 うつけ姫と面会する	111
片桐且元参上	37	昌秀 長秀に看病される	118
霧生賊討伐	43	昌秀 良晴の家へと向かう	126
浅井奇襲作戦	52	昌秀 墨俣へ帰陣する	131
昌秀 部下と領地を手に入れる	60	昌秀 美濃の一部を切り取る	138
昌秀 政務にウンザリする	67	昌秀 織田を救援に向かう	146
		昌秀 織田の窮地を救う	153
		長門家 浅井朝倉連合軍と対陣する	

織田家	上洛の軍を起こす	239							
昌秀と良晴		231							
昌秀	瀬名城を攻略する	223							
昌秀	長秀の手伝いをする	214							
207									
昌秀	再び丹羽屋敷にお邪魔する								
昌秀	長秀達に誘拐される	200							
193									
昌秀	お金を稼ぐため寺子屋を開く								
昌秀	出奔する	186							
昌秀	連合軍を退ける	177							
長門家	窮地に立たされる	170							
162									
宮部	百叩きの刑	245							
昌秀	姫巫女様と出会う	251							
昌秀	長秀と供にやまと御所に向かう								
258									
怪しい客人		263							
電撃和睦		269							
笹の才蔵	槍の勘辺衛	275							
長秀対久秀	前編	282							

俺の生活

「ふっ…ふっ…」

誰もいない静かな道場で自分は一人木刀を振っていた。

素振りをして、数時間が経って気付くと夕暮れになっていた。

「…やばい。すぐに帰らないと」

自分はすぐに汗まみれになった道場の服を着替え、高校の制服に着替えた。

道場を出て、自転車に乗り道場から2キロ位にある自宅へと向かった。

自宅に戻ると、居間で父親の丹羽昌重が待っていた。

ただいまと声をかけると、父は小さな声でお帰りと言うだけであった。

「今日の仕事は楽だったのか？」

仏頂面の父にうんざりしながらも、わざと気さくに声をかけた。

しかし、父はまたも小さく返事をするだけであった。

この仏頂面の父、丹羽昌重から生まれたのが自分、丹羽昌秀である。

丹羽と名乗ってはいるが、本当に丹羽家の末裔なのかは定かではない。

家計図もないし、これといって家宝と呼べる物も無い。ごく普通の一般家庭だった。母は自分が生まれてすぐに亡くなってしまい、それから父と二人で生活していた。その日は、夕飯を取りすぐに風呂に入って部屋に入った。

「はあ．．．」

部屋のベッドに腰をかけると思わず溜め息が出た。

毎日毎日このやり取りの繰り返しである、溜め息が出るのは仕方ないことだった。しかも、父は何故か剣術や槍術などを自分に無理矢理習わせていた。

「まったく、何で今の時代に剣なんか習わせんだよ．．．」

自分は父に対して愚痴りながら、歴史小説を開いた。

歴史自体は嫌いではない、むしろ好きなほうだ。

ただ、やりたくも無い事をやらせ、無愛想な父親が嫌いだった。

「そういうえば、明日良晴に借りてた太閤立志伝返さないとな．．．」

良晴と言うのは、自分の友人の相良良晴のことである。

高校で歴史の話をしてすっかり意気投合して仲良くなった。

小説を閉じベッドに横になるとすぐに眠気が全身を襲って来た。

「今日は何故か疲れたな．．．いつもなら、こんな事で疲れないのに」

翌日も何時もどおりの生活だった。

朝食をとり、学校に行き、劍の稽古をして、自宅に帰る。

それが自分の、いや俺の生活だった。

しかし、その次の日は違った。

その日は友人の相良良晴が学校に来なかった。

それだけならよいが、帰り道に妙な噂を聞いた。何と良晴が家に帰っていないのとのことだった。

少し不安になり、電話をかけてみたがつかうならなかった。

「まさか、さらわれた何て事はないよな？」

少し沈黙し、まさかな・・・と鼻で笑って帰宅した。

自宅に帰ると、父はまだ帰っていないかった。

風呂に入り、髪を拭きながら居間に入るとはじめて見る手帳が一冊とオンボロの布切れが一枚あった。

「・・・何だこれ？」

それらを手にとり、まずオンボロの布切れを広げた。

すると、予想以上に布切れはでかく広げた後、俺は絶句した。

「これ……家の家紋だ」

そこには、丹羽長秀の家紋でもある丸にバツテンがついた、丹羽直違と呼ばれる家紋がついていた。

しかも、かなり古いらしくサイズを見るに旗のようだった。

俺は、動揺しながらそれらを持って部屋に駆け込んだ。

「な、何で……今さらこんな物が？」

今まで、父は家宝などない、期待しても無駄だと言って俺に家の物を一切見せようとはしなかった。

そんな父が、これらを忘れて居間において置くというのはあまりに不自然で気持ち悪かった。

「……駄目だ。今日は早く寝よう」

父の事を考えて気分が悪くなった俺はベッドに横になり眠った。

翌朝、何時もどおりに起床して学校に向かっている所だった。

「いっつ……!!」

急に頭に激痛が走った。

痛みで呼吸もままならなくなり、意識が朦朧としてきた。

「ぐう……」

朦朧としていく意識の中で、見たものは先程までにはなかった神社が目の前に立っていた事だった。

「神社……?」

そして、とうとう俺の視界は真っ黒に染まった。

主人公紹介

丹羽昌秀〔長門 昌秀〕

相良良晴と同じ高校二年生、趣味は読書（歴史関連に限る）である。

身長は174cm、体重は60キロ、好きな食べ物は麺類である。

運動神経は悪くはなく、学力も悪くはない程度である。

温和な性格をしており、他の人からなめられる事もしばしば・・・

良晴のように、歴史に関与する事を良しとせず、目立たないように行動している。

父親の丹羽昌重に、無理矢理剣術や槍術を習わせられる。習わせられると言っても、本人がそんなにやる気がなかったためどちらも腕前はそこそこである。どちらも流派はよく分かってはいない。

タイムスリップしてからは、近江と美濃の国境境に落ち、浅井と斉藤家の合戦に巻き込まれるが

、斉藤家に従属している近江と美濃の国境境の領主、長門重秀に救われる。その日から、主人公は長門氏に仕えることとなった。

長門備前守重秀（ながとびぜんのかみしげひで）

近江、美濃の国境の国、長津の国の領主。温和で社交的な性格をしており、内政、軍事方面にも秀でている名君と呼ばれる人物である。また、武芸にも秀でており、戦の際には自ら馬を駆つて、敵の中にも飛び込む勇氣を持つ。昌秀はその行為を「それは勇氣ではなく、無謀だ」と言うが、重秀はこれを豪気に笑いながらごまかすのである。昌秀を気に入る、武芸や学問を教えてくれる先生のような人物である。

敵方からのあだ名は、『黒鬼』である。

身長は180cm程、体重は73キロと言つた所である。

長門陸奥守永重（ながとむつのかみながしげ）

長門重秀の長男、父親に似た豪気な性格をしていて、武芸の方も父親に負けぬものを持つている。

ただ、思慮が浅く、すぐに突発的な行動をしてしまうので重秀は不安を抱いている。

慎重は178センチほど、体重は68キロである。

長門武蔵守義重（ながとむさしのかみよししげ）

長門重秀の次男、父親とは違い、臆病ではあるが永重にはない、他を圧倒する智謀を持ち合わせている。武芸は、言葉には出来ないほどである。

身長は171センチ程、体重は63キロ程である。

長門豊後守重勝（ながとぶんごのかみしげかつ）

長門重秀の弟、兄に似た、豪気な性格をしており戦上手である。

長津の国の政治における重要人物である。

武芸も兄ほどではないが、そこそこ出来る。完璧な兄にコンプレックスを抱いており、自分が独身なのを気にしている。言われるとめっちゃおこる・・・

身長は兄と同じ180cm程、体重は75キロ程である。

ココは何処だ？ えっ？ 戦国時代？

——声が聞こえる。

金属と金属がぶつかる音だ。それと、人の叫び声？ みたいなのもしばしば。

「うっ、ココは……？」

うっすらと目を明けるとそこには目を疑う光景が見えた。

目の前で戦っている人々は、甲冑を着て笠を被って闘っていた。まるで戦国時代の足軽のようであった。

「何だよこれ……？」

訳も分からず混乱しながらも、ここにいるのはマズイと思いその場を立ち去ろうとした。

しかし、移動しよう走り出そうとした瞬間、道端にある何かに足を引っ掛け転んでしまった。

「痛ってえ……」

一体何に足を引っ掛けたのかと振り向くと、そこには足軽と思われる者が血を流して倒れこんでいた。瞬間、強烈な吐き気が襲った。

「うっ……」

死体を見た瞬間直感した。俺は戦国時代に来てしまったのだと・・

とりあえず、その場をダツシユ走り抜けて森に向かった。

森に着くと安堵したからか、木にもたれかかってしまった。

「はは……情けない。」

自分の情けなさに笑っていると、奥の方から物音がした。音の方向を見ると、十人ほどの侍がこちらに向かってきていた。

（マズイ……!!）

そう思って体を動かそうとするが、腰を抜かしたのか動けなかった。

そして、侍達が姿を現し、その中でも侍大将と思われる人物が出てきた。

旗の模様を見るにどうやら浅井家の家紋である。

「貴様、見ない格好だな!? さては、斉藤家の間者か!? 皆の者、やってしまえ!!」

侍大将は、俺を勝手に間者と決め付けて槍を構えて襲って来た。

俺は、いつの間にか抜かした腰を持ち上げ、構えていた。

五人ほどに囲まれ、その中の一人が槍で俺を突き殺そうと槍を動かした。

「くっそ……!!」

「がっ……」

俺は槍を右手で掴み、左手で相手の胸ぐらを掴んで背後にあつた木に投げつけた。

同時に、相手の槍を掴んで構えた。

「……いつ……」

「怯むな!! 同時にやるぞ!!」

「おう!!」

今度は二人同時に、槍を突いてくるがそれを俺は、槍を横風に振ってそれらを逸らした。

そして、一人目を槍で突いて、二人目を槍の柄で殴り倒す。

残りの二人は、それらを見て完全に臆してしまったようだった。

(頼む……退いてくれえ!!)

心のなかでそう願いながら槍を構えていると、侍大将が業を煮やしたのか一人で降りてきたではないか。

「貴様ら!! 一体何をしておる!! ええい、どけえい!!」

「な、何を……ぎゃあああ!!」

「なっ……!?!」

侍大将は降りてくるなり、部下二人を刀を抜いて斬り殺してしまった。

俺は、持っている槍に一掃力を込めた。

「あんた・・・仲間を殺すのかよ!!」

「ふんっ、貴様のような奴に臆するなど浅井の恥さらし、生きておる意味などない!!」

「て、てめえ・・・」

俺は、槍を奴の胸に向かって突いた。

しかし、その槍はいとも容易く刀で受け止められた。

「なっ・・・!?!」

「ふん、この程度か？ まるで、赤子のようにじゃのう!!」

「ぐう・・・」

侍大将は刀を横風に振って、俺の体を真つ二つにしようとするが、咄嗟に槍を構えなおしてそれを受け止めた。しかしあまりの力に体ごと吹き飛ばされてしまった。

「がっ、はぁ・・・」

「終いじゃ!!」

倒れた俺にすぐにまたがり、侍大将は俺の首を獲ろうと刀を振りかぶった。

槍は先程の衝撃で折れてしまっていた。

（俺はこんな事で死ぬのか？ 意味も分からずに?）

「死ねえい!!」

(ふぎけんな！ 俺はまだ．．．)

「死ぬわけにはいかねえ!!」

咄嗟に折れた槍の破片を手にとり、相手の喉に刺した。

瞬間、血しぶきが流れ侍大将は無言で倒れた。

「はあ、はあ、やったのか．．．?」

俺は、倒れた侍大将を見ると確実に死んでいた。

その瞬間気付いてしまった、俺は人を殺したのだと．．．

「ひ、ひいいいいいい!!」

残りの二人の侍は、悲鳴をあげながら逃げ去ってしまった。

やっと終わったと安堵して、その場に倒れこむと急に影が俺の頭を隠した。

新手である。今度は先程の数倍は強そうな侍。こりや死んだな．．．と直感した。

新手の男は無言で刀を構え、そして振りかぶり俺の命をとろうとする、が．．．

「待て待てえい!! その者は、この長門備前守重秀が預かったあ!!」

「ぐっはあ．．．!!」

どこから飛んできた十文字槍が、新手の胸に刺さり体ごと吹き飛ばした。

助けてくれたその男は、栗色の馬に乗り、ガハハ!!と笑いながら近づいてきた。

「がっはっはっ!! 無事か坊主!」

「あ、あんたは・・・？」

「何じゃ、先程の名乗りを聞いておらんかったのか？ ワシは、長門備前守重秀じゃ！と、こうしてる場合ではない！！ ほれ乗らんか！！」

「お、おい！！」

長門重秀という奴は俺を、片手で掴み上げると馬に乗せた。

「しつかりつかまっておれよ！！」

「うげっ!？」

栗毛の馬はいきなり走りだして、敵中のだ真ん中に向かった。

(おいおいおいおい!! こいつ正気かよ!?)

心の中でそう思っていると、重秀は槍を構えた。

「どっせええええい!!」

「「ギヤアアアアアア!!」」

重秀の槍は、敵の雑兵三人を一撃で吹き飛ばした。

「くっ・・・弓隊!! 放てえい!!」

五人の兵が、重秀を討ち取ろうと弓を放つが重秀は槍を一振りして、矢を弾いた。

(こいつ・・・化け物かよ!?)

あまりの凄さに言葉も失っていると、重秀は笑いながら突撃する。

そして、十文字槍を振りかぶって弓隊を指揮していた敵将らしき者に向かった。

「く、来るなあ!!」

「遅いわあ!!」

「ぐぶ……」

「く、黒鬼じゃあああ!」

「あんな化け物に勝てる訳ねえ!! 逃げるぞ!!」

一瞬で敵将の首が飛ぶ、敵兵は顔を青ざめて逃げていった。

それを重秀は見ると、またガハハと豪気に笑った。

「がっはっはっ!! 根性のない連中じやのう。そう思わんか?」

「凄いな……あんた」

「そうじやろう、そうじやろう!! さて、城に戻るとするかのう」

そういうと、重秀は馬を走らせた。

俺はこれからどうなるんだろう……と不安が止まらない昌秀であった。

昌秀 長門家の面々に会う

津川城・近江と美濃の国境を繋ぐ重要拠点である。城の後方は高い山々に囲まれ、城の前方には二重の堀が巡らされており、土塁も積まれ敵の矢玉を防ぐ設計になっていた。また、湧き水も豊富で城のあちこちに井戸が存在する。かの斉藤道三も、この城を『稲葉山城の次に堅固な城』と言わしめた。

「すっげえ……初めて生の城を見た」

人生初の生城観賞にひたっている、長門重秀が笑いながら声をかける。

「何じゃ？ 城は初めてか？」

「あ、ああ……こんなに綺麗な状態の城ははじめて見た」

「綺麗な状態？ ガツハツハ!! 面白いことを言う奴じゃのう。この程度の城ならどこにでもあるわい!!」

「この程度って……」

俺はそういいながら城を見上げた。

二重の堀と土塁が置かれ、二の丸には櫓が四つ確認出来た。また、現在目の前にある三の丸の防御もそれなりである。これを力攻めで落とすとなると、かなりの損害が予想

できた。

城の中に入ると、二人の若武者が姿を現した。

片方は、まさに武人と呼べる体つきをしており、もう片方は武将と呼ぶには少し頼り無さそうな感じである。

「父上!! 浅井の様子はいかかでしたか?」

「話にならないのう。わしが槍を二振りしただけで、敵は尻尾をまいて逃げおったわい」
「逃げたのはよろしいですが。父上は大将なのですから、もう少し自重していただかないと・・・」

「ガハハ!! 固い事を申すでない。義重!!」

「どうやら、頼り無さそうな方は義重と言うらしい。」

「何と言うか・・・こう、三国志で言う文官みたいな感じだな。」

「それより父上。そこに担いでいる面妖な格好をした者は誰ですか?」

「おう、そうじゃった!!」

重秀はそう言うのと俺を持ち上げ、二人の前に投げた。

俺は受身もとれず、もろに地面に叩きつけられた。

「痛つつう・・・」

「永重、義重!! こやつはお主達の新しい弟じゃ!!」

「はあ!! 待て、何勝手に決めて……」

突然の弟宣言に反論を言おうとするが……

「新しい弟ですと? まあ、父上が決めた事なら従いますが……」

「諦めよ義重、父上はこういうお方じゃ」

重秀の息子二人は、これといった反発はしないようである。

こいつらは大丈夫なのであるかと不安になると、義兄二人に両腕を掴まれた。

「へ……??」

「ほれ立たんか。それでは我等の弟は務まらぬぞ?」

「いやいやいやいや!! 何で俺がお前らの弟なんぞに、ゴツフウ!!」

その瞬間、永重の拳が俺の鳩尾にストライク。

余りの衝撃と、激痛に気絶する俺。

「仲良くなりそうで良かったのう。さて、これからの事もある。早速、軍儀じゃ!! 義

重、皆を集めよ!!」

「はっ!!」

「うっ、ここは……」

「気付いたか？」

「うお!!? あんたは確か……」

「む? ああ、ちゃんとした自己紹介がまだだったのう。わしは長門陸奥守永重。長門重秀の長男じゃ。おぬしの名前は？」

「俺は、丹羽昌秀」

「丹羽……もしや、尾張の丹羽長秀殿と関係があるのか？」

「まあ、無くはないかな」

「何じゃ、はつきりせん奴じゃのう」

俺は重い体を持ち上げて、改めて周りを見渡した。

六畳位の部屋で、隅っここには机が置かれておりいろんな書物が確認出来た。

永重はと言うと、俺の様子を見て笑いながら刀の刃こぼれを確認していた。

「それよりお主、面妖な格好をしておるのう。もしや尾張ではそういう格好が流行っておるのか？」

「いや、この服装は流行ってないと思うぞ。」

「そうなのか? じゃあお主はいつたどこから来たのじゃ? 丹羽殿の知り合いと

いう事は、尾張から来たのであろう?」

「いや、尾張じゃない・・・」

「じゃあ何処から来たのじゃ?」

俺は、言った方が良いのかどうか迷ったがどちみちばれる事だと思い、話すことにした。

「未来から来た・・・」

「はっ? 何じゃと?」

「だから、未来から来たんだよ!!」

そういうと、永重はしばしの沈黙の後、ぶつと口を膨らますと大笑いをし始めた。

「あはははは!! 未来から来たじゃと!? いや、面白い面白い!! こりや傑作じゃ!!」

「嘘だと思ふなら証拠を見せてやろうか?」

「ああいいぞ! どんな事でもやって見るがいい」

俺はニヤリと笑い、自分のカバンをあさり始めた。

「おい、その袋は何じゃ?」

「これは、カバンって言つてな。未来の道具入れみたいなもんだ。ええと、確かこの辺りに・・・お、あつた!」

「何じゃそれ?」

俺が取り出したのは携帯電話。これなら、俺を紛れもなく未来人として認めざるをえない。

「いいか、絶対そこを動かすなよ!!」

「お、おお・・・」

俺は、携帯の写真機能を出して永重をフラッシュ付きでパシャリと撮った。

案の定、永重はいきなりの奇怪な音と、謎の光に驚き尻餅をついていた。

「どうだっ!? これが未来の力だ!!」

俺は、自慢げに先程とった写真を永重に見せた。

「こ、これは・・・!? わしがこの絵の中におるではないか!? き、貴様・・・まさ

か妖怪の類か!」

「違う違う違う!! これは、れっきとした未来の技術の結晶であって・・・っておい!

その物騒な物をしまえ!!」

永重はしぶしぶ刀を納めたが、まだ疑っているようだった。

そこで俺は1つの事を思いついた。

「な、なあ? 今川義元ってまだ生きてるか?」

「何じゃ突然? 今川義元は、現在尾張に向けて進行中じゃ。あれだけの大軍で攻め

られたら、織田も終わりじゃろうな。」

「そうか、今川はまだ滅んでいないか……」

「一体何なのじゃ？ そんな事を聞いて……」

俺は、それを聞いて思わずふふふと笑ってしまった。

それを見た永重は、首を傾げる。

「よし、俺が未来を予知してあげよう」

「ほう……言ってみい」

「此度の戦、織田が大勝利する。そして、今川は滅ぶ事になるだろう」

「馬鹿なっ!? 今川は二万近くの大軍じゃぞ！ 何処に負ける要素があると言うのだ!?」

「まあ、報せを待つんだな。その時、俺が未来人だつて嫌でも認めるさ」

「むう……」

永重はどうも腑に落ちない顔をしていたが、やる事があるのか部屋を後にした。

俺には、

『そろそろ父上が会いに来る筈だ。その時にこれからの事を話すので今しばらく待つていろ』

との事だった。そして、数時間経った頃、部屋の戸が勢い良く開かれた。

昌秀 修行に入る

戸を勢い良く開いたのは、城主の長門重秀であつた。

「お主、織田が今川に勝つと申したそうじゃな？」

重秀は力強い目で俺を見る。

俺は少し戸惑いながらもこくりと頷いた。

「何故、そう思う？」

「……今川は二万近くの軍勢で進行中なんだから。加えて織田の兵力はざつと見て三千程度……となると自然と軍は気が緩みがちになるはず。そこを上手く突けば……あるいはと思つただけだ」

重秀は答えを聞いている途中に、最初は真面目な顔をしていたが直ぐに笑い始めた。

「いやあ、永重が貴様を未来から来たとぬかしておつたが……どうやら、そのようじやのう」

「は？」

「重秀様!! 先の織田と今川の戦ですが……」

伝令と思われる人物は俺が居たのもあつてか、伝令を伝えるのを渋つた。

「構わぬ、申すが良い」

「それでは……織田と今川の戦ですが、結果は今川の大敗でございます。加え、今川の大將今川義元は討ち死にし、今川勢は壊乱状態との事」

「左様か、下がってよいぞ」

「はっ！」

重秀は伝令が行ったのを確認すると、直ぐに俺に目を移した。

「どうやら、お主は未来人という事で間違いなさそうじゃのう」

「やっとな信用してくれたか……」

「まあ最初は半信半疑じゃったがのう。ところでお主、わしに仕えぬか？」

重秀は真剣な眼差しで俺に聞いてきた。

（まあ、確かに今のままでとそこらへんで野垂れ死ぬのが決まってるしなあ……）

俺は、そんな事を考えるとこの人に仕官するのが今は最善の方法なのではないかと考えた。

「分かりました。これから丹羽昌秀、長門重秀殿にご奉公させて頂きます」
「そのような堅苦しい挨拶は良い。それより、今の状況を説明するでしょう」

その後、早速重秀から今の国の状況を説明された。

「ここは、美濃と近江の国境の国、長津の国。．．．全然聞いた事の無い国である。そして、俺が所属している長門家は斉藤家の庇護を受けているとの事だった。」

「現在、長門家と近江の浅井家は敵対関係になっており、度々先程のような小さな戦があつたりするそうだ。ちなみに織田とも仲が悪いらしい．．．」

「さて、お主は武芸は出来るのかの？」

「いやあ、本当に基礎中の基礎しか出来ない状態です」

「．．．．．」

「そこで二人はしばしの沈黙が続く。」

「何と!? 未来の日ノ本の男児は武芸も出来んのか!? それはいかん。永重!」

「父上、お呼びしましたでしょうか?」

「普通に入ればいいのに長門永重は襖を壊して入ってきた。」

「おおいっ!? 普通に入って来いよ! 普通に!!」

「何じゃ、兄に向かつてその口の訊き方は!」

「誰が兄だ、誰が．．．」

「む、そうじゃそうじゃ。お主、今日から丹羽姓を改めわたらの長門姓を名乗るが良い」

「何で俺が．．．」

「よいのかあ? 長門姓はここらでは結構便利じゃぞ、それに丹羽姓のお主が他の家臣

に知ったら」

「・・・分かった、分かったから」

丹羽姓の場合、織田を毛嫌いしているこの家臣どもは俺を殺そうとするのではないか・・・

そう考えると全身から血の気が引いた。

「とりあえずお主は、これから軍略、武芸、政治すべてを学んでもらうからな。担当は、軍略をわし、武芸は永重、政治、外交などは義重に任せるとしよう」

「お、おい・・・一体何を言つて、ぐふう!？」

喋る前に、永重が俺の鳩尾にアツパーをかました。

「またも、痛みで気絶する俺・・・」

「弱いう・・・よく、これで先の小競り合いを生き延びたもんじゃない」

「しかし永重、これでもこやつ、五人ほどの兵を倒しておるからのう。見込みはあると思っうぞ?」

「そうですか・・・では父上、早速修行に行つてまいります」

「うむ、気をつけるのじゃぞ」

重秀は昌秀を抱えて走り去つてゆく永重を温かい目で見送つた。

「どうしたあ!? もう終わりか?」

「くっそ・・・」

永重との修行が始まり、早二週間。槍の修行から始まり、弓、剣と来て最後の長刀の訓練に入っている事だった。

永重は、練習用の長刀をいとも容易く操り、俺の攻撃をいなしていた。

「ぜえ、ぜえ・・・全然当たらない」

「まだまだ未熟じゃ!!」

「ぐっ・・・」

永重が放った突きを俺は、長刀で薙ぎ払おうとすると永重は咄嗟に長刀を構えなおし、新たに薙ぎ払いを繰り返す。それを防ぎきれずまともに喰らったのびる俺。それを呆れ顔で見る永重。

「全く、お主長刀は全然じゃのう・・・」

「ほっとけ、俺には槍があつからいいんだよ」

「たわけ!! 戦場では、槍だけに頼る事は出来んのじゃぞ!! もつと真面目にやらんか
!」

「か、勘弁してくれえええええ!!」

親父・・・俺、あんたの言う事ちゃんと聞いとけば良かったって思ったの生まれて初めてかもしんない。

浅井侵攻

昌秀が修行を開始してから一ヶ月が経とうとしていた頃、長津の国に火急の報せが入った。

何でも、浅井がこの長津の国に侵攻しようとしているという事ある。

「何っ?!」 浅井が進行を開始したじゃと!？」

「はっ・・・それにもう一つ、悪い知らせがございます」

もう一つの悪い報せというのは、重秀の先代の頃からの悩みの種である津川城の近くの山を拠点として活動している山賊もこれに同調して動いたという報せだった。

この山賊は、霧生山（きりゆうさん）と言う山に砦を築いて活動している事から霧生賊と名乗るようになった。

おまけに、築かれた砦も厄介で武器や食料なども、近江と美濃の民から強奪して貯蔵していた。

「兄上、近江の進行に対応するにはこちらのほぼ全ての兵力を当てる事になります。そうなると、こちらに残る兵馬は千人足らず・・・また、これらを指揮する将もおりませぬ。兄上、ご決断を!!」

そう言ったのは、長門重秀の弟である長門豊後守重勝であった。

「……仕方あるまい。昌秀を呼べ」

「ま、まさか兄上。あのような者にこの城を任せるつもりですか!」

重勝は信じられんという表情をすると、周りの重臣達も同様に表情を曇らせた。

しかし、重秀は戸惑う事無く昌秀を呼ぶ為に早馬を出させた。

俺はその頃、永重の弟である義重に内政について、城より少し離れた別館で学んでいた。

義重は好きな事について語りだすと止まらない性格のようで、内政や外交についての話を小一時間続けていた。

「よいか昌秀、内政と言うものの本懐は民のためである。」

「はあ……」

「民がいるから国がある。彼らの納めてくれる年貢が我等の糧となっているのだ」

言いたい事は分かるのだが、もうあなたの授業時間は過ぎている事を物凄く伝えた
い。

何故って、後ろで次の肉体労働もとい、修行をしたがっている永重がすごい形相でこ

ちらを見ていたからである。義重は永重を確認すると、はあと溜め息をついた。

「何か御用ですか兄上？ 私は今、昌秀に内政のなんたるかを——」

「ええいつ！ お主はただらだと御託を並べるだけで時間を無駄に過ごしているだけではないかつ！ それでは、昌秀が眠ってしまうわ！」

「いくら兄上でも、その言葉は聞き捨てなりません。兄上こそ、体ばかり動かしてばかりで頭が足りないと思えますが？」

「何じゃと!? 言わせておけば・・・」

「二人ともちよつと待てええええ!!」

つまらん兄弟喧嘩に仲裁に入る俺。

このまま続けられたら、ずっとこうしているような気がしてならなかったからだ。

「何じゃ昌秀!? 兄の喧嘩に口出しするではない! 童は黙っておれ!」

「その通りだ昌秀、これは私と兄上の喧嘩だ。仲裁は無用、童はそこで茶でもすすつておれ!」

「誰が童だ!! このクソ義兄共おおお!!」

俺ら三人が口論していると、外から俺らを呼ぶ声が聞こえた。

「御免!! 長門三兄弟はそろっておられるか!」

「何じゃ!? 今、忙しい!」

「申し訳ござらぬ、火急の用件にて重秀様から伝言を預かってまいった!!」

「伝言だと? 申してみよ」

「はっ! 昨夜、近江の浅井勢がこちらに向けて進行を開始した模様。さらに、霧生賊も

これに同調して進行を開始!! お三方は早急に城に参られよとのご命令でござる!!」

それを聞いた二人はすぐに顔つきが変わった。

「霧生賊が動いたじゃと・・・?」

「恐らく、浅井の者の仕業でしような」

二人は凄く冷静に話していたが、聞いている俺は内心びびりまくっていた。

近江とここはメチャクチャ近い。ご近所さんがこんちわくと挨拶に来るようなも

のだ。

「そういうことならば致し方あるまい。行くぞ、義重! 昌秀!」

「はい」

「えっ? 俺も?」

「当たり前じゃ!!」

「痛つてえ!」

永重の拳が俺の頭に鈍い音を出すと、いつの間にか義重は俺ら三人分の馬を引いてきていた。

そして、俺らは馬に乗って津川城へと急いだ。

「父上！ 浅井が進行してきたとは真ですか!？」

「永重か・・・うむ、真の事じゃ」

「されば、早速迎撃にでねば・・・」

「それがのう義重。此度も奴らの軍勢は、六千程らしい・・・」

「となると、こちらの兵力はかき集めても四千五百程度。三千五百を動員し、残りの千を城の防備に当たらせるものと存じます」

「うむ、わしも同じことを考えていた。既に、斉藤家にも援軍の要請は出してある。」

「なあに、また今度も軽く蹴散らしてやりますよ!!」

永重の言葉に、重臣達も『そうだ、もう一度懲らしめてやろう!!』と息巻いていた。その空気に、重勝が口を開いた。

「しかし、霧生賊は如何なされるのです！ 奴らの兵力は、各地の山賊を集め千はくだりませぬぞ!!」

「うむ、その事じゃが・・・」

重秀の言葉に皆が息をぐくりと飲んだ。

俺も永重の後ろで息を飲む。すると、重秀は閉じていた目をゆつくりと開いた。

「霧生賊の件、昌秀に任せようと思う」

その瞬間、全員が凍りついた。当たり前前の事である。

「お、恐れながら兄上。昌秀ではいささか力不足かと存知まする。まだ、修行して一ヶ月足らず実践にでるには早すぎまする」

重勝がすかさず反対の意見を述べた。他の重臣もそれに同調するが、重秀は意見を聞かず勝手に決めてしまった。重秀は俺の副将として、重臣の宮部継潤をつけた。

宮部継潤……元は、浅井の家臣であったが先の戦で重秀の人望とカリスマ性を慕い、長門家に帰順した僧兵である。

俺は、重秀に俺では無理だと言ったが問答無用で押し付けられた。

義兄達は、笑いながらお気の毒にと言つて戦の準備に入ってしまった。

俺が皆の戦の準備を石に腰をかけながら見ていると、後ろから誰かに肩を叩かれた。

後ろを見ると、ハゲのおっさんが立っていた。恐らく、この人が宮部継潤なのであろう。

「もしかして、宮部殿ですか?」

俺が他人行儀で話しかけると、宮部継潤はニコリと笑いながら気さくに話しかけてき

た。

「成る程、あなたが殿の隠し子の昌秀様ですな。確かに、殿と雰囲気が似ていらつしやる」

「隠し子って・・・待て、俺があの人と?」

「左様、殿があなたにこの任を与えたのは、殿があなたを信頼しているからなのです。力になれるか分かりませぬが、不肖この宮部継潤、若様に忠節を誓います」

宮部さんは、俺の足元にしやがみこむと頭を下げた。

俺は慌てて周囲を確認する。

「やめて下さい。俺なんかに頭を下げるなんて・・・」

「いえ、やめませぬ。貴方を見て確信いたしました。」

「な、何を・・・?」

「貴方なら霧生賊を討伐する事が出来る事です」

「まさか・・・軍略だつて重秀さんに習つたばかりで、それをすぐ実践に使えとは——」

「いえ、出来ます!!・・・若様、御免!!」

宮部継潤は力強く否定すると、立ち上がつて俺を担いで走り出した。

「お、おい!! 一体何処に連れてくつもりだつ!」

「今は申せませぬ。」

「はあ……」

俺はもうなるようになるかと腹をくくったが、ふとあることに気付いた。

（俺、何んであいつらの事『義兄』って呼んでんだろう……）

「どうなされた若様？」

「……少しほつといてくれ」

「??？」

自分の予想以上の順応能力の高さに両手で顔を隠した昌秀であった。

片桐且元参上

宮部継潤は途中、馬に乗り換え訪れた場所は、城から霧生山がある南に2キロ程行つた霧生賊対策に向けて築かれた砦であつた。

「ここは・・・?」

「霧生賊討伐のために私が築かせた砦でございます。ここには既に、8百の兵が駐屯しております」

俺は馬から下りて、砦の様子を見ると確かに大勢の兵士達がこちらの様子を伺つていた。

「何時の間に・・・」

「昌秀殿が隠れて武芸の修行している時にですよ」

「っ!? 見てたのか!?!」

「それはもう。私をはじめここに居る皆が見ておりました。ここに居る者達はほとんどが百姓なのです。」

確かに俺は、永重に目に者見せてやろうと、ここ最近武芸を鍛えてはいたが、まさか百姓達が見ていたとは・・・

「それに昌秀殿は自室で隠れて、兵法や内政の書物も見て学んでいたではないですか。私はそれを見て、正直もつたいたいと思つたのですよ」

「……もつたいたい？」

「そうです。貴方には才がある。そして、裏での努力も怠らずご兄弟にはうつけのフリをしている。よいですか？ 貴方は、もつと自分に自身を持つてよいのです。」

俺が宮部の話を聞いていると、ズボンを誰かに引つ張られた。

誰かと下を向くと、そこにはまだ幼稚園程の子供がいた。

「昌秀殿は百姓と仲がよろしいようですね。」

宮部は子供を見ながら笑うと、砦にいた兵達がこちらに集まつてきた。

「御覧下され昌秀殿、僅か一月でここまで人心を集める事は凡愚には出来ませぬ」

「……」

俺が黙り込むと、宮部はくすりと笑い誰かを呼んだ。

一人は白髪が目立つが、歴戦の武士を感じさせる雰囲気を感じた老武者。

もう一人は、黒髪のロングヘアーでパツチリとした目が印象的な女の子であった。

「……女の子？」

「ちよつと待て、何で女の子が鎧兜を着けているんだ？」

「……それは私に対しての侮辱ですか？」

黒髪ロングヘアがいきなり口を開いた。その口ぶりには怒気が感じられた。俺も嫌な感じがしたので弁解する。

「い、いや・・・そういう訳じゃ。どういう事ですか?」

「昌秀殿、こちらの老武者は片桐直貞殿で、こちらがそのご子息である片桐且元殿です。この二人は、私と共に浅井より帰順し今は私の与力を務めている者達です」

「な、成る程・・・」

「貴方が長門昌秀殿だったんですか、本当にそんなんで大将が務まるんですか?」

「・・・何だと?」

俺が反論しようとする、目にも留まらぬ速さで直貞が且元を頭に拳骨を入れた。

且元はフゲツ!と情けない声を上げ、頭を押さえた。

「痛ったあ・・・」

「大将に何と言う口の聞き方をするか! 此度お主は、このお方の護衛をするのだぞ!」

「はい・・・分かりました、父上。」

・・・どうやら今回の戦は、この口の悪いが美人な女が俺の護衛をするらしい。

「それでは昌秀殿、我らも戦の準備を始めますので城にお戻りを。今日から護衛として且元を付けますので、親睦をお深めください。それでは・・・」

「お、おい!! ちょっと待ってくれ!」

宮部と直貞は、馬に乗って颯爽と行つてしまった。砦の兵達も宮部達を追つて行つてしまった。

そんな中、ポツンと取り残されてしまった二人。

「……」

気まずい……非常に気まずい。それに、さつき何か怒つてたしなあ。話しかけ辛い。

しかし、片桐且元と言えば賭ヶ岳の七本槍の一人であつた筈。しかも男だ。

それがどうだ。こいつは女で、片桐且元を名乗っている。

もしや、歴史が変わつているのか？ そんな事を考えていると、且元が変な顔で見つてた。

「……何か用か？」

「いえ、考え事をしていようだったので。とりあえず、城に戻りますか？」

「んんそうだな。一回、城に戻るか」

俺が馬にまたがると、ある事に気付いた。且元には馬が無いのだ。

「何だ、馬を父ちゃんに持つてかれたか？」

「いえ、砦に戻ればありますので今とつて参ります」

「そんな面倒くさい事してられつかよ。ほら乗れ」

「い、いえ……しかし——きやつ!？」

俺は一度降りて、且元を抱えると馬に無理矢理乗せた。そして、すぐさま且元の前に座り馬を走らせる。

「ちよ、ちよつと・・・」

「しつかりつかまってる!!」

「う、うん・・・」

城に戻ると、既に永重が戦の準備を終わらせ出陣しようとしていた。

永重自身も全身を赤の鎧兜を着け、いつでも戦が出来る状態であった。

「永重、もう行くのか?」

「昌秀、義兄と呼べと言っているであろう。父上ももうすぐ出陣じゃ、南門に居るゆえ会って来い」

「分かった」

俺はすぐに馬を、重秀がいる南門へ走らせた。

「おう、昌秀!! 戻ったか!」

「重秀殿・・・」

「なあに、そんな心配するような顔をするでない。お主なら出来る、後ろにいる可愛い娘も居る事だしのう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

重秀の言葉に顔を赤らめている且元の性格が分かったような気がした。

「それでは城は頼んだぞ。昌秀」

「・・・・・・・・お任せを」

「がっはっは！ この一月でお主も、頼もしくなったのう!! では、出陣じゃ!!!」

「「おおおおおおお!!!」」

重秀が大声で言い放つと、周りの将兵もそれに呼応して鬨の声を上げた。

長門重秀が率いる三千五百が津川城が出るのを見送ると、俺ははぁ・・・と溜め息をついた。

「・・・・・・・・貴方、本当に大将なの？」

「ああ、残念ながらな・・・」

俺はとりあえず、伝令を呼び他の家臣を早速軍儀を開くため呼び寄せた。

霧生賊討伐

俺は他の家臣達に適当な指示を与えて自室に籠ると、且元に霧生賊のいる周辺の地図を持ってきてもらい、それを茶を飲みながらずっと見ていた。

「……昌秀殿」

「何だ？」

且元はいつまでも出陣しない俺に業を煮やしたのか、怒った顔をしながら見ていた。そしてとうとう、俺の飲んでいた茶を奪うと大声で怒鳴りつける。

「あなたという人は……もう敵はすぐそこまで来ているのですよ!! それを、お茶を飲みながら地図を見ているだけなんて……何を考えてるんですか!!」

「そう怒鳴るな。そうだな、そろそろ……行くか」

俺は、配下の者に出陣する旨を伝えるとすぐに鎧兜を準備させた。

且元はそれをポカンと口を開けてみていた。

「何だ、お前はいかんのか? 早く準備しないと置いてくぞ」

「へ? あ、ひゃい!!」

「囁むな馬鹿」

「う、うるさい!!／＼／＼」

且元が顔を赤らめながら甲冑を着たのを確認すると、俺はすぐに八百の兵が残る砦へと百の兵を率いて向かった。城には百の兵で守りに当たらせた。

砦に着くと既に宮部や直貞等の家臣達が出陣を待つ形になっていた。

俺は砦に入り、早速皆を集めさせた。

「宮部殿、敵の数と位置は？」

「はっ、敵は千二百程、この砦より十町ほどの距離でございます」

「やはりな・・・」

恐らく敵は重秀殿が出陣したのを知っている、だからこそ手薄な長津城を狙いに来たのだろう。

最も、山賊が城を狙う意味が分からんが。まあそれは、敵の大將を捕まえれば分かる事だ。

「よし、且元。お前に三百の兵を預ける」

「へ？ 私ですか・・・？」

「お前以外に且元が何処にいる。いいか？ お前は三百の兵を連れて霧生山に遠回りしろ」

「え、でも……敵は千二百の兵ですよ？　三百も兵が抜けたら六百の兵馬しかいなくなります」

「それでいいんだ。いいから行け」

「……分かりました」

そう言うのと、ムスツとした表情で且元は三百の兵馬を率いて行ってしまった。

「さて、と……これから、俺らは敵の迎撃に向かう」

「しかし且元の言うとおり、こちら六百の兵しかござらぬ。籠城する気でござるか？」

「直貞殿、俺は籠城する気は毛頭ない。俺らはこれから討つて出る!!」

俺がそう言うのと、直貞も兵達も驚きの声を上げた。

「ば、馬鹿な!?　野戦をするつもりでござるか!？」

「落ち着くのじゃ直貞。昌秀様も考えあつての事じやろう。なれば我らはそれに従うま

でじゃ」

宮部がそう言うのと、直貞も兵達も黙って従った。

俺は六百の兵を連れて、五町程行った所で山賊軍と対陣した。

対陣してから一時間ほど経った頃、宮部が話しかけてきた。

「敵は動きませぬな……」

「ふっ……そう思うか？」

「??？」

「敵が本当に只の山賊の集団なら、何も考えず兵力にモノを言わせて攻めてくる筈だ。それが無いと言う事は？」

「もしや・・・率いているのは只の山賊ではないと？」

「まあ勘だけどな。恐らく敵は奇襲を仕掛けてくる。兵には今の内に休ませて置いてくれ。俺達も夜に動く」

「承知」

その日の夜、昌秀の言った通り敵が奇襲を仕掛けて来た。

しかし、事前に昌秀が備えさせていたので敵は大敗を喫した。

しかも、こちらが無傷という完勝である。これに将兵達も士気が上がった。

一方その頃敵陣営。

一人の男が陣営の中で、頭を抱えていた。

「馬鹿な・・・俺は浅井の言うとおりに実行したのに何故失敗するんだ!？」

「どうやら、敵に知将が居るようですな」

一人の部下がそう言うやとすぐに伝令が走って来た。

「も、申し上げます!! 長門勢がこちらに向かって来ております!!」

「な、何じゃと!? 仕方ない、ここは一度霧生山に戻るぞ!」

お頭と思われる男が言うのと、すぐさま軍勢は山に強行軍で向かった。

そして、山の入り口に着くと森から一斉射撃が始まった。

「なっ!?! 何故長門勢がここにおるのだ!?!」

「お頭! 後ろから騎馬隊が向かって来ております」

「何じゃと!?!」

後ろを振り返ると、黒い甲冑を着た武者が槍をかざして現れた。

「俺は長門昌秀!! 貴様が賊の大将だな!」

「き、貴様は黒——」

その瞬間、昌秀が振った槍が山賊の頭の胴を貫いた。

「お前らの大将は死んだ!! 観念して投降せよ!! 今ならば命までは取らぬ!!」

俺が叫ぶと、敵兵は一人また一人と武器を落として降伏した。

降伏した兵はおよそ九百、これらのほとんどが美濃や近江の元武士であった。

理由を聞いた所、家中の権力争いで負けやむなく山賊になったと言っているのである。

目立ちたくなかった為、頭をあの馬鹿男にさせ、自分達は裏で指示を出していたので

ある。

「本物の大将は何処だ？」

俺がそう聞くと、兵達は真つ直ぐある女を指差した。

手にある傷は相当鍛錬した事を物語っていた。

「あんたが大将か？名は何と言おう？」

「藤堂高虎つて言います・・・」

藤堂高虎と名乗った女性は何を外すと真つ直ぐな目で見てきた。

どうやら、長津城を狙ったのは自分の実力を証明してまた浅井に取り入ろうと企んでいたようだ。

「成る程な・・・あんたが裏で指揮してたのか」

「はい、でも私の策が破られるなんて・・・貴方が破ったのですか？」

俺がまあなと素っ気なく答えると、高虎は目を爛々と輝かせた。

そして、俺の前で泣きながら土下座した。

「お、おい・・・」

「お願いします!! 私を貴方の家臣にしてください!!」

「な、何で急に・・・」

「勝手な事とは分かっております。しかしやつと、私が命を預けられる主に巡り合えた

のです。どうか家臣の末席に加えてくださいませ!!」

泣きじやくつた顔を上げて俺を見上げる高虎。

「良いではないですか昌秀殿。この者の才はかなりの物と私はお見受けするが?」

「まあ、宮部殿がそういうのならば・・・それじゃあ、高虎。よろしく頼む」

「は、はい!! この藤堂高虎。殿のために命も捧げる所存でございます」

「ああ、よろしくな」

俺が笑いながら高虎の肩に手をかけると、高虎の顔が真っ赤に染まった。

「ど、どうした?」

「・・・いえ、何でもありません／＼／＼」

こうして、高虎を初め九百の兵が俺の配下に加わった。これで、総兵力は千八百である。

しかも、砦のなかに十分な弾薬や武器と兵糧を発見し、軍備が潤った。

戦の勝利に皆で喜んでいると、戦後処理をしていた且元が走り寄ってきた。

「ま、昌秀殿!! 私はとんだ誤解をしていたようです・・・」

「何だ改まって・・・」

「お、お願いがあるのですが・・・よろしいですか?」

「ごよ」

「まだ何も言つてませんよ!」
「……どうか、私を家臣に取り立てては頂けないでしょうか?」

「うん、だからいいよ」

決断早つ!?!と驚いている且元を見て、皆で笑っていると早馬が走ってくるのが見えた。

「申し上げます!!」

「重秀殿からか?」 戦のほうはどうだった。まあ、結果は完勝だと思うが」

俺の冗談に皆が笑うと、伝令は真剣な表情で顔を横に振った。

「お味方劣勢でございます。現在、重秀様は城に籠つて籠城の構えをとっております」

その報告に、味方に動揺が走った。

「つきましては昌秀様には即刻手勢を連れて城に帰還するよう伝言を預かっております」
「る」

「そうか……」

俺は書状を受け取るとその場に座り込んだ。

心配して、宮部や片桐親子、高虎が近づくと

「昌秀様、事は一刻を争います。早速、殿の下に戻るべきかと」

「某も宮部殿に賛成です。このままでは、城が落ちてしまいます」

宮部と直貞は城に戻る事を薦めるが、女武將の二人は何も言わなかった。

「お前らは何も言わねえのか？」

「私たちは私達の主に従うまでです」

俺はそうかいと笑うと、宮部、直貞に三百の兵を預けて城に帰還させた。

そして俺らは、奴らが出陣してきた城である津川城から西に五キロほどに位置する吉備津城へと向かった

浅井奇襲作戦

昌秀率いる千五百の手勢は、一日休息をとって次の日吉備津城へと攻め寄せた。

敵方の城主、吉備津綱貞は昌秀の軍勢を確認すると戦うこともせずわずかの供を連れて逃げ去った。

城主を失った吉備津城の五百の手勢は降伏し、昌秀の支配下に置かれる事になった。

そして、城をとった後將兵に夜まで休息を取らせた。

俺は城に入ると、城主の部屋に入って休息がてらに部屋に置いていた書物に目を通した。

「おっ……これは中々の兵法書だな。」

俺がどれどれと言って早速読もうとすると、且元と高虎が部屋に入ってきた。

「昌秀様、こちらの兵力は先程の五百を合わせて二千になりました。何故、浅井の背後を突かないのです」

「私も且元殿と同じ考えです」

俺は、はあと溜め息を吐くと書物を閉じて横になった。

「いいか？ 恐らく今頃、さつき逃げた綱貞が救援を求めている筈だ。となると、すぐに

この城を取り返しに来るに違いない。まあ、兵力はそんなに裂けないから三千がいい所だろうな」

「な、成る程……」

「流石殿！　そこまで考えていらつしやるとは……」

「ちようどいい、お前らにこれからの指示を伝える所だつたんだ」

俺は、手間が省けたと言いながら地図を取り出し二人の目の前に敷いた。

「まあ、もう策は考えてるんだが……お前らは、この北と南の森に五百ずつ兵を潜めさせておけ。俺が城で機会を見て狼煙を上げる。それを合図に敵を挟撃しろ」

「は、はい！　しかし、今夜ですか……？　いささか、早すぎると思うのですが？」

「当たり前だ且元、恐らく敵は勝利で浮かれている俺らを奇襲で殲滅する腹だろうからな」

「分かりました。この高虎、必ずや敵を討ち果たして見せます!!」

「ああ、頼んだ」

二人は失礼しますと部屋を後にすると、二人が兵に指示を出している声が聞こえた。

俺ははあと溜め息を吐いて、夜の戦に備えて眠りについた。

その日の夜、案の定敵は三千程の兵を引き連れてやってきた。

敵は城に殺到しようとする、城の近くで地面に大きな穴が空き、次々と兵が落ちて

いった。

「お、落とし穴じゃと!? 一体、何時の間にこんな物を・・・」

「お前らの投稿してきた兵に昼間に作ってもらったんだよ!!」

「お、おのれえ・・・」

俺はそれを確認し、兵に狼煙を上げさせた。すると、北と南の森から、それぞれ且元と高虎が率いる五百の軍勢が綱貞の軍勢に襲い掛かった。

いきなり挟撃にあつた浅井勢が恐慌状態に陥るのを確認すると、俺は兵に城門を開けさせるように指示した。

「最早敵は只の烏合の衆ぞ! 皆の者、敵をなぎ払え! 突撃い!!」

「!!」
「!!」
「!!」

俺の突撃の合図と同時に、城門が勢い良く開き戦の軍勢が敵に雪崩れ込んだ。

綱貞率いる三千の軍勢は完全に戦意を無くし、我先にと逃げ出す始末だった。

俺は馬を走らせると、敵の大將らしき人物を見かけた。

「貴様、吉備津綱貞か!」

「ひっ!」

「あつ!?! 待て、この野郎!!」

俺が馬を走らせ後を追うと、綱貞を守ろうと五人ほどの兵が道を阻んだ。

「そこを退けえ!!」

「ぎやああああ!!」

俺が槍を一振りすると、道を阻んだ五人が悲鳴をあげながら吹き飛んだ。

俺は槍を持ち替え、綱貞に向けて投げた。

「な、槍を投げ——ぐはあ?」

俺が投げた槍は見事に綱貞の胴を貫いた。

俺は、綱貞から槍を抜くと大声で敵に告げた。

「敵将吉備津綱貞、この長門昌秀が討ち取ったり!!」

大將が討ち取られたのを知ると、ある者は投降し、またある者は自害して果てた。

この戦で、俺らは死者は出なかったものの二百の負傷兵が出てしまった。

一方、敵方は三千の内、千五百は敗走し五百は死亡、残りの千は投降するという大勝

利に終わった。

「昌秀殿、まさかこんなに敵の動きが分かるとはまさに名将でございますね!!」

「殿、これで我らは負傷兵を除いても二千八百になりました。今すぐ、津川城を救援に行

きましよう!!」

「ああ、そのつもりだ」

昌秀はその日の夜のうちに軍勢をまとめ、五百の兵を城に残し二千三百の兵で敵の背

後を突くべく出陣した。そして、翌日の昼敵の陣まであとちよつとという所で休息をとらせた。

「殿、何故今仕掛けないのです?」

「阿呆、今の状態で攻めても兵は疲弊しきっている。だから、夜まで体を休ませ一気に叩くつもりなんだよ」

俺は、兵を休ませるタイミングも重要だと考えていた。

いくら敵に早く着いて突撃しても、最高のパフォーマンスが出来ない状態では意味が無い。

「お前も休んどけ。夜は忙しいぞ?」

「は、はい」

一方その頃、浅井陣営。

「ふふふ、重秀め。とうとう殺す時が来たようだな」

「殿、敵も我等の軍勢の前では歯も立たぬ様子。ここは、一気に畳み掛けるべきかと……」
「たわけ。力攻めをすれば、こちらの被害も相当な物になる。ここは兵糧攻めに決まっております」

「しかし、長戸勢は城に四千の兵しかおりませぬ。我等の兵は六千ですが、力押しすれば勝てぬ戦ではございませぬ。それに、斉藤家の援軍も気になります」

話しているのは、浅井の大将浅井久政と遠藤直経であった。

この遠藤直経、浅井きつての勇将で知略家としても知られていた。

久政達が話していると、陣の外が騒がしくなった。

「何じゃ一体……？」

「もしや……!!？」

「殿、敵襲です！長門勢が後方より奇襲をかけて参りました!!」

「な、何じゃと……？」

「殿、ここは撤退を殿は我らが引き受けます」

「う、うむ。任せたぞ」

久政が僅かな供回りを連れ逃げ去るのを確認すると、直経は手で自分の頬を叩いて気合を入れなおした。そして、槍を抱えて戦場へと向かった。

戦場に着くと予想以上に悪い展開だった、味方の兵はほぼ壊乱状態であった。

「皆の者、撤退じゃ！早急に撤退せよ！」

直経が号令すると、他の兵もそれに続いて撤退と叫び撤退し始めた。

しかし、それを長門家の兵は逃さんと追いかけた。

そして、味方の兵がやられそうなのを確認すると直経は槍を敵兵の胴へと突き出した。

「ぶ……!?!」

「何をしておる!?! 早く撤退せい!」

「は、はい!」

助けた兵が逃げるとの確認すると、目の前に栗色の馬に乗った敵将らしき人物が居た。

「へえ……浅井も中々の強者がいるな。」

「お主がこの奇襲を?」

「まあな、俺の名は長門昌秀。あんたは?」

「わしは遠藤喜衛門尉直経。さあ、いざ尋常に勝負!」

遠藤直経と名乗る男は、俺に向かって鋭い突きを放ってきた。

俺はそれを槍で受け流すと、反撃の突きをお見舞いする。しかし、直経も槍で上手く防いだ。

何十合かすると、互いに疲弊の色が見えた。

「ぬえい!!」

「おらあ!!」

直経が槍を繰り出すと、俺も同時に槍を勢い良く突き出した。

そして、直経の胴から血があふれ出した。

「ぐぶ……わしの負けか」

「そのようだな」

「ふっ、まさか貴殿のような将がおるとは……知っておれば、出陣しなかったものを」

「ああ、そうだな……」

俺はちよつと悲しそうな顔を見ると、腰の刀に手をかけ思い切り抜き放った。

直経の首は空しくも地面に鈍い音を出し落ちた。

昌秀 部下と領地を手に入れる

浅井を奇襲した次の日、昌秀は重秀から屋敷を与えられ藤堂高虎、片桐且元兩名は正式に昌秀の家臣と認められる事になった。戦場での武功もあり、昌秀が奪い取った吉備津城は永重に任されたがその代わり、霧生賊が使用していた霧生山の砦を元に城を建てる事にした。

現在、昌秀は高虎と且元を連れ自分の家となる城の建築現場に視察に見に来ていた。昌秀は渡された城の設計図を見て驚いた。

「これ、豪華すぎじゃね？」

「それはここが長門家の重要拠点になるからでしょう」

城の設計図は新卒の俺が入るにはあまりにも、堅牢でしつかりとした城になっていた。

おそらく津川城と同等かそれ以上だろうと思っていると、高虎が興味深そうに俺が持っていた設計図を見ていた。

「何だ、興味があるのか？」

「は、はい。実は私、城作りって大好きなんです」

「へえ、知らなかったな。じゃあ、この城の普請はお前に任せた」

「ええ!? 良いのですか? 私がやっても・・・?」

「だって城作んの大好きなんだから?」

「ま、まあ・・・」

「なら大丈夫だ。ま、やるだけやって見ろ」

俺はニカツと笑いながら設計図を高虎に渡して、手をひらひらとさせ去るとそれを高虎は口をあんぐりと開けて遠い目で見ていた。

(確か、藤堂高虎は築城の名人と聞いた事がある。まあ、任せて大丈夫だろう)

そう思いながら、歩いていると且元が後を追って来た。

「昌秀殿!これから領地の視察に行くのですね!お供します!」

「いや、昼寝に行くんだけど・・・」

「ふん!」

「痛い!?!」

且元のグーパンチが俺の顔面に減り込んだ。勢い良く壁に直撃する俺をみて、兵卒は楽しそうに笑っていた。

あの戦が終わってから且元は、戦の時よりも厳しくなった。

俺が何かと出かけようとする、何処に行くのです!? まだ仕事が終わってませんよ!』とか『仕事は山積みです。逃げないでくださいね?』と言った時の笑顔などはトラウマ物だった。

まあ、そんなこんなで現在はしつかりと俺の副官として働いてくれている。

「ほら、さっさと行きますよ。重秀様より、昌秀様はこの霧生山とその周辺の土地の管理を仰せつかったのですから。しめて、六万石ですよ? 六万石」

「いや、二回言わんでいいよ? 大体、俺に六万石の領地の統治なんて無理な話なんだよ。分かるだろ且二元?」

「泣き言を言わないでください。ほら、さっさと領地視察に向かいますよ」

「はいはい……」

俺は且元に引つ張られる形で視察に向かった。

視察は順調に終わり、津川城へ帰還すると城の人たちが慌ただしく動いていた。

俺が何かあったのか? と声をかけると、斉藤家が織田家に美濃を渡したという事だった。

「何だと……? つてことは斉藤家からの援助は受けなくなるのでは?」

「だからこんなに騒いでおるのだ!」

家臣の一人はそう言うのと走って行ってしまった。

(やれやれ……騒いだ所でどうにもならぬと言うのに)
心の中でそう思いながらも、重秀がいる部屋へと急いだ。

部屋の扉を開けると、既に永重と義重、珍しく重勝も集まっていた。

「おう昌秀。やっと来たか……話はわかつておるな？」

「ええ、城の中は大騒ぎですよ」

「まったく、道三殿は何を考えておるのだ……？」

義重が愚痴ると、重秀が重そうな体を起こした。

実は重秀、先の戦で腕に怪我を負い城の中で養生していた。

「道三殿を悪く言う出ない義重。道三殿も何か訳があつたに違いない」

「兄上、斉藤家が無くなつた以上、美濃は織田家の物となり申した。どうなされますか？」

「我らは浅井、織田とは仲がよくない。幸い、織田家の丹羽殿とは昵懇の仲だから、丹羽殿に仲介をお願いして本領安堵を願ひ出るか」

「父上、それはなりません。祖父様の事をお忘れか!？」

永重が熱心に話すのを見ながら、怪訝な顔をして俺は義重に事情を聞いた。

義重は、『ああ、まだ話していなかったな』と言うと事情を説明してくれた。

どうやら、重秀の祖父は斉藤家の要請の元出陣中、織田信長の父、織田信秀に殺され
たらしい。

その時から織田家と長門家の確執が始まった。ある時は、斉藤家の領地を越えてまで
織田家の領地を荒らしに行つた者や、またある時は単騎で織田の城まで乗り込んだ者も
いると言う。

「にわかには信じがたい話だな・・・」

「まあそうだろうな。だが、事実なんだ」

俺らがそんなこんなで従属か独立か話し合っていると、織田家から使者が参つたと伝
えられた。

重秀は怪我をしているものの、何とか体を起こして皆で広間に向かった。

広間に入ると長髪にリボンをつけた、綺麗な人が座っていた。

綺麗な人だな・・・と思いつつながら広間に腰を降ろすと、長髪美人は丁寧な頭を下げた。

「お久しゅうございます。重秀殿」

「おお、長秀殿か。ご謙遜で何よりじゃ」

「そういう重秀殿は腕を怪我なされたのですか？」

「まあ、浅井との戦で不覚をとってしまったわい」

「まあ、それは四十点です」

「がっはっは、相変わらず手厳しい」

重秀ががははと笑うと、長髪の女もふふふと笑い返し楽しそうに談笑していた。

俺はそれを見ながら驚愕の声をあげる。

「お、おいあの女、重秀殿のあの大音量の笑い声を聞いてもビクともせずには笑ってやがるぞ!？」

た、只者じゃねえ……」

「昌秀……お主、ご先祖様に失礼だと思わんのか？」

「はあ?ご先祖様って、俺の先祖は丹羽長秀かもしれないってただけだぞ」

「じゃから、あの女が丹羽長秀殿じゃよ」

「……は?」

俺は『いきなり何いいだすんだ』と永重の肩を叩く、すると長髪の美しい女性はこちらに向きなおすと『皆様、お久しぶりです。丹羽長秀です』と言いながらお辞儀をする。

それに挨拶を返す重臣一同と、長門一門……と啞然とする俺。

それに気付いた長秀?は不思議と思ったのか、声をかけてきた。

「あの・・・初めてお会いしましたよね？」

「へ？ああはい、はじめまして。長門昌秀っていいいます。以後、お見知りおきを」
「まああなたが長門昌秀殿ですか？」

長秀？は俺の名前に反応すると、先の戦の話をした。やれ、どうやって敵を殲滅したのだの、どうやって敵の襲来を知ったのかだのと・・・延々と続けられた。

重秀はそれを見かねたのか、長秀？に早速用件を話すようにと伝えた。

「ああすいません。私とした事がつい話題がそれてしまいました」

「何構わんよ。それで用件とは？」

「はい、それでは・・・」

一門、重臣一同はしんとした空気だ。息を飲んだ。

そして長秀？から出た言葉は予想外な言葉か出てきた。

「恐れながら申し上げます。重秀殿、織田に降ってもらいませんか？」

昌秀 政務にウンザリする

長秀の発言に長門家の面々は、緩やかな表情から一変して戦場の表情になった。

流石の重秀も顔を険しくする。

「長秀殿、冗談が過ぎますぞ。」

「冗談ではありません。現在の当主、信奈様は天下を獲るお方です。その補佐を重秀殿の御願いしたいのです」

「それは長門家に宣戦布告と見てよろしいか？」

「いえ、織田家と長門家の確執は十分に理解しております。しかし、重秀殿の父君、長門重門を殺したのは先代の織田信秀でございます。現在の当主、織田信奈様は長門家との戦いを望んでおりませぬ。何卒、ご英断を期待します」

「うむ……」

確かに重秀殿の父君を殺したのは織田信秀であるが、そんな屁理屈で恨みを忘れる長門家ではない。

現に重勝殿なんかは、拳を震わせながら握り締めていた。

しかし、重秀殿も多分分かってるだろう。このまま、恨み続けていても何もなら

ない事を……

現在、長門家は非常に危険な状態にある。西には浅井、東には織田と大大名に囲まれている。

しかも、どちらとも中が悪くこの二つに手を組まれては、長門家は滅亡する。結局その日は、答えを出すのはまた今度という事で話がついた。

長秀？から降伏勧告があつた一カ月後。ついに霧生城が完成したと言う。

大工曰く、『元になる砦があつたので作業が楽だつた』との事。

俺は自分が住む城を楽しむにしながら早速且元を連れて向かつた。

城に着くと、予想以上の立派な城が建つていた。あまりの迫力に啞然とする。

すると、築城を命じていた高虎が走りながら向かつてきた。

「殿！……どうですか？　自分が発想した物をすべてつき込んで見ました」

「お、おお……どう思う？　且元？」

「啞然、と言うしか無いです。昌秀様……」

二重の堀に、鉄砲が撃てる穴の開いた狭間、部隊が出撃できる入り口、どうやら高虎に築城を命じたのは正解だつたようだ。特に面白かつたのは、この城は入り口から天守まで螺旋で作られている事だつた。

その日は、城が完成したお祝いで長門家の重臣や、重秀殿達がやって来て宴を催してくれた。

重秀はこの城を作った高虎を凄く褒めていて、高虎も顔を赤らめながらうつむいていた。

翌朝、俺は且元の部屋を訪れると政務に没頭しているようだった。

良く家臣達を纏め上げ、指示を下していた。

「精が出るな。且元」

「昌秀様も手伝ってくださいよ。新しく得た領地なので、政務も忙しいに決まっています」

「それはそうだが……」

俺が苦笑しながら呟くと、且元はふふふと微笑んだ。嫌な予感がする……

『それじゃあ、俺は領地の見聞でも……』と逃げようとする、頭を思い切り掴まれる。

俺の頭が万力で締め上げられているようにミシミシと音を立てた。

「いのででででででででっ!?!」

「あなたは……仮にもこの土地の領主でしょう! ほら、さっさと仕事をしますよ! 私

も手伝いますから……」

「分かったよ……」

しよんぼりしながら広間にある自分の席に着く。この日は釣りにでも行こうと思つたのだが、仕方が無い。

政務に没頭して数時間、収入の計算をしたり、村人の問題を解決したり、家臣同士のトラブルを解決したりとウンザリする数時間だった。

休憩がてら茶を飲みながら団子を食べていると、突然且元と、先程見聞に行かせた高虎が浮かない表情で聞いてきた。

「昌秀様、これから長門家はどうなるのでしょうか？」

俺はその問いに『さあな』と冷たく返す。すると、高虎が突然泣き出した。

俺が『どうした？』と聞くと、『私は、今奉公している長門家が一番です』と泣きじゃくりながら答えた。

「そうか……この家が好きか」

「私もです昌秀様。民を見れば分かります。重秀様は民に好かれていらつしやる。民には善政を敷き、家臣や自分達にも公平に処罰を下す。そんな重秀様だからこそ、この長門家があるのだと私は思います」

「お前ら……」

「だからこそ、此度の降伏勧告が気になります・・・重秀様はどう答えるのか」
「まあ重秀殿は英明な方だ。頭では分かっているんだろう、しかし他の一門がどう答えるかだな」

団子を頬張りながら、重勝殿の表情を思い出す、あの表情からして相当父親の事を思っていたのだろう。まあ、気持ちは判らんでもないが・・・

且元と高虎は不安そうな顔をしながら、外の景色を見ていた。

霧生城の天守から見える景色は絶景で、先程見聞していた村々が一覧でき、村々の間に川が流れ、まるで巨大なキャンパスに描かれた風景画を見ているようだった。

その景色を見ながら二人はいつの間にか笑っていた。

「どうした・・・いきなり笑い出して」

「昌秀殿は長門家の事、どう思っているのです？」

「どうって・・・そりゃ、俺だって一門衆の一人だぜ？ 心配位するさ」

俺が当然だと言わんばかりに頷くと、二人は表情を一変させ真剣に聞いてきた。

それと同時に、俺の湯飲みがピキンと音を立てひびが入った。

「昌秀殿、それは長門としてですか？ それとも丹羽昌秀としてですか？」

且元の言葉に体が固まる。こいつらに俺の正体は明かしてない筈だが、どうやら重秀殿達が口を滑らせたようだ。

ハアと溜め息を吐いて、一度茶をすすする。且元はじれたいのか、急に立ち上がり俺の胸ぐらを掴んだ。

「どうなんです！　　もしや、あの丹羽長秀殿に内通するおつもりですか!？」

「何でそうなる・・・?」

「それは、殿が先の会合で何も言わなかったからです」

先の会合とは、長秀?が来た日の事であろう。二人が言うには、会合の時俺は他の一門衆が話し合っているのに一人だけ何も言わなかったと言うのだ。

「確かに何も言わなかったが・・・それは俺がよそ者だからだ」

「しかし一門衆に変わりはありません!」

「いいか?　俺は重秀殿に命を救われて養子になった、そんな俺が口を出してみろ。重勝殿辺りが騒ぎ出すぞ?　　そうなれば織田や浅井も付け入りやすくなる」

二人は『成る程・・・』と言いながら手を叩いた。主君を疑うなよ・・・お前ら。

「なれば昌秀殿は如何すべきだと思えますか?」

「情勢的に言ったら、織田に降るべきだろうな。」

『そんな!』と落ち込む高虎であったが、すぐに俺が付き足した。

「まあ、長門が天下を獲りにいくんだったら話は別だがな」

どういう意味です?と二人は首をかしげた。

実は昌秀、霧生城に入ってから諸国にスパイを派遣していた。

当然、尾張と美濃、近江にも送っている。

「今の美濃は混乱状態にある。恐らく、斉藤道三の子、斉藤義龍は美濃讓渡に承知すまい」

「と、いいますと?」

「つまりだな。義龍は稲葉山城で独立する、それを織田が討伐するため兵を起こす。そして、長門家にも両者から同盟の使者が来る。という事は?」

「織田と斉藤を戦わせ、漁夫の利を得る、と?」

且元と高虎は持っていた湯飲みを置いて真剣な眼差しで見る。

俺がニヤリと笑い、『その通り』と答えてまた団子を一口含んだ。

「そして、織田が堅牢な稲葉山城を落とすには方法は1つしかない。織田は兵力を消耗させたくないからな、力攻めはしないだろう・・・という事は?」

「内より攻める・・・ですね?」

且元が答えると高虎も成る程と頷く。・・・こいつら、敵になつたら怖いな。

俺はゴホンと咳き込みながら話を続けた。

「稲葉山城を落とす鍵。それは、軍師竹中半兵衛」

「聞いたことの無い名ですね」

「そりやそうだ高虎。長年、美濃が隠してきた秘密……らしいからな」

「それも未来の知識という物ですか？」

『お前らその事誰から聞いたの?』と聞くと、二人とも『永重殿』と茶を啜りながら答える。

「……どうやら予想以上に、俺の義兄は口が軽いらしい。

茶で喉を潤すと、政務がまだあつたのを思い出す。

「しまった、まだ仕事残ってた……とりあえず、この話は終了。ほれ、自分の仕事に戻った戻った」

「昌秀殿、何故その事を重秀殿に進言しないのです?」

俺は書簡に当ててた視線を再び且元に向けた。

ハアと再び溜め息を吐いて書簡を置くと、『溜め息ばかり吐かないでください』と二人に怒られる。

「いいか? 過去を変える事は未来を壊す事になるんだぞ。ここで俺が助言して、未来が変われば一大事だ。……それに」

「それに?」

「……面倒くさい」

小声で俺が言うのと、二人の顔から笑みが消えた。

そして、その一言が地雷になったのか、二人の湯呑みが握力で破裂する。破裂した湯呑みを見ながら顔を青ざめさせる俺。

「昌秀様……」

「殿……」

「な、何だよ……」

「あ、貴方という人はあああああ!!」

「ぎゃあああああ!!」

その晩は、城主である昌秀の悲鳴と且元の怒声と、それを諫める高虎の声で城の者は一睡も出来なかったという。

これは余談だが、次の日に寝不足で多数の人が倒れたのは言うまでもない。ちなみに城主長門昌秀は、倒れた人の分まで仕事をやらされたと言う。

本人曰く、『且元を怒らせると地獄を見る』との事。

しかしその次の日に、昌秀の言う通り斉藤家から同盟の使者が来て、重秀はこれを快く同意した。

ここに、織田対斉藤、長門連合軍の戦が始まろうとしていた。

昌秀 美濃へ向かう

ある日、城で政務に励んでいると突然、重秀殿からの呼び出しがかかった。

俺はすぐに津川城へ向かう為、馬を走らせた。

津川城に到着し、重秀殿の部屋を訪ねると一門である重秀、重勝、永重、義重が重い表情で座って待っていた。

どうやら重秀殿の斉藤家との同盟で悩んでいるらしい。

「父上が斉藤家と同盟を結ぶとは・・・と言う事は、織田と戦を始める気か」

「しかも斉藤家からはすでに援軍要請が来ているらしい・・・父上はこれにどう対応するのか」

「無論、すぐにでも援軍を出すに決まっておろう」

重勝は当然だと言わんばかりに強い口調で言う。

重い空気の中、昌秀が来た事に気付いた永重が待つてましたとばかりに問いかけた。

「おお、昌秀か。待つておつたぞ、お主が今回の斉藤家の援軍要請をどう見る？」

「義理を重んじるのなら与すべきでしょうな」

「おお！流石は先の戦で大功を挙げた昌秀じゃ！やはり言う事が違う」

重勝は期待通りの答えに、気分を良くし笑い始める。

しかし昌秀は、『しかしながら・・・』と言葉を続けた。

「大局を見るのなら、今からでも織田に与すべきかと存知まする」

「何じやと・・・!?!」

『そのような事はありえん!』と感情が昂ぶる重勝を永重、義重が『まあまあ』となだめる。

当主である重秀は俺らの会話を目を瞑りながら聞いていた。そして、ゆっくりとまぶたを開けると穏やかな口調で尋ねる。

「昌秀、何故そう思う?」

「はい、織田は今川を破って三河の徳川と同盟し後顧の憂いを無くしました。今の織田軍は士気が盛んで勇将ぞろい。それに比べ齊藤家は道三殿のご子息が家督を奪いましたが、義龍殿は成る程、一軍の将としては優秀だと思えますが大名としては些か道三殿に劣ると存じます。さらに、義龍殿は傲慢でいらつしやいます。あれでは家臣からの不満が溜まるのは必定かと・・・」

「ふむ、織田は齊藤に調略を仕掛けると申すか」

「はい、恐らくは軍師竹中半兵衛辺りかと・・・」

「成る程のう・・・」

昌秀の答えに重秀は満足そう頷くと扇いでいた扇子を閉じた。

重勝達は昌秀の言葉を唾然としながら聞いていた。

その中、義重が恐る恐る尋ねる。

「昌秀、お主何時の間に他国の情報をそんなに……」

「霧生城に移った際、他国に間者を放っております。当然、尾張や美濃、近江にも」

義重は『何と……』と感嘆の声を上げると、永重達に視線をそらす。

永重達も昌秀の戦略眼に驚きの声を上げた。

しかし、重勝は頑として援軍要請を受けべきだと主張する。

「兄上、我らは先代より斉藤家の支援のお陰でこれまでやって参りました。今こそ、斉藤

家に恩を返すべきではござらぬか！」

「重勝よ。お主の言うことは正しい、が……大局を見よ。昌秀の言うとおり織田の士気

は高く、奴らは大量の鉄砲を所有しておる。それに比べ我らは、六百丁程しかないのだ

ぞ？」

「しかし、美濃三人衆は健在です。それに、鉄砲が何だと言うのです？ そんな物、我等

の騎馬隊の突撃を見たら蜘蛛の子を散らすが如く逃げてゆきます」

重秀が『うむ……』と出兵を渋ると、重勝がもう一押しとばかりに言葉を続けた。

「兄上、斉藤家を見捨てれば長門家が周りからどう思われるとお思いか！」

「されど浅井はどうする？ 我らが出兵がすれば、浅井がこの国を侵すとも限らんぞ？」

昌秀を除く、四人が頭を抱えて悩みだす。俺はそれを見かねて口を挟んだ。

「恐れながら、重勝殿ほどの程度の兵を援軍に出すおつもりか？」

「我等の兵力五千の内、三千をだすつもりじゃ」

そんな事をすれば浅井が後方より攻めて来た時に対応できなくなる。出すとしても千程度で体面は守られる筈だ。恐らく、重勝殿はこの期に乗じて織田に復讐しようとしているに違いない。

重勝殿は五千とは言っているが、俺の持っている二千五百の兵は何故かカウントしてないらしい。

すると義重が『そのような事をすれば浅井からの侵攻に耐えられませぬぞ』と助言してくれた。

『さればどうするのじゃ！』と悩む重勝とうくんとずっと悩んでいる永重。

重秀は悩みに悩んだすえ、俺に斉藤家救援の兵を出すようにと命令を下した。

俺は渋りながらそれを了承し、早速軍備を整えるため城へと戻った。

稲葉山城の城下は戦が近い事があつてかどんよりとした空気に満ちていた。話を聞

くと、織田がこの美濃へと向けて出陣したらしい。それで民が不安になっているのだつた。

俺は稲葉山城へと軍勢を連れて入城した。すると、図体のでかい人物が笑いながら近寄ってきた。

「おお、長門家からの増援か。待つておつたぞ」

「斉藤義龍殿とお見受けいたす。自分は長門昌秀と申します。手勢二千を連れて加勢に参りました」

「うむ、大儀である。早速軍儀を始めたい、参るぞ」

義龍は最低限の挨拶をした後、すぐに行つてしまった。

その態度を見て、且元と高虎が呟く。

「何ですか、あの態度は！ 私達に加勢に来てあげたつて言うのに……」

「落ち着け且元。逆に噂どおりの人物で助かる」

「しかし、あの態度は殿を家臣扱いしているではありませんか！ あの野郎、ここで斬り捨てて——」

背中に背負つてる大太刀に手をかける高虎に『やめい！』とチョップをかます。

二人を諫めながら広間に向かうのは骨が折れた。軍儀の際でも、所々で嫌なオーラが感じてすごくヒヤヒヤした。

軍儀を終えて俺らは稲葉山城を出て、墨俣の近くの山に陣を張り敵の様子を見た。

翌日、且元と高虎を連れて城下町へと向かった。軍勢は且元の父である、直貞殿に任せた。

城下町を見て回ると、どうやらお祭りらしく異様な賑わいを見せていた。

先日のあのどんよりとした空気が嘘のような賑わいで、本当に戦があるのかと疑問に思うほどだった。そんな中、且元が無言で甘味処と書いてある店を凝視していた。

「何だ？腹減ったのか？」

「い、いえ・・・別に食べたいわけでは」

「そうか？それじゃあ、俺と高虎は食って来るからお前は他の所見て来いよ」

素っ気なく言いながら二人で向かうと、それを後ろから『嘘です！本当はすごく食べたいです!!』と叫びながら且元が追いかける。

途中、偉そうな三人組と見覚えのある男と女子二人が騒いでいた。

何だ・・・？と思いつながら近づくと、どうやら身分がどうたらで騒いでいるらしい。

猿風情がどうたらこうたらだのと話しているのを見て、思わず猿と呼ばれている男に視線を向けた。

「・・・良晴？」

「殿、あの者と知り合いなのですか？」

「そう言えば初めて会った時の昌秀様と似たような格好をしていますね」

まさかこの時代に来ても高校の制服を着ているとは・・・目立つだろうに。

俺は『あの馬鹿・・・』と毒づくど、彼らの騒ぎはヒートアップしていた。

しかし、あいつはこんな所で何やつてるんだ？ それに後ろにいる女の子達は一
体・・・

そんな事を考えている間に、三人の内の一人が刀に手を当てた。それを確認すると咄
嗟に男が刀に置いた手を捻り上げた。

「うっ!? な、何だ貴様!？」

「その家紋・・・貴様ら浅井の連中だな？ 何故、この美濃にいる？」

「そういうお前は長門の者かっ!? 重秀殿が我らに通行の許可を出されたのだ。浅井と
の和睦を条件にな」

「そういう事か・・・」

「分かったらその手を離せ！もう良いだろう！」

「悪いがそういうわけにはいかないなあ・・・」

何だと？と聞く男は、そのまま訳も分からぬまま投げられた。もう一人の男も突
然の出来事に目をパチクリさせる。男は遅く状況を理解すると、『おのれ！長門家風情

が!』と刀を抜いて上段で振り下ろした。

且元が危険を知らせるが、振り下ろされた筈の刀は途中で折れてしまっていた。少したつと、男の後ろに折れた刀身が地面に突き刺さる。突き刺さる刀身を見て、男は腰を抜かした。

刀をしまうと、周りの見物人から歓声が上がった。俺は『どうもどうも』と歓声に応えると、視線を再び両チームに戻した。

「後はあるただけだが・・・どうする?」

「いえいえ、私はあなたと殺し合いをするつもりはありませんよ。長門昌秀殿?」

「俺を知ってるのか・・・?」

「ええ、貴方の戦ぶりを知らぬ者はいません。私は浅井長政と申します。以後、お見知りおきを」

昌秀は間者が浅井の当主が変わったと言っていたのを思い出した。

長政はニコリと笑うと、『それでは私達は用事がありますので』といって去ってしまつた。

俺はハアと癖になつてしまつた溜め息を吐くと、良晴の方に振り向いた。

「よう、久しぶりだな?良晴」

「お、お前・・・昌秀か?」

良晴は驚きの顔を隠せないよう、その後ろからは、長髪で広いおでこの女の子が『猿人間の知り合いですか?』と良晴の方から顔を覗かせる。虎の被り物を頭に被った女の子は、『良晴……誰?』と鮎を食べながら尋ねた。

良晴は『そうだ!自己紹介しなきゃな!』と手をポンと叩いて、俺らが行こうと思っていた甘味処へと意気揚々と向かった。後の二人もそれに続き、且元と高虎もついでに行った。

俺は変わらない友人を見て少し安堵しながら、浅井の当主が来た理由を考えていた。

昌秀 旧友と再会する

赤い旗におそらく団子と思われる絵と甘味処と言う字が書かれ、赤い傘の下に木で出来た長い椅子を見ながら自分がタイムスリップした事を改めて確認する。

この店は、元は京の都で営業していたらしいのだが相次ぐ戦乱のせいでこの美濃に流れていて現在に至る。何しろ、本場の京の茶を格安で味わえるのだから当然人気があった。

店の人から出された緑の濃いお茶を見ながら、『おお、雰囲気でてるな』と言いながら団子を一口、口の中に入れた。

団子の甘みと淹れたてのお茶の渋さが絶妙に合っていた。

良晴は団子を満喫している俺を見ると、呆れ顔で言った。

「久しぶりに会ったと思つたら、案外順応早いなお前」

「それはお互い様だ。順応しなきゃ、この時代では生きてはいけなからな」

串を口に銜えながら高虎と且元の団子の奪い合いを見る。

「昌秀は何時からこの時代に？」

「うくん、大体一ヶ月とちよつと前かな」

「そうなのか？　じゃあ、俺とあんまり変わらないな」

良晴も食べ終わった団子の串を皿に戻すと、連れの女の子二人へと目線をやった。

「そういうば良晴、そいつら誰だ？　それに今何してんの？」

「まあ、いろいろあつただけだよ……」

良晴はこれまでの事を大まかに説明する。

自分が木下藤吉郎の代わりかもしれないという事、織田に仕官した事、姫武将の事など。俺がビツクリする事をべらべらと話した。

昌秀も今までの経緯を話す。

互いに驚く事はたくさんあり、混乱したがとりあえず落ち着く事にした。

「まさか、光秀と利家も女になつてるとは……一体何なんだよこの時代は」

「まあ気持ちちは分かるけどよ。とりあえず落ち着こうぜ？」

「あ、ああ……」

団子でも食べながら落ち着こうと手を伸ばすと、皿にあつた箸の団子が消えていた。

『ん……』といい笑顔をしながら後ろを振り返ると、且元が口をもぐもぐと動かしていた。

「且元……お前俺の団子食つたら？」

「失礼な！ 何故主の団子を家臣である私が盗むのですか！」

「ほおアクマでも白を切るか？ ならせめて口についてるタレをとってから言え」

『げっ!』と言葉を濁す且元のでこにすかさずデコピンをかます。

はあと溜め息を吐くと良晴が気を使って、団子を差し出した。ここで受け取るとプライドが許せないので、無理して『いらぬ』と断った。

「成る程ねえ・・・竹中半兵衛を調略に来たか」

「そういうお前は何しに来たんだよ」

良晴は茶を啜りながら尋ねると、光秀も興味津々に話に入ってきた。

「そうです！ 長門家の人が何しに美濃に来たんですか！」

「美濃に加勢に来たんだよ。義龍殿から援軍要請が来てな、重秀殿がそれを了承して俺が派遣されたわけだ」

「つてことは・・・俺達つて敵同士か？」

啞然とする良晴に茶を啜りながら『ま、そういう事だな』と冷たく返した。

光秀はぶつぶつと後ろで、『長門昌秀つて何処かで聞いた事があるような』と呟いていた。

且元達が食べ終わるのを確認すると、『そろそろ行くか』と腰を上げた。

不安そうに見る良晴を見て、ニカツと笑いながら『安心しろ。死にはしねえから』と手をヒラヒラさせながら陣へと戻った。

昌秀の姿が見えなくなった所で光秀が『あつ!』と店に響く声を上げた。

良晴が慌てて『どうした十兵衛ちゃん!』と視線を光秀へと移す。

「あ、あれが……浅井勢と霧生賊を僅か8百の手勢で打ち破ったと言う長門家の謀神!」
「昌秀つてそんなに有名なのかつ!」

「当たり前です! 前の戦で浅井勢六千は壊滅ですよ!」

驚愕の顔が隠せない光秀は『何てことです! あんな奴が加勢に来てるなんて……』と嘆く。

しかし良晴は最初こそ不安になったが、笑いながら昌秀が向かった方角を見た。

「あいつは絶対に俺らの敵にはならないさ」

「何で猿先輩はそんな事が言えるんですか!」

「大丈夫だって、あいつは俺の友達だから——」

(恐らく、長政も同じ魂胆だろうな……)

そう思いながら道中を歩いていると、二人は心配そうな顔をしながら先程買った鮎を
ほお張る。

「殿、これからどうするのです?」

「そうですよ。昌秀様の友人が織田にいらるとなると、昌秀様も攻めにくくなるのでは?」
「いらん心配だ。あいつは簡単に死ぬ玉じゃないしな。とりあえずは泳がせとくさ……」
陣に帰ると、俺はすぐに五人ほどを密偵として稲葉山城城下へと置いた。

その翌日、密偵から稲葉山城から爆発音が聞こえたと一報が入る。

(良晴達め……動いたな)

そう思った俺はすぐに軍勢を引き連れ稲葉山城へと向かった。

稲葉山城へと着くと、城の中はもぬけの殻でどうした事だと辺りを確認すると、良晴
達が目の前を走って来た。

「あつ!? 昌秀、何でこんな所に!」

「よう、どうやら半兵衛殿が城を落としたようだな?」

俺の問いに良晴が答える間もなく、光秀が『それより、貴方の後ろの軍勢は何ですか
!』と物凄い形相で問いかける。

「何って……俺は義龍殿が危険だと思つて援軍に來ただけだ。何かおかしい事でも?」

「うっ、それは……」

「・・・本当の目的は何・・・？」

虎の被り物被った犬千代が怪訝な表情をしながら問いかける。

「いや・・・どうやら義龍殿がいらないようだし、この城は俺らが預かろうと思つてね」「稲葉山城を横取りするつもりですか!？」

「おいおい光秀殿、あなた方は城を落としたにも関わらず逃げのだから？　じゃあ、俺らが預かつてても問題はないじゃないか」

「あくまで白を切りますか・・・いいでしょう!」

光秀が腰の刀に手をかけると且元達もそれぞれの武器に手をかけた。

それを見て良晴がまあまあと光秀をなだめる。

「くっ・・・分かりました。今回は猿先輩に免じて、この城を預ける事にします」

「おう、信用してくれてありがとな」

「よくも抜けぬけど・・・」

「まあまあ、信じて良いんだな？　昌秀・・・」

爽やかな笑顔で『ああ・・・』と頷くと、良晴は視線を後ろの少女へと移して走り去つていった。

俺は良晴におぶられている少女を見ながら、『もしかしてあれが竹中半兵衛?』と瞬きしながら見送つた。

人物紹介

片桐且元

近江の生まれで父直貞と共に、宮部継潤と浅井を出奔して長門家に仕える。

最初こそ昌秀の事を『本当に大将何ですか?』と馬鹿にしていたが、霧生賊討伐の後に改心して『昌秀様』と呼ぶようになった。

真面目で仕事をキツチリこなすが、特に秀でている部分が無いのがコンプレックスになっている。

密かに高虎の万能さを憧れており、いろいろ教えて貰っている。昌秀にも軍略の事を教えて貰いながら日々励んでいる。

黒髪の腰まであるロングヘアでパツチリとした黒い目が特徴的。

身長は昌秀のちよつと小さい位でスタイルは悪くは無いが、その中で胸が無い事を気にしている。

仕事をサボる昌秀を叱っているのが印象的に写るが、本当は面倒見が良く優しい性格

をしている。

得意な武器は無く主に刀を使って戦う。

藤堂高虎

近江の生まれで浅井家に仕えていたが、その卓越した能力のせいで邪険にされやむなく出奔。

その後は、僅かな供回りを連れて霧生賊を裏から支配して長門家に宣戦布告をするが長門昌秀に敗れる。

軍略を少し囁んでおり、また政治面でも秀でた才を持つ万能タイプ。

その才覚は昌秀から『いつそお前が城主やれば？』と言われるほどで、部下にも慕われている。

忠義や情に厚く、冷静沈着な性格の持ち主で戦の時でも皆の信頼は厚い。冷静沈着の衝撃が強いせいか、他の兵士達からは氷のようだと勘違いされている。

本当は動物好きで温和な性格をしており、よく動物を見かけると目の色が変わり変な声を上げる。

ちなみにこの事は昌秀と且元しか知らない。

自分の固い口調がコンプレックスで、昌秀のフレンドリーな面を尊敬している。

肩まである黒髪ポニーテールと水晶のような目が特徴的で、身長も昌秀と変わらない位でスタイルも抜群。

中でも胸が大きく、それを見ると且元は『チツ…』と舌打ちをもらす。

武器は敵を武器ごと切り裂く大太刀で馬上からの攻撃を得意としている。

また、昌秀の事は『殿』と聞いた人を落ち着かせる澄み渡る声で呼ぶ。

長門昌秀

現在のプロフィールです。

本作の主人公。

最初の頃は武芸は囁んでいる程度だったが、重秀の命令で長門家三人から鍛えられる。

結果、軍略、謀略が文句の無い能力になったが、武芸は永重と渡り合える程度で、政治は部下に任せきりの状態である。

得意な得物は槍と刀で、馬上槍は長門家の中でも卓越している。槍を構えるとき、槍をクルリと回すのが癖になっている。

謀略家で厳しい事を口にするが、実際は部下思いの優しい人物。

人の感情を読むのに敏感で、人をからかうのが好きだったりする。

良晴とは中学の時から腐れ縁で、良晴の話をうんうんと大人しく聞いているのがよく見かけられている。

ちなみに家紋は丸に三つの蜻蛉が書かれた三つ蜻蛉。

昌秀 鬼柴田と槍を交える

昌秀が稲葉山城を預かるといふ名目で奪取してから数日後、義龍が稲葉山城の返還を要求しに家臣を連れて訪れた。

「昌秀殿、よく城を守ってくれた。早速城を返して頂きたい」

「ええ、そのつもりです。それでは我らはまた墨俣辺りに陣を張っております」

「ああ、兵糧や武器はこちらから支給させてもらおう。供に織田を倒そうぞー!」

「ははは、そうですね」

二人は供に軽く笑つて見せていたが、後ろにいる家臣達は笑わず真剣な顔で二人の会話を聞いていた。

昌秀が『それではこれにて』と立ち去ろうとした所、義龍が『最後にもう1つだけ』と声をかけた。

「・・・何か?」

「そなた、何ゆえ稲葉山城を取らなかつた? そうすれば、長門家の所領は一気に増えると言うのに・・・」

「ははは、稲葉山城を取るなんてそんな大層な野望は持ってませんよ。流石はママシの

道三のご子息ですな、いやはや考える事が違う」

そう言つて昌秀は義龍の前を立ち去つた。

義龍は昌秀が行つたのを確認すると、持つていた扇子を床に投げつけた。それを見た家臣一同は肩をビクツツと震わせた。

（おのれ・・・一体何を考えているのだあの者は。最初に会つた時からあ奴の目は気に入らんかつたが、今理由がわかつた。似ているのだ・・・親父殿とあやつが）

義龍は怒りで荒れた呼吸を落ち着かせて、美濃を見渡せる天守に登つた。

稲葉山城の天守からは、美濃を一望する事が出来る。見える景色の中で、昌秀が陣を張ると言つていた墨俣周辺も一望出来た。

墨俣の地は複数の川の合流地点となつており、そこに城を築かれれば稲葉山城は危険な状態になる。

しかし、後ろに長良川という川が通つているため、築城部隊は川に足をとられながら渡らねばいけなかつた。

無論、義龍も馬鹿ではない。築城部隊を確認すれば、すぐに軍勢を派遣する。故に墨俣の地は、死地とされてきた。

その墨俣の地の近くに、昌秀が陣を張つたので墨俣の地に築城をする事は不可能である。

自分の勝利を確信した義龍は墨俣の地を眺めながら、クククと笑い始めた。

昌秀は墨俣の地に帰る途中、城下に良晴達の人相書きを見つけた。

笑いながら手にとると、高虎が『殿、何かおかしい事でも?』とたずねた。

「いや、変わらない友を見ると思わずな・・・」

「はぁ・・・」

「ま、俺の独り言だと思って気にしないでくれ」

「承知しました」

墨俣の地に戻ると早速陣を作らせ、自分は木に登り墨俣の地を眺めた。

(良晴はすでに尾張に戻っただろう。となると、今夜辺りでも築城部隊が来るかもしれないな)

そう考えると、俺は今夜に向けて部隊を早めに休ませた。

その日の晩、確率は低いと思ったが案の定、織田の兵が墨俣の地に築城を始めた。

その軍勢を見ると且元が『昌秀様、好機です。奇襲をかけましょう』と指を指しながら呟いた。

「・・・率いているのは誰だ？」

「殿、恐らく敵の大將は柴田勝家かと存じます」

「鬼柴田か・・・あまり戦はしたくないが」

仕方がないと膝に手をついて立ち上がる、それに続いて且元達も勢い良く立ち上がった。

俺は馬にまたがり槍を構えると、クルリと槍をまわした。

且元と高虎は陣へ残し、俺は少数を率いて出陣の用意をした。

「やるか・・・皆の者、突撃せよ!!」

「おおおおおおおおお!!」

長門勢は鬨の声を上げて、織田勢へと向かった。

勝家らしき人物は、味方を鼓舞して闘つてはいるが織田の兵は奇襲に驚いて逃げていった。

「あいつが柴田勝家か・・・どれ、一度手合わせをお願いしようか」

「あつ昌秀様!」

馬を勝家らしき人物へと走らせる。

川を馬は強引に渡り、陸にあがると真つ先に勝家らしき人物へと向かった。

「柴田勝家殿とお見受けいたす! 某、長門昌秀と申す者。ぜひ、槍合わせをお願いした

「いー」

「へえ、あたしと闘おうなんていい度胸してるじゃないか!!」

「ちつ、勝家も女なのかよ」

「ん? 何か言ったかお前?」

「いや、なんでもない」

俺はハアと溜め息を吐くと、すぐに槍を構え勝家に突撃した。

馬上から思い切り十文字槍を振り下ろすと、勝家は槍を横にして防ぐ。

そして、『ハア!』と言う掛け声とともに俺の槍を弾いた。

「うおっ!? お前、本当に女かつ!? もしや男だったりして——」

俺が彼女の予想外の怪力に驚いていると、彼女は顔を赤らませながら俺の頭より高く跳び、槍を振り下ろしながら言った。

「あたしは女だあ!!」

「ぐっ……」

かろうじて槍で防いで持ちこたえるが、あまりの怪力に押し込まれそうになる。

そしてとうとう馬が限界に達し横に倒れた、俺は勝家の怪力で吹き飛ばされるとその場は土埃に包まれた。

「くう……痛つてえ。何だよあの馬鹿力」

「これで終わりだ！」

勝家は昌秀を見つけると止めの一撃を全身全霊の力を込めて槍を振るうが、何かに足が引つかかり体制を崩した。

前のめりに倒れ、『一体何が…』と眩きながら足を見ると馬の手綱が足に引つかかっていた。

「何時の間に…」

「さつき土埃があがった時に、巻きつけておいたんだよ」

「貴様っ！ あっ…」

倒れながらも槍を振るおうとするが、昌秀の槍に弾かれ三メートル程はなれた所へと刺さった。

昌秀は勝家の目の前で腰を下ろすと、笑いながら声をかけた。

「いやあ、あんなに強いとは予想外だったよ。瓶割り柴田の名は伊達じゃないってか？」

「…お前、長門昌秀って言ったな。猿の友達なんだって？」

「猿？ ああ良晴の事か。確かに友達だが、そんな事より…」

昌秀が手を挙げると、三つ蜻蛉の旗を掲げた数人がその場を囲んだ。

「あたしを捕らえるつもりか。くっ、こんな姿姫様に見せられない！ 今ここで——」

「この馬鹿……」

咄嗟に勝家の首を打つと、勝家はうぐぐと氣絶した。

……少し強く打ちすぎたかな。

すると、一人の侍大将が歡喜しながら昌秀に言った。

「昌秀様、やりましたね！ 柴田勝家を捕らえたとなれば、昌秀様の名も上がりましょう！」

その侍大将に俺は馬鹿者！と一喝した。

侍大将はビクツと肩を震わせ、『出過ぎた事を申しました』と陣へと引き上げていった。

「伝令！」

「はっ！……」

「高虎達に伝えよ。俺はこれからこいつを尾張へ送り届けるとな。後、重秀殿たちや義龍には何とか上手くごまかしてくれって伝えてくれ」

その言葉に伝令は思わず、『はっ……？』と問いを聞き返す。

昌秀は勝家の体をおぶると馬の手綱で自分へ縛りつけ、兵から別の馬を借りて乗ると自分の槍を家臣に渡し、代わりに勝家の槍を拾った。

「聞いてなかったのか？ 俺はこれから尾張へ参ると申したのだ」

「昌秀様！ それでは死ににいくようなものです！ ご再考を！」

「それは俺の命令が聞けないって事か？」

「・・・分かり申した」

伝令は渋々陣へと向かった。

ああ・・・これ間違はなく且元に説教されるだろうな。

且元が鬼のように怒る姿が目には浮かんだ。

「・・・マジで怖えな。それにしても——」

後ろに抱えている勝家を見ながら思う。

（闘っていた時は気付かなかったけど、胸めちやくちやでけえな・・・）

いかんいかん、意識しては負けだな・・・

そう心に言い聞かせながら、昌秀は尾張に向けて馬を走らせた。

昌秀　ご先祖様と出会う

一晩中馬を走らせ尾張に到着すると、道行く人々が全員俺の事を凝視した。

まあ、無理も無い。背中に女性を縛りつけながら槍を持つてる男が馬を走らせているのだから。

「それにしても、この視線は痛すぎるな．．．」

あまりの疑いの目に冷や汗が止まらなくなる。

このままだと尾張の兵に目をつけられかねない。

俺は何とか勝家が起きてくれないもんかと視線を勝家に向ける。

「おい、そろそろ起きろよ」

「すう．．．」

「駄目だ、完全に寝てやがる．．．」

これは強く打ちすぎたとか言う問題ではないだろう。

こいつは阿呆なのだ．．．うん、きつとそうに違いない。

俺は捕らえておいた方が良かったかな．．？と呟きながら小牧山城へと馬を走らせた。

「本城を清洲ではなく小牧山に移すとはな……確かに、美濃に近い方が戦略的には有利か」

俺は小牧山城の城門前で城を眺めながら呟いた。

この程度の城なら楽に落とせそうだな……と考えていると一人の足軽が槍を突きつけた。

「おみやあ、その後ろに担いでいるのは……勝家様だぎや!?!」

「人違いです」

「嘘つくなみやあ!」

足軽が『曲者だぎや! 皆の者出会え出会え!』と叫ぶと、ぞくぞくと兵が集まってきた。

これはマズイ……と俺の勘が非常信号を告げた。

どうしたものかと槍で牽制していると、兵の群れから一人の女性が現れた。

よく見ると見た事のある人物である。それは以前、津川城で出会った丹羽長秀であった。

長秀は俺を確認すると、『あらまあ』と友人のような態度で接してきた。

「これは昌秀殿、何用得尾張に?」

「ああいや、此度はこの女性を送りに来たのです」

「女性・・・？ あ、勝家殿!? 大丈夫ですか!？」

俺はすぐに勝家と俺に巻いた手綱を切つて、勝家を長秀に預けた。

勝家はとても気持ち良さそうに眠っている。どうやら俺の背中は高級ベッドのように心地がよいらしい。

長秀が心配そうに勝家に声をかける。

「勝家殿！ 大丈夫ですか!？」

「むにやむにや・・・あたしは負けてないぞ〜」

「大丈夫そうですね」

「ああ、非常に健康だよ」

俺と長秀は顔を見合わせると、互いに笑ってしまった。

とりあえず勝家を長秀の言うとおりに部屋に寝かせると、深刻な表情で長秀が俺に尋ねた。

「昌秀殿は勝家殿と闘つたのですか?」

その問いに俺は無言で頷くと、長秀は悲しそうな表情を見せた。

俺はふうと深い溜め息をもらすと、腰に差している刀を横に置いた。

「長秀殿、そのように固くならないでください。俺の事は昌秀でいいです」

「それでは昌秀も私のことは長秀と・・・」

「ああ分かったよ。長秀」

俺はそう言うのと、長秀はふふふと笑う。俺は何かおかしい事をしただろうか？

「俺、何かおかしい事しました？」

「いえ、昌秀は津川城で初めて会った時から何処か他人行儀でしたから」

「そ、それは・・・」

俺のご先祖様かもしれない・・・と頭の中で考えてしまったからだ。

俺は長秀の胸を凝視する。本当に女なのか・・・と呟くと長秀はゴミを見るような目をしながら口を開いた。

「女性の胸を見るのは0点です」

「痛つてえ!？」

胸を凝視しすぎる昌秀を長秀はグーで殴る。

昌秀は頭を抑えながら文句をたれた。

「・・・いきなり何すんだよ」

「女性に対して失礼だと思わないんですか？」

「失礼も何も、俺はあんたが本当に女なのかどうかをだな・・・」

そういつた瞬間、何処からとも無く長刀が俺の首筋に添えられた。

「……何か言いましたか？」

「何でもございません！」

昌秀はすぐに土下座の体制をとる、この世界に来てから初めての土下座であった。

長秀はコホンと咳き込むと、長刀を後ろに置いた。

ふう……と安堵していると、再び長秀が口を開く。

「あなたと話していると、何処か他人の気がしませんね。ふふ、80点」

（そりゃあ、貴方の子孫ですもの。他人ではないしようよ。それにしてもかなりの高得点だな。つーか、間近で見ると中々胸あるな……勝家殿程ではないが）

とどうでもよい事を考えていると、長秀は再び長刀を俺の首に添えた。

「今、何か良からぬ事を考えました？」

「長秀って……心の中でも覗けるのかな？」

「面白いことを言う人ですね。そんな事出来るわけではないでしょう」

そうですよね〜と言いながら、俺は目線を寝ている勝家へと向けた。

（いつまで寝てんだよ！ 早く起きてこの状況を收拾してくれ……意外とこの女はヤバイ！）

俺は冷や汗を掻きながらチラチラと勝家を見ると、勝家がやつと目を覚ました。

「はっ……あたしは一体、そうだ！ あの男にやられて……」

勝家は長秀に長刀を突きつけられている昌秀を確認すると、『ああお前!』と横に置いてあつた刀を抜いて俺に向けた。

「よくもあんな畏にはめてくれたな!　ここで成敗して——」

「いやいやいや!　お前は命の恩人に刀を向けるのか!」

「命の恩人・・・そういえば、すごく眠つてたような気がするなあ」

「気がするじゃないからな!」　お前、俺の背中で熟睡してたくせに何言つてんだ!」

勝家は熟睡・・・?と首を傾げると、急に顔を赤らめる。

「ま、まさか・・・あれは夢じゃ——」

「現実だ、現実!」

勝家はそれを聞くと、ますます顔をまるで林檎のように赤く染め部屋を『うわああああ!』と叫びながら飛び出した。

長秀はハアと溜め息を吐くと、長刀をしまった。

「あなたに敵意が無い事は分かりました。1つ聞きます、長門家は齋藤家に加担したのですね・・・?」

「ああ、重秀殿は俺に齋藤家と供に織田家を撃退せよだとさ」

「・・・残念です。長門家と織田家の確執は知ってましたが、まさか重秀殿が敵に回ると

は14点です」

それに昌秀も加わっているととなると・・・と長秀は何かを思案し始めた。

「とりあえず今夜は、私の屋敷に泊まっていきなさい。本日は姫様は鷹狩りに行つてしまわれましたから、明日姫様と面会するとよいでしょう」

「何で俺が織田の姫様と面会を・・・？」

「あら、それがここに来た目的ではないのですか？」

「・・・くえないお人だ」

「ふふ、お互い様です」

長秀の屋敷に着くと、長秀は俺に部屋を案内してくれた。

部屋は思ったよりも広く落ち着かないくらいだったが、長秀が怖い位の笑みで『狭い部屋ですがゆつくりして行って下さいね?』と言われ戸を閉められた時、俺は静かになつた部屋でここでは長秀の言う事を聞いた方がよさそうだと一人で頷いて納得した。

その日の夜、布団をしいて横になりある事について考えていた。

ある事とはズバリこの時代の織田信長・・・じゃなく、織田信奈だったか。そいつは長門家が従うべき相手か否かを探りにきたのだ。まあ、他にも家臣達の仲やどのようように内政をしているかなど、いろいろ目的はあつたのだが、一番は織田の姫がどの程度かを

判断しに来たと言っている。

「さて・・・本当に織田信長と同等の存在か、確かめさせてもらおうぞ。織田の姫様」
今までの疲れが響いたのか、強烈な眠気に襲われその日の俺の意識は途切れた。

昌秀 うつけ姫と面会する

翌朝、長秀の屋敷で朝餉をご馳走になると早速姫様に会わせると言う事で、小牧山城の大広間へと案内された。

広間には柴田勝家や丹羽長秀などの重臣が集まっており、やはり長門家からやって来たのが悪かったのか今にも斬りかかって来そうな雰囲気だった。

俺は少し命の危険を感じながらも重臣一同に礼儀正しく挨拶をする。

重臣達の中には何故か相良良晴の姿もあった。

(何で良晴がこの広間に……？ もしや良晴はかなり織田家では重用されてんのか?)

何で良晴なんかを……？と眩きながら織田の姫を待った。

それにしても遅すぎる。敵対関係とはいえ、謁見を申し出ている者を待たせるとは……

(織田の姫君はもしや本当のうつけなのか……?)

俺は上座の方を眺めながらそう考えた。すると、襖が勢いよく開かれ腰に瓢箪をつけた女性がツカツカと世話しなく上座へ座った。

どうやらこいつが織田の姫君、もとい織田信奈のようだ。

成る程、確かに女だ・・・と俺が真剣な表情で信奈を見た。

「待たせたわね、私が織田信奈よ。ってちよつとあんた、何ボサツとしてるのよ。さつさと名乗りなさい！」

信奈はムスツとした表情で言う。

俺はすぐに姿勢を正して答えた。

「失礼した。某、長門家一門衆の一人。長門昌秀と申します、以後お見知りおきを」

「昌秀・・・？ それって、浅井の六千の軍勢を壊滅させたって言う・・・？」

「壊滅・・・とは大袈裟ですがその通りです」

信奈はへえ・・・と呟くと子供のような笑みをする。

「あなたが長門家の謀神ね・・・噂は聞いてるわ。それで今回は何の用で尾張に来たの？」

「謀神・・・ですか」

「何が可笑しいの？」

俺は何時の間にか付けられた異名に笑ってしまふ。

信奈はいきなり笑われたのが気に障ったのか余計に腹を立てた。

「いえ・・・某は謀神と呼ばれる程の事はしておりませぬ。それに浅井が負けたのは必然でございませぬ」

「必然ですって・・・？」

「ちよ、どういふ事だよ？ 昌秀？」

サルは黙つてなさい！と信奈に叱られしゆんとしてゐる良晴から視線を戻し話を続けた。

「はい、敵の大將の浅井久政は優柔不斷で決断力に欠けます。そして何より、奴は大軍で来たので油断しきつておりました。そこを突けば壊滅は必然でございます」

「ふうん……でも敵は六千の大軍よ？ いくら何でも僅か二千そこらの兵で倒せるかしら？」

「……何故我等の兵力の数を？」

「ええ、万千代が全部話してくれたわ」

どうやら長秀は万千代と呼ばれてゐるらしい。ちなみに勝家は六と呼ばれてゐるそうだ。

俺は無言で長秀を見る、長秀はニコリと笑いながら俺を見返していた。

信奈は瓢箪に口をつけて水を飲み干すと、プハアと瓢箪をドンと床に置いた。

「……それで本当の目的は何？ わざわざ世間話をしに来たわけでもないんでしょ？」

信奈はその目をギラギラと光らせながら俺を睨んだ。

これは誤魔化せないかと直感した俺は正直に話す事にした。

「……現在、長門家は美濃へと加勢に出ております。ここに織田家が攻め入るとなれば

苦戦は必定……そうは思いませんか？」

「回りくどい話は嫌いよ。ハッキリ言いなさい」

「それでは我らと——」

「同盟を組むといったところじゃろ？」

誰だ……？と良晴の向かい側に座っている年寄りへと目を向けた。

「わしは斎藤道三じゃ。どうじゃ、当たりじゃろ？」

この人が斎藤道三……成る程、確かに言われて見ればそんな気がしなくもない。

かなりの年配なのに、他の人と違って名将特有の威圧感の様なものを感じられる。

俺は怖気づいてはいけけないと自分に言い聞かせ、落ち着いて答えた。

「……正確には同盟ではございません。和議でございます」

「和議ですって？」

「左様。我らは此度の戦は一切関与いたしません。墨俣に砦を築くなり、城を建ててるなり好きにするがよろしい。その代わり、長門家では内政が出来る者が少なくあまりの業務に倒れる者がたくさんいるのです。そこで内政に詳しい方を一人お借りしたいのですが……」

「……そんなんでいいの？」

「おや、いい条件だと思ったのですが……？」

「話がうますぎない？ 貴方達にそんなに利益があるとは思えないけど・・・」

「いえいえ、多忙な長門家の・・・というより、某の領地の内政が手が回らないので手伝っていただけたらと思いますよ」

「ふうん・・・まあいいわ。さて、誰にするかだけど・・・」

信奈は重臣達を見渡すと、うんやっぱり万千代が適任ねと元氣な声で言った。

・・・今何と？

長秀は長秀で、『致し方ありませんね。60点』と嬉しそうな顔で点数をつける。

俺は嬉しいのか嫌なのかどっちだよと心の中で毒づいた。

「あのう・・・今何と？」

「何、万千代じゃ不満だって言うの？」

「い、いえ・・・そんなわけでは」

どうしよう・・・よりにもよって長秀が来るとは。

織田から来た奴から内政を少し学んだら、織田家の状況を聞き出そうと思ってたのに・・・

長秀は付け入る隙が見当たらないんだよなあ。正直、ちよつと怖いし・・・

俺が顔を抑えてうなだれていると、良晴が肩を叩いてくれた。

「良晴・・・お前——」

俺が弁護してくれるのかと期待をよせると、良晴は哀れな者を見るような目で言った。

「昌秀、1つだけ言っておくぞ。長秀さんは、怒ると多分怖いタイプだ」

「何の忠告だお前……」

「それじゃあ、これで長門家との和議の話はおしまいね」

信奈は上座を立ち上がると、またツカツカと何処かに行ってしまった。

そのの後に続くように、良晴や勝家達も足早に去っていった。

ポツンと広間に残されたのは俺と長秀だけで、広間には不思議な静けさが訪れた。

俺がマジかよ……と落ち込んでいると、長秀はふふふと笑いながら話しかける。

「残念でしたね昌秀」

「あんた……最初っから分かってたのか？」

「いえ、謀神と恐れられている貴方の事ですから何か裏があるんじゃないかと思っただけです」

「……それ酷くねえか？」

「何を今さら……それでよく謀神なんて言われているものです」

俺はフンと立ち上がると足早でその場を後にした。

長秀はフウと溜め息を吐くと、ゆっくりと立ち上がり昌秀の後を追った。

俺は長秀の屋敷に戻ると、早速馬に乗り墨俣へと帰ろうと馬を走らせようとした所、長秀が俺の目の前に突然現れて道を塞いだ。

「何処に行くのです．．？　長門昌秀殿？」

「何処つて．．墨俣に決まってるんだろ。墨俣の仲間に和議の報せを持っていかなきゃならないし」

「昌秀．．もう少し、ここに留まっては如何です？　城下町の方もご案内しますよ？」

「あ、結構です。長秀殿は、後でゆつくりと長津の地にお越しく下さい。俺がご案内しますので」

その瞬間、二人の間に火花が飛び散る。

長秀は笑顔で長刀を取り出すと、扇子で口を隠しながら言った。

「では少々手荒になりますけど．．．」

「え、何？　その長刀、何処から出したの？　ちよつと待て、その手に持つてる縄は一体何するつも——」

その時、小牧山城に長門昌秀の悲鳴が響き渡った。

その悲鳴に良晴を初め、信奈達も何事かと騒いだという。

昌秀 長秀に看病される

俺が目を覚ますと、見慣れた天井が目に入った。

どうやら気絶していたらしい・・・何故か気絶する前の事を思い出せないのは何故だろうか？

なにやら体のあちこちに包帯が巻かれている。俺は何処かで怪我をしたらしい。

俺が横になりながら目を瞑り考えていると、部屋の襖がゆっくりと開かれた。

「・・・長秀か」

「目が覚めましたか？ 昌秀」

「ああ、おかげさまで。それより気絶する前からの出来事が思い出せないんだが・・・何か知らないか？」

俺が体を起こして訊くと、長秀は『私が訊きたい位ですよ』と首を傾げて手に持つていた包帯を床に置き、自分も座った。

「恐らく、そこらで転んだんでしよう。まったく、長門家の謀神ともあろう者が三十点です」

「転んだ・・・か。でも転んだにしては凄いい怪我だよな。まるで、誰かに斬られそうに

なつたよう――」

「まあ、助かつたのですから良しとしましょう……ね？」

「あ、ああ……そうだな」

長秀のあまりの劍幕に俺は渋々納得する。

長秀は俺が怪我人だからと朝食を持つてくるため部屋から退出した。

その時、長秀が部屋を出る瞬間、不適な笑みをこぼしたのは気のせいだろうか……？

長秀が中々来ないので朝食の準備が手間取っているのかと思ひ、俺は手伝いに行くかと体を起こした。ふとその時、押入れの隙間に何やら光る物が俺の視界に入った。

俺は何だ……？と思ひながらも、押入れの取っ手に手をかける。

（何故だろう……？　今、俺の本能が猛烈に開けるな！と叫んでいるような……）

「……気のせいだよな。そうだよ、気のせいに決まつてる」

俺は『何だ気のせいか！ まったく脅かすなよな』と言ひながらも、戦に行くときのような面持ちで押入れを眺める……そして、『せい！』と言う掛け声と共に押入れが開かれた。

そこには、一本の長刀と……恐らく誰かに千切られたのであろう沢山の縄があつた。その瞬間、俺はすべてを思い出す。長秀が笑顔で、長刀を振りかざして追ってくるの

や縄をさながらカウボーイの如く操っている長秀の姿を・・・

俺がすべてを思い出すと廊下から足音が聞こえた、俺はすぐさま布団に潜り込む。すると長秀は笑顔で襖を開けた。

「昌秀？ 朝食を持ってきましたよ・・・って何をしていますか？」

「いや・・・お前に対する見識を改める必要があるかと考えていただけだ」

「??? 一体何を」

長秀は首を傾げながら、無表情で押入れの方へと目をやった。

長秀は無言で押入れの前へと足を運び、そしてゆっくりと押入れを閉めた。

「昌秀・・・」

「はい」

「私も昨日は流石にやり過ぎました。と言うことで昨日の事はお互い忘れましょう。」

「そうだな・・・それがいい」

「良い判断です。九十点」

長秀はそう言いながら朝食へと視線を戻す。

「朝食が冷めてしまいますね。さあ食べましましょうか？」

「何だ、長秀も食べてないのか？」

「ええ、私は公務があつたので・・・」

「へえ……」

俺はそう言いながら長秀の手へと目をやると手が赤くなっていた。

俺は枕の横に氷水が置かれているのを確認すると笑いながら話しかけた。

「長秀、ありがとうな」

「な、何です……急に礼など言つて」

「看病してくれたんじゃないのか？」

「わ、私ではありません。私の側近がやってくれたのです。勘違いしないでください」

「それでも礼は言う。ありがとう」

長秀は『うつ……』と顔を赤らめると、『……零点です』と小声で呟いた。

「何か言つたか？」

「何でもありません！」

俺は出されたお粥を食べてから聞くと、長秀は不機嫌そうに答えご飯を口に運んだ。

俺は『何だよ……』と呟きながら、襖の隙間から見える外の景色を眺めた。

長秀はそんなに大した怪我では無いので、俺の陣へは明日出発するという事だった。と言うことで、現在俺ごと長門昌秀はすごく退屈している。

体の方も動けないという事は無いので、外に出てみるかと着替えて部屋を後にした。

「昌秀？ 何処に行くのです？」

「ああ、退屈なんで城下町でも見て回ろうかと思つてな」

「ならば私も同行しましょう。監視してないと何をするか分かりませんからね」

「・・・勝手にしろ」

「ええ♪ そうさせてもらいますね。」

俺はそんな訳で長秀を連れて城下町へと向かった。

城下町へと着くと、人々が笑いながら今日と言う日を謳歌していた。

こんな時代でもこんな笑顔が出来るのか・・・と思ひながら歩いていると、後ろの長秀が笑いながら話しかけてきた。

「どうです？ 小牧山城の城下町は」

「・・・まあまあだな」

「本当は？」

「俺の城下町より凄く賑わいだ・・・」

俺の本音を直ぐに見抜いてしまう長秀・・・もしやこいつは俺と性格が似ているのではないかと俺は思った。

そんな長秀は何かを見つけて俺の肩に手をかける。

「何だよ・・・」

「昌秀、お団子でも食べていきますか？」

長秀の指差した先には確かに団子屋の旗が立っており、中々の繁盛振りであった。

「いやいいよ。腹へつてないし……」

「食べますよね？」

「食べさせて頂きます」

「ふふっ♪ 素直でよろしい八十点」

監視している者と監視されている者……そんな関係の俺らが一緒に団子屋へと入る光景はかなりシニールであった。

団子屋へ入ると、意外な人物と出会った。

「げっ……良晴」

「おつ昌秀じゃねえか。お前も暇な奴だなあ……一人で団子食べに来たのか？」

良晴はそう言いながら長秀の姿を確認すると、目の色を変えて俺の首を掴んだ。

「お、お前……まさか長秀さんに手を出すつもりじゃないだろうな？」

「く、苦しい……放せ馬鹿」

良晴が『あ、悪い……』と手を放すと、俺は咳き込みながらこの野郎とにらみつけた。

長秀が心配そうに眺めるが、俺が心配ないと言いながら手を振ると安心した表情をし

た。

団子を食べ終わり一服すると、良晴が茶を啜りながら話しかける。

「昌秀、良かったら家に来ないか？ 久しぶりに遊ぼうぜ」

「・・・そうだな。今日は俺も暇だしな。と言うことで長秀は帰っていいぞ」

「帰るわけ無いでしょう。あなたを監視するのが私の役目なのですから、私もついていきますよ」

「長秀さんも俺の家に来てくれるんですか？ ・・・よくやっただぞ昌秀」

「何でもこいつは嬉しそうなんだ・・・？」

「私にも分かりかねます。三点」

俺が席をたつと長秀もそれに続いて、さっさと団子屋を後にした。

「お、おい待て昌秀！ お前、俺の家の場所知らねえだろ！」

良晴は直ぐに後を追おうとすると、店の人に肩を掴まれる。

「お客さん・・・お勘定は？」

「・・・はい？」

俺らが歩いていると後方から、良晴の恨みの声が聞こえた。

俺がそれを聞いてふっと笑っていると、後ろから長秀が尋ねる。

「・・・騙すのは好きですか？」

「———どういう意味だ？」

「いえ・・・何でもありません」

時刻は昼過ぎ、俺が空を見上げると綿菓子のようなウロコ雲が空を気持ち良さそうに流れていた。

昌秀 良晴の家へと向かう

城下町のはずれに少しポロそうな長屋が並んでいる、どうやらここが良晴が住んでいる所らしい。あの後、良晴が追いついてきて不満の声を俺に浴びせたが俺がはいはいと軽く流すと、溜め息をついてすぐに諦めた。

俺は長屋が並んでいる光景を少し眺めると、長秀に視線を移した。

長秀は何時もどおりの穏やかな表情をしているが、何故か少しシヨンボリしているように見えた。

俺は長秀の先程の言葉が気になった。

『……騙すのは好きですか？』

正直に答えるのならばどちらでもないが正しい答えだろう。

しかし、俺が騙すのを好きでも嫌いでも長秀には関係ない筈である。

それこそ余計なお世話なわけで、無論俺は極力、他人の事に余計な口出しはしないとにしている。

俺があれこれ考えている内に良晴が目の前で急に止まった。

俺は思い切り良晴にぶつかりはつとした。

「おい昌秀大丈夫か？」

「あ、ああ・・・悪い。よそ見してた」

「そうか、ならいいんだけど。それより着いたぜ」

「ここが・・・」

俺は良晴の家を見る。

今にも崩れそうなオンボロ長屋で、俺が履物を脱いで床に足をつけるとメシと嫌な音を立てた。

俺は可哀想な者を見る目で良晴を見る。

「良晴・・・お前、もしかして嫌われてんのか？」

「お前なら言うと思ってたが、違うぞ。これは全部信奈が給料をケチるせいなんだよ」

「信奈って・・・まあいいや。それより、あそこにいる子供は誰だ？」

俺が指差す方向には、庭で柄杓を振り回している桃色の着物を着た子供が居た。

「ああ、あれは——」

「兄様、帰られたのですな！ おや、そちらの方は兄様の友達ですか？」

兄様とその子供が言った瞬間、俺はその場で硬直した。

良晴は慌てて弁明する。

「ま、昌秀っ！ これは違うぞ！ 誤解だからな！」

「いやいや……これは誤解もクソも無いだろう。まさかお前がこの時代に來てからロリコンになっちまうとはな……俺は何も見えてないし聞かなかつた。それでいいだろう？」

良晴

「だから違うんだって！ 長秀さん、何とか言つてください！」

「昌秀、この子は姫様が桶狭間の報酬として用意した義妹です。とても相良殿に懐いているのですよ」

「懐つ……お前と言う奴は……しかも戦の報酬で義妹とは、恐ろしいな良晴」

「だから違うんだって！ 長秀さんも誤解を生む言い方をしないでください！」

その後良晴の必死の説得により何とか誤解は解け、良晴の家で楽しく談笑した。

俺は何故かうこぎ汁とか言う物をご馳走になり（まあ美味かつたのだが）、二人で将棋を作り遊んだ。

長秀はその光景を見ながら微笑んでいた。

夕方の帰り道、俺と長秀が歩いていると空模様が怪しくなってきた。

「おつ……雨降りそうだな。ちよつと急ぐか？」

「ええ、そうしましょう」

俺らが急いでいると、雨が勢いよく降り注いできた。

城下の人たちも慌しく家へと入る。

急いでいると長秀が急に足を止めた。

「どうした、疲れたのか？」

「こんな時に鼻緒が切れるとは二十点です」

長秀は千切れた鼻緒を気にしながら、それでも歩こうとする。

俺は見かねてはあと溜め息をついて長秀の前でかがんだ。

「な、何を……？」

「何をつておんぶに決まってるんだろ。ほらさっさとしろ。仲良く風邪ひいちまうぞ」

長秀は『それでは……』と渋々、俺の背中に体を預けた。

俺はちよつと待てと、自分が着ていた上着を長秀へかぶせる。

「これでは貴方が風邪をひいてしまいます。早く着てください」

「俺はお前に風邪をひかれる方が困るんだよ。お前の提案は十三点」

「私の真似ですか……零点です」

長秀は俺の上着を被ると、ムスツとした表情になった。

俺は小声でボソツと呟く。

「まったく、お前見たいな奴がご先祖様とはな……」

「何か言いましたか昌秀？」

「何でもないよ」

俺は長秀を担ぎながら屋敷へと走り出した。

屋敷に着く頃には俺は全身ずぶ濡れで、そのまま屋敷へは入れる状態ではなかった。

俺は長秀を玄關の前で下ろし、濡れた衣服を気にしながら長秀を見る。

長秀は濡れた髪を気にしていたが、他は大丈夫なようで安心した。

長秀は微笑みながら俺を見つめた。

「昌秀、礼を言います」

「礼なんて要らないさ。目の前で女が困っていたら助けるに決まってるだろ」

俺がそう言うのと長秀は俺の顔を見ながらふふふと微笑んだ。

その可愛らしい笑みに俺は不覚にも少し照れてしまった。

俺は返してもらった上着を絞りながら、長秀の視線が気になるのでじつと見かえす。

「・・・何だよ?」

「ふふっ、何でもありません♪」

長秀はそう言うのと屋敷の者に風呂の用意をさせて、早々と行ってしまった。

俺の気のせいかもしれないが、その時の長秀は少し嬉しそうな表情をしていた様な気がした・・・

昌秀 墨俣へ帰陣する

翌日、俺が目を覚ますと襖の隙間から日差しが漏れていた。

どうやら外は快晴らしい。俺は体を起こし襖を全開にする。

チュンチュンと小鳥が庭で鳴いていて、屋敷の人達が慌しく動いている。

今日は墨俣へ行く日なので、準備をしているのだろう。

俺は布団を片付け欠伸を掻きながら顔を洗おうと井戸へ向かう途中、玄関の方に見慣れぬ女性が立っていたのが目に付いた。

よく見ると昨日広間にもいた恐らく信奈の小姓で、キチンと背筋を伸ばして自分の主君の帰りを待っている。

(小姓がいるって事は、織田信奈がここに来ているのか……?)

俺はこうしちやいれられないと、井戸で顔を洗いすぐに長秀の部屋へと向かった。

長秀の部屋に着いて聞き耳を立てると、長秀たちの会話が聞こえてきた。

「万千代、本当にこれで良かったの？ 昌秀とサルが友人同士ならサルに任せればよ

「かつたんじやない？」

「いえ相良殿だと、昌秀に騙される可能性があります。それに相良殿は内政が出来ませんし、織田家の状況を喋られるのは避けなければいけません」

「まあ万千代がそう言うならいいけど。昌秀が変な謀を考えないように頼んだわよ」
「ええ、百点満点の仕事をして見せますよ♪」

信奈は『じゃあ、頼んだわよ』と言うと襖に手をかける。

俺はヤバイと咄嗟に軒下に身を隠した。

信奈がそのまま気付かず去って行くのを確認すると、ふうと安堵して軒下から出て自分の部屋へと戻った。

「お待ちせしました。では参りましょうか？」

「何だ、お前一人で行くのか？ お供は？」

「必要ありません。山賊程度にやられる様な鍛え方はしていませんよ」

「あつそ・・・」

長秀は自分の荷物と長刀を俺に預けると馬に跨った。

そうして俺らは丹羽屋敷を後にして、墨俣の長門陣へと馬を走らせた。

墨俣の陣へと向かう途中、馬を下りて川辺で休憩していると長秀が昼食の握り飯を笹の入れ物から取り出した。

「はい、これは昌秀の分ですよ」

「ん、サンキュ」

「サンキュ？ 昌秀もサル語を話すのですね」

「サル語って言うか、未来の英語だけだな」

そう言いながら俺は長秀に渡された握り飯を頬張った。

腹が減って勢いよく食べていたので、握り飯が喉に詰まりウグツと胸を叩いた。

長秀はこちらを見て微笑むと川で汲んだ水の入った竹筒を俺に渡した。

「大丈夫ですか？ ほら水ですよ」

「あ、ありがとう・・・」

俺は水で流し込むとぷはあと安堵の息を漏らした。

「昌秀、和議の件でお話があるのですが・・・」

「ん、何だ？」

「実は今夜、相良殿が墨俣に砦を築きに来るのですが・・・」

「ああ安心しろ、手は出さないから」

長秀はそれを聞くと、『良かった』と胸に手を置いて安心する。

俺らは昼食を終えると、すぐに墨俣へと向かった。

陣へ帰ると且元が凄いい形相で出迎えた。

「昌秀様！ 何故、一人で尾張に向かったのですか!? 供の一人もつけないで——

」ガミガミと怒鳴る且元を無視して、高虎に現在の状況を確認する。

「何か変わった事はあったか？」

「いえ、特に変わった事は……そういうえば、永重殿がかんかんに怒ってましたよ？ あいつは何を考えているんだって」

「マジでか、面倒くさいな……」

「昌秀様！ それよりその女性は誰なんですか!? まさか尾張で恋人を……」

「んなわけないだろ。この人は織田家臣の丹羽長秀殿だ」

「丹羽長秀と申します。よろしくお願ひしますね」

二人は長秀の名を聞くと、表情を一変させ俺の首を掴んで長秀が見えない場所まで引つ張った。

二人は俺を大木に叩きつけると、今にも殴りかかりそうな形相になった。

「な、何すんだよ？」

「何すんだよ……じゃないです！ 織田は長門と敵対してるんですよ！ 何を考えているんですか!？」

「殿、織田と交流を深めるといふ事は斎藤家を裏切る事になるのでですよ!」

俺は落ち着くと二人の頭を軽く叩く。

俺は頭を抑えううと唸っている二人に説明をする。

「いいか。今、織田と休戦しとけば斎藤は何も知らずに大量の物資を送る事になるし、俺らは一兵の損失もする事は無くなるんだぞ」

「しかし、美濃は織田に取られる事に……」

「阿呆、誰が美濃全部を織田に譲ると言った?」

二人はえっ……と互いの顔を見合わせた。

「確かに稲葉山城は譲るが、長門家に近い美濃の領地は俺らがそっくりそのまま頂く事にする」

そうすれば長門家の動員兵力も軽く六千は超えるだろう。そうすれば、織田も長門を軽く攻めようとは思うまい。

「成る程、そう言う事であれば……」

「流石は昌秀様、これも策の内と言う事ですね」

「そう言う事だ。だから余計な事を言うなよ」

二人は承知しましたと言うと自分の仕事に戻った。
俺は溜め息を着きながら、長秀のもとへと向かった。

長秀の所に戻ると、長秀は木製の長いすに座って待っていて心配そうな顔をして俺を見た。

「やっぱり長門家は織田の事を相当憎んでいるのですね」

「何だよいきなり・・・」

「さっきの貴方の家臣の反応を見れば分かります。昌秀、本当に和議を組んで良かったのですか？」

何をいまさらと俺は長秀の隣に腰を掛け、墨俣の地を見渡した。

「確かに長門家の大半は反織田派だが一門衆の内、俺と重秀殿と義重が親織田派に回つてゐるからな。重秀殿なら他の奴らを黙らせる事が出来るだろうよ」

「しかし・・・最悪長門家が二つに分かれるかもしれないのですよ」

「そうかもな。でも、この和議を命じたのは他でもない重秀殿だぞ」

「そうなのですか？」

「ああ、重秀殿は織田と事を荒立てる気はないようだ」

長秀はそれを聞くと安心した表情をして、ゆっくりと立ち上がった。

「何だか今日は疲れましたね。早めに休ませてもらってよろしいですか？」

「そうだな、ゆっくり休んだ方がいい」

俺は兵を呼んで長秀を休ませるように命じると且元を呼んだ。

「お呼びですか昌秀様」

「且元、義龍にはどう言い訳したんだ？」

「はい、病で陣から動けないと言ってますが・・・」

「よし、じゃあ義龍にこう言ってくれ。病が悪化したため長津の地へ戻って療養致すつてな」

且元はそれを聞いて俺の意図が分かったのか、ニヤリと笑い『承知しました』と言うとすぐに行ってしまった。

俺は兵達に撤退の準備をさせると、もう一度墨俣の地を見下ろした。

(良晴め・・・墨俣一夜城を再現するつもりだな。義龍もこれで終わりだな)

俺はそう思いながら欠伸をして自分の寢床へと向かった。

昌秀 美濃の一部を切り取る

翌朝、目が覚めて墨俣を見ると立派な砦が出来上がろうとしていた。

すると、朝早く義龍の使者が昌秀の陣を訪れた。

且元が朝食を食べてる最中に耳打ちをする。

「昌秀様、義龍殿の使者が来ておられます」

「そうか……」

「体調が悪いので会えないと追い返しますか？」

「いや……通せ」

「承知しました」

恐らく撤退の件で文句を言いに来たのだろう。しかし、顔を出さないで仮病を疑われてはマズイので会うとしよう。

使者は血相を変えて陣に入ってくるなり、土下座して俺に頼み込んだ。

「昌秀殿！ 体調が悪いのは存じておりますが、どうか墨俣の地に残っていただけないでしょうか!？」

その言葉を聞いて高虎が使者をにらみつけ、刀に手をかけると怒声を浴びせた。

「無礼者！ 使者が昌秀様に命令するかつ!？」

「無礼は承知でござる！ しかし、今昌秀殿が撤退されれば稲葉山城が落ちてしまします。体調が悪いのは存じておりますが、そこをどうか曲げてお願い申し上げます！」

しかし現在、長門家と織田家は斎藤家には秘密で和議を結んでいる。

今俺がこれを承知して織田に攻撃を仕掛ければ周りの諸大名からの信頼を失うだろう……

俺は思案した末、1つの案が浮かんだ。

「いいだろう。しかし条件がある」

「?」 どのような条件でございますか?」

「美濃の領地の一部を譲れば考えてもいい。もちろん、義龍殿の署名つきでな」

「!? そ、それは流石に……」

「承知できないか?」

「い、いえ……その——」

使者は目が泳いで完全に動揺していた。

あと一歩だ……そう確信した俺は最後にボソツと呟いた。

「承知しないのならばそれもいい。俺らは長津へ帰るだけだから……」

「くっ……」

使者は唇を噛み血を流した、相当悔しいのだろう。

使者はそれを渋々承知し、早速稲葉山城へと戻った。

二時間ほど経つと、再び使者が長門家に美濃の一部の領地を割譲すると言う義龍の花押付きの署名を持ってきた。

それを手にとり使者を帰した後、俺は陣で笑ってしまった。

昌秀につられて且元と高虎も後ろで思わず微笑んだ。

「これで長門家は齋藤家にもひけを取らぬ大名家になった。浅井も簡単には攻めてはくれまい」

「見事な外交術でしたね、殿」

「これは義重のお陰さ。外交する時は相手の真意を見極める事つてな」

「成る程、私も胸に刻んでおきます」

「それはそうと且元。お前は千五百の兵を連れて、先に戻って美濃の一部をこれを見せ
て切り取って来い」

「は、はい。しかし……私でよろしいのですか?」

「? どういう意味だ?」

「私は高虎のように器用に物事を上手く運ばませんし、戦もあまり上手では……」

且元がしゅんとしながら言うと、俺と高虎は互いに目を合わせた後、ぷつと吹いた。且元が顔を赤らめながら『何で笑うのですかっ!』と質問する。

「いやあ悪い悪い。確かにお前は戦は上手つては言えないなあ」

「うっ……」

「でもな且元? お前には俺や高虎が無い物を持つてる……だからこそお前に任せるんだぞ?」

「私にあつて昌秀様や高虎に無い物ですか……?」

「そうですよ且元。才がどうだのと言うより、まずは自分を信じる事が大切ですよ?」

「自分を信じる……か」

且元はそう言うのとグツと拳を握り締めると、漆で塗られたような目をさらに輝かせて俺らを見た。

「どうやら決意は固まつたらしい。」

「私やります……いえ、やって見せます!」

「その意気だ。いややっぱり且元はしゅんとしてるより、暴れている方がいい」

「……それはどういう意味でしょうか?」

且元の輝いていた目は一気に黒く染まり、俺に向けられた。

ヤバイ……調子に乗りすぎたと俺は全力でその場を後にしようと走る準備をするが、

且元のアイアンクローに頭を掴まれる。

「いだだだだだっ!？」

「あなたと言うお人は・・・何故、後で余計な事を言うのですか!？」

「殿・・・こればかりは弁護出来ません」

「何でだよ!　そこは弁護してくれって痛だだだだだ!」

俺が苦しんでいるとやっと起きたのか、長秀が顔を出した。

「朝から何を騒いでいるのですか。十三点・・・」

長秀の姿を確認すると且元は手を離し『それでは言つて参ります』と足早にその場を後にした。

俺は痛む頭を抑えながら長秀にオハヨウ長秀と挨拶を交わす。

長秀は呆れ顔で『朝から賑やかなのですね。この陣は』と言うと、眩しいくらいの笑顔で床机に腰をかけた。

俺は高虎に耳打ちをする。

「高虎、お前は残りの兵の撤退の準備を急げ」

「しかし斎藤家との約束は・・・」

「斎藤家との約束は俺がここにいる事だ、兵達まで巻き込む必要は無い。俺はここに長秀と残る。兵達は全員霧生城へ戻してお前は重秀殿に報告をしてくれ」

詭弁だと奴らは言うかもしれないが、どうせ滅びる運命にある者を助ける義理もない利益も無いしな。

「承知しました。しかし、私もここに残ります。私が選んだ者に撤退と重秀殿への報告を任せましょう」

「何故だ？」

「護衛が必要でしょう？」

「まあ、無いに越した事はないが……」

高虎は『それでは護衛いたします』と言うと俺の後ろびつたりにくつついて来た。

こいつは何を考えているんだと……俺は心配しながらも長秀のもとへと向かった。

俺が床机に座り高虎が後ろで待機すると、長秀が神妙な顔つきで尋ねてきた。

「昌秀、且元殿は何処へ？」

「ああ、先に霧生城へ帰した。和議の件を重秀殿に報告する為にな」

長秀はそれを聞くと『そうですか』と扇子で口を隠した。

どうやら考え事をしているらしい。まあ、俺の真意を見抜こうとしてるんだろうが。長秀はしばらく考えると、予想外の事を口にした。

「昌秀、和議の件なのですが……」

「何だ、今さら取り下げますってのはなしだぞ」

「ご安心をそれはありません。私なりに考えたのですが、やはりこの和議は長門家に有益な条件がなさ過ぎると思うのです。そこで一つ提案があるのですが……」

「……言ってみろ」

「美濃の一部を長門家に渡すと言うのはどうでしょうか？ 良い提案だと思うのですが……」

「なっ……」

何を考えているんだこの女は……と高虎は少ししたじろぎながら長秀を見る。

一方昌秀は腕を組みながら、『何が望みだ？』と答えた。

「望みですか……そうですね。それでは昌秀にまた尾張に来てもらうと言うのはどうですか？」

「何だと……？」

もしや尾張に着いたらその場でスパンとか言わないよな……俺は考える事のできる最悪な出来事を想像する。いや、流石に長秀もそんな真似はしないだろう。勝家辺りならやりそうだが……

俺は少し悩んで長秀の案をあえて受ける事にした。

「よしその話乗った」

「殿っ!？」

「ふふふ、良い返事です。九十点」

こうして俺と長秀の密約が締結した。

しかし俺は予想だにしなかっただろう、この選択がとんでもない事態を引き起こす事になるとは……

昌秀 織田を救援に向かう

稲葉山城城内では大きな混乱が起こっていた。

先刻長門家が長津に撤退したと報告が入ってきたためだ、それに加え墨俣の地には拠点が増え、城の陥落も時間の問題であった。

斎藤家の当主である斎藤義龍もまた例外ではなかった。

義龍は最初こそ焦っていたが、やがて焦りは怒りに変わった。

「おのれっ！ 長門昌秀めっ！ たばかりおったな！」

怒りのあまり手にしていた刀を抜き放つと、自分が座っていた床机を叩ききる始末である。

それを美濃三人衆もとい、現在は二人衆であるが、その美濃三人衆である稲葉良通と氏家直元は自分の君主を諫めた。

「義龍様っ！ 落ち着きください！ きつとこれは昌秀の策に決まっております！」

「策じゃと・・・？」

「そうです！ 長門昌秀は浅井の軍勢をその智謀で撃退した鬼謀の士・・・奴が策を練っておらぬわけがありませんっ！」

「ならばなぜ兵を長津に返したっ!？」

「そ、それは・・・」

義龍の言葉に二人は黙ってしまふ。

義龍は昌秀に復讐の念を抱きながら、墨俣に出来た砦を見る。

「最早長門には期待すまい。今に見ておれ・・・昌秀め。まずは織田から叩き潰してくれ
るわっ!」

義龍は墨俣の砦を見ながらそう固く決意するのであつた。

た。義龍の恨みを知らずに昌秀はと言うと、長秀と何処から持つてきたのか碁を打つてい

碁は少し嘯んでいるだけであつたが、長秀が懇切丁寧に教えてくれたので現在やつと
いい勝負が出来てきた頃だ。

「だあく! また負けたっ!？」

「ふふふ、残念でしたね。今の勝負は二十一点です」

「・・・厳しい人だな」

高虎が少しひきながら呟く。

俺は碁石を集めながら墨俣の地を見る。

「どうやら上手くやったようだな」

「ええ、そのようですね九十三点」

長秀も碁石をかき集めながら言う。

高虎はその様子を怪訝な顔をして様子を見ていた。

（この人達は何故このように普通に会話が出来るのだろうか？ 先程まであんなに真剣に約定について話していたのに・・・これが器と言うものなのだろうか）

高虎は楽しそうに話している二人を眺めながら思った。

和議を結んだとはいえ、それは表面上のことだ。裏では完全にお互いの事を敵視している。

・・・少なくとも殿はだが。

「・・・もう王手だな。墨俣に砦を築かれた以上、もう奴らにどうしようもない」

「しかし砦を守る兵力は小勢です。今叩けば何とかなるのでは？」

「阿呆、織田も恐らくもうすぐそこまで来てる筈だ。織田の姫様もそこまで馬鹿じゃないだろう」

「その通りです。姫様はすでにこちらに向かっている手筈になっています」

話している内容とは裏腹に長秀の顔が曇る。

俺がどうした？と声を掛けると、長秀は『おかしいです．．．』と墨俣の地を見ながら言った。

「何がおかしいのですか？」

「本来ならもう着いてもいい頃なのに、まだ来ていないなんて．．．もしや何かあったのでは？」

「考えすぎだ．．．まさか義龍が一計を案じて織田を撃退したとでも？」

俺が碁盤を片付けて笑いながら話しかけると長秀は急に黙り込んでしまった。

「．．．本気か？」

「分かりません。でも嫌な予感がするのです．．．」

しんと静まり返った空氣に斎藤家の旗を持った足輕が顔を出した。

「昌秀様．．．」

「．．．どうした？」

「昌秀、この方は．．．？」

「この者は昌秀様が美濃に送った間者でございます」

長秀は間者と聞くと表情が一変する。

やはり昌秀は悔つてはいけないという事を再び決意した。

反面、長秀は昌秀のような軍師が欲しいと思つていた。

最近、織田には新しい者も増えてきて手数が足りないと思っていたのだ。その織田を自分だけで諫めるのは骨が折れる。せめてもう一人いれば・・・と長秀は最近になって考えていた。

そう考えている時に出てきたのが長門昌秀であった。

「何用だ・・・？」

俺は鋭い視線で間者を見る。

間者は片膝をつく、長秀をチラチラと見た。

「構わん申せ」

「それでは・・・義龍が一計を案じて織田勢を鉾山におびき寄せ、味方ごと火計を実行したようでございます」

「何だと・・・？」

まさか義龍が・・・と俺は顎に手をかけた。

長秀は『そんな馬鹿なっ!』と信じていないフリをしていたが、顔は正直に驚きが隠せない様子だった。

俺はこのままでは・・・と考えると高虎に目を合わせる

「殿、何か・・・？」

「高虎、お前斎藤家の具足と旗用意してくれ。織田を助けに行こう。墨俣も攻撃を受けてるみたいだしな」

長秀は『えっ……?』と墨俣を見る。

見れば墨俣の砦が斎藤家に攻められて今にも陥落しそうな勢いであった。

それと同時に間者が二人分の具足と旗を用意する。

「高虎、早く着ろ。戦に遅れちまうぞ?」

「は、はい!」

「昌秀、私も行きます」

「本気か……? あんたそんなに強そうに見えないんだけどな」

「試してみますか?」

長秀がにつこりと長刀を構える。

俺は顔を青ざめさせながら三歩程ひいた。

「遠慮しときます……」

「そうですか? 私は一向に構いませんよ?」

「いや、本当に勘弁してください」

「昌秀様、馬の用意が出来ました」

高虎が馬を用意したのを確認すると俺はコホンと咳をして気を取り直した。

「・・・よし。それじゃ行くかあ」

「ええ、早く行きましょう！」

「姫様・・・どうかご無事で」

三人はハツ！と馬を蹴って墨俣の砦へと向かった。

砦は火が上がっており急がなければ策が水の泡になる・・・そう思った昌秀は間に合つてくれと祈りながら馬を走らせた。

昌秀 織田の窮地を救う

三人が戦場に着くと良晴が守っている砦は陥落寸前の状態であった。櫓の上では良晴が必死になって味方を鼓舞している。

「……この状況は零点です」

「確かにな……しかしここで織田がやられては俺達が困る事になる。高虎！ お前はここで良晴達を援護しろ。そしてこう言いながら闘え。美濃三人衆の稲葉と氏家が敵に寝返ったとな」

「成る程、分かりました」

高虎は頷くと大太刀を肩に担ぎながら敵の懐に向かった。

この虚報を流せば敵は少なからず動揺するだろう。しかし……

俺は派手に燃えている鉢山の方角を見る。

煙が大量に出ており、織田信奈が生きているとは考えられなかった。

俺は首を振ってそれを否定する。

（あの女が本当に織田信長の代わりだとするなら……こんな所で終わるわけが無い筈だ）
そうだそうに決まっていると自分に言い聞かせながら長秀を見る。

長秀は顔を青ざめさせると長刀を構え、すぐに馬を駆つて敵陣に飛び込もうとした。俺はすぐに長秀の傍に馬を走らせ長秀の馬をどおどおと止めた。

「ばっ……何してんだお前っ!？」

「姫様が危険な目にあつて居るのですよ!?! じつとしていられる訳無いでしょうっ!?!」
「それでお前が死んだら俺が困るんだよっ! しっかりしろっ丹羽長秀! 俺の知つてる丹羽長秀は、戦場でそんなに感情的にはならない筈だぞっ!」

長秀は『くっ……』と言うと大人しくなり、ギュッと握る手綱を握る手を緩めた。俺は溜め息を吐いて長秀の肩に手を置いた。

「な、何ですか……?」

「お前の主君をお前が信じてやらなくてどうする? ちゃんとした確信が出てくるまで諦めては駄目だ」

「……そうですね。昌秀の言うとおりです。私が姫様の事を信じないと……」
俺達もそう言っている間にも戦は続いている。

まあ高虎が入ってから敵陣は混乱しているようだが……
俺は戦場を見渡すと敵陣に僅かな隙間が出来ている事に気付いた。

「長秀、あの敵陣の隙間が見えるか?」

「いえ、私には……」

「そうか、ならお前は俺の後ろを只ついて来ればいい。いいか？　よし行くぞ!!」
「ま、昌秀っ!?!」

二人の馬が戦場を駆ける、長秀は俺の言うとおりに後ろをピッタリとついて来ていた。

斎藤家の旗を掲げているからばれないと思っていたが、途中敵将らしき人物が俺らの行く手を遮った。

「待てっ!　お主ら何処に行く気じゃ!　敵を目にして逃げる気かっ!?!」

「俺の邪魔を・・・するなっ!!」

「がっ——」

馬同士が交差した一瞬で俺の十文字槍が敵将らしき人物の首を刎ねた。

飛んできた首を目にして周りの敵の兵は『ひえええ!　味方が寝返ったぞお!』と叫びながら逃亡した。

動揺は伝染し、高虎の虚報と俺の動きが敵兵の疑念を確信に変えた。

斎藤方は大混乱に陥った。良晴達も息を吹き返して反撃を開始し始めた。

長秀は昌秀の後姿を眺めながら聞いた。

「昌秀、何故そこまで・・・織田が負けても長門は痛くも痒くも無いはず。それなのに何故、織田に力を貸すのですか?」

「……お前が勝手に戦場に死に行つたからだよっ!!」

「私が死んでも昌秀には害は無いでしょう?」

「……俺の気まぐれだよ! これは長門家としてではなくて、昌秀個人の独断でやつた事だ!」

長秀はそれを聞くとふふふと微笑みながら『分かりました。感謝します昌秀』と感謝の意を伝えた。

昌秀は槍を構えなおすと『調子狂うなあ』と呟く、気がつくともうすぐ敵陣を突つ切る所だった。

敵陣を無事に抜いて、しばらく進むと織田の旗が翻つていた。

先頭を行くのももちろん織田信奈である。

「姫様っ! ……ご無事で何よりです。九十四点」

「万千代!! どうしてここに!?! って、あんたは長門の……」

「昌秀にはここに来るまで協力していただきました。それより、墨俣をご覧ください」

「そ、そうよっ! サルは! サルはどうなったの?」

信奈は馬を走らせ墨俣を見る。

敵が壊乱状態になりそれを良晴の残党がちまちまと追撃していた。

それを見て信奈はほっとすると、すぐに全部隊に横から義龍の陣へ突撃を命令した。

勝家は意気揚々と『お任せをつ！』と言うと全部隊を率いて向かった。

俺はそこに斎藤家の旗を確認する。

「あれは……？」

「ああ、あれは美濃三人衆よ。ついさつき私達の仲間になったの」

「昌秀の虚言が当たりましたね八十点」

「まさか本当に裏切るとは……」

そうだそういえば美濃三人衆は織田に帰順するんだつた……

俺はすっかり忘れてたと手を額に当てる。

信奈は満足そうに頷くと俺に視線を移した。

「それでよく敵陣の中を突破できたわね。しかもこの敵の大混乱は何？　そういえば貴

方護衛はいないの？」

「質問は一個にしてくれ……」

「何よっ！　私が聞いてあげてるんだから素直に言いなさいよっ！　何よ、何なのよ貴

方はっ！」

(……よく良晴はこんな奴に仕えているな。感服するよ……)

俺は心底そう思いながらハアと溜め息を吐くと、信奈は『今度は溜め息っ!?　織田家の当主の前で溜め息っ!?』とギャアギャアと騒ぐ。

俺が耳を両手で塞ぐと、長秀が『まあまあ姫様、落ち着いてください』と信奈をなだめた。

その後、長秀が一部始終を信奈に説明すると信奈は所々に驚きながらも納得したようだった。

そして義龍は捕らえられ美濃は織田家の物となったのである。

義龍の処遇で広間が騒がしいなど思いながら俺は高虎と城内を見物していた。

もしこの城を落とす事になった時のためである。保険は多いに越したことはない。

一通り見終えると、義龍と廊下ですれ違った。

「……覚えておれ昌秀。この恨みは必ず忘れんぞ」

「ふん……勝手にしろ。次も軽く騙してやるよ」

義龍は苦虫を噛んだような顔を見ると、そそくさとその場を去って行った。

高虎は『大丈夫でしょうか……?』と心配そうに聞いてくる。

俺は遠ざかっていく義龍を見ながら思う。

(信奈は義龍を許したんだな……てつきり殺すかと思っていたが。あの男は生かすとは、存外信奈も甘いのかもしれんな。しかし、義龍が気になる。俺の杞憂であつてくれればいいが……)

いや、今考えるのはよそう・・・と俺は広間へと足を運んだ。

「信奈殿、此度の御戦勝お祝い申し上げる」

「・・・その言葉、素直に受け取っておくわ。それで万千代が言ってたんだけど、貴方達かなり活躍してみたんじゃない?」

「いえ・・・活躍と言えるほどでは——」

「謙遜しないのっ! 正直私だって長門の手を借りたくは無かったけど、今回に限っては貴方に感謝するわ。そこで褒美をあげようと思うのだけど・・・どうかしら?」

「褒美ねえ・・・」

『早く言いなさい!』と信奈は迫るが、昌秀は比較的ゆっくりと考えていた。

信奈はそれを見ると良晴に耳打ちする。

「ねえ、あなたの友人って何時もこんな調子なの?」

「うーん、本当はもう少ししっかりしてる奴なんだけど・・・何か変なモンでも食ったのかな?」

織田家の全員がジッと昌秀に注目する。

昌秀は『おおそうだ!』と手をポンと叩くとニコリと笑いながら言った。

「それでは・・・」

その場の全員がゴクリと唾を飲み込んだ。

すると昌秀は全員が予想だにしないことを口にした。

「確か、尾張はういろう・・・と言う物が名物なんですしたっけ？ いやあ実は先日尾張に
来た時は食べ損ねてしまいました、一度食べてみたいと思うのですが・・・どうでし
ょう？」

「・・・もしかして昌秀、それはういろうを食べさせてくれと言っているのか？」

「当たり前だろ。無論それだけじゃないぜ。他に名物があったらそれも食べてみたい
ね」

「と、殿・・・一体何を・・・」

その場にいる全員が固まる。一緒にいる高虎もまた、驚愕しながら昌秀を見た。

そんな中、唯一長秀だけがクスクスと楽しそうに笑っていた。

「ま、万千代？ どうかしたの？」

「い、いえ姫様。昌秀らしいなと思っただけです」

「すげえ、長秀さんがあんなに笑っていると始めて見たぞ。確かあの二人尾張にいる
時も仲が良さそうだったな。もしかしてあの二人・・・」

「な、何だよ？ どうしたんだサル、変な顔して・・・？」

良晴が勝家のポカンとしている顔を見ながら『そういう事か・・・』と嫌な笑みをし

ながら言うと、勝家は『な、何だよ。どうしたんだサル?』と勝家がしつこく聞くと良晴は勝家の耳元でささやいた。

「もしかして長秀さんって昌秀の事好きなのかな?」

良晴の言葉に勝家は顔を赤らめると、良晴の胸ぐらを掴みながら言った。

「な、ななな何を言い出すんだサル?! 長秀があんな奴の事が好きなわけ無いだろっ!?!」

「しい! 声が大きいつて勝家?! 他の奴らに聞こえちゃうぞ!」

勝家は『ス、スマン・・・』と気持ちを落ち着かせる。

良晴は拳を握り締めながら『あの野郎、俺全然興味ないよ的な顔してたくせに・・・』と黒いオーラが全身から出ていた。

長門家 浅井朝倉連合軍と対陣する

唐突だが、長門家は周辺諸国と仲が悪い。無駄に戦に強いからだろうか理由は良く分からないが・・・

織田とは先代から仲が悪く、長門家の家臣一同は織田家に身内を殺されているため強い恨みを抱いている。しかし重秀の代から、尾張の丹羽家との交流が始まり昔ほどの確執はなくなった。

さて、実は長門家はこの織田家よりも仲が悪い大名家が二つある。

1つは近江の浅井家、この浅井家とは長門家の始祖からの因縁があり互いに仇敵同士であった。しかも領地が隣同士のため頻繁に小競り合いが続いている。

もう1つは越前の朝倉家、確執はそんなには無いのだが・・・重秀曰く『あの男を見てると虫唾が走る』との事。朝倉家の現当主である朝倉義景はかなりの物好きらしい。物好きと言うのも源氏物語が好きらしく、美しい女性を目にすると源氏物語に出てくる人物と重ねてしまうらしい。

つまり長門家は朝倉家が嫌いなのではなく、朝倉義景が嫌いという事だ。まあ、他にもいろいろ理由はあるらしいのだが一番はこれらしい。

そんな周辺諸国と仲が悪い長門家だが、もちろん仲が良い大名家もある。それを三つ程紹介しよう。1つは先程も紹介した尾張の丹羽家、重秀の代から交流が盛んになり現在には昵懇の仲となっている。

他の二つは遠いのだが、越後の竜とも呼ばれる上杉謙信率いる上杉家。もう1つは今は滅びてしまったが美濃の斎藤家である。

何故こんな話をするのかと言うと、広間で褒美の話をしている途中に重秀殿の使いが火急の用件と広間に押し入ってきた。

その内容とは浅井が朝倉と手を組んで、先の戦で奪い取った吉備津城に向かっているという報せだった。

「分かった、すぐ戻ると伝えてくれ」

「はっ」

使者は昌秀の返事を聞くと足早でその場を後にした。

昌秀は重い面持ちで信奈に振り返る。

「聞いている通り、長津の地が危険にさらされていますのでこれにて・・・」

「デアルカ。いいわ、行きなさい」

「はっ」

昌秀は頭を下げて高虎と共に広間を後にした。

昌秀が広間からいなくなると信奈は不満そうな顔をする。

「何よあいつ……一体何を考えているのかしら？」

「俺もさっぱりだ……本当はあんな奴じゃ無かったのにな」

「相良殿、どういう意味ですか？」

長秀が興味深そうに尋ねると良晴は手を組んで懐かしそうな顔で答えた。

「いや、あいつはもつと優しくして正義感のある奴だったんだよ。確かに頭は良かったけど、それを謀略なんかに使うほど悪い奴じゃ無かった筈なんだ。昔は良くいじめられてた奴を庇ってたよ」

長秀は真剣な表情でその話を聞いて『成る程……四十点』と一人で頷くと、真剣な表情から一変して何時もどおりの温和な表情に戻る。

「姫様、私も昌秀の後をすぐに追います」

「どうしたのよ急に？ 別にあせらなくても後で充分間に合うわよ」

「いえ、和議の条約で私が長門家に内政を教えなければなりませんので……」

「……分かったわよ。その代わりちゃんと護衛をつけるのよ？」

「ええ、では……相良殿」

「えっ俺？」

「相良殿はこの仲で唯一昌秀と旧交ある人物、昌秀との交渉も上手くいくかもしれない」

「交渉？ 万千代、どういう事？」

「それは——」

美濃を出て二日足らずで長津の津川城へと到着した。

道中、領地を切り取りに行かせた且元と合流し津川城に入城した。

広間に着くと一門衆と重臣一同が勢ぞろいしていて、ピリピリとした空気が伝わってきた。

その中で重勝が笑いながら語りかける。

「昌秀、よう無事に帰った。美濃の事は聞いておる、盗られた物は仕方あるまい」

「重勝殿、我らも美濃の一部を切り取っております。これをご覧ください」

昌秀は懐から義龍の署名を見せると重臣達がヒソヒソと話し始める。

重勝達は署名を見るとおお！と喜んだ……しかし、重秀の顔は只目を瞑っていた。

「重秀殿……何か？」

「昌秀よ……わしは天下を望んではおらん。わしが心から望んでいるのはこの長津の地

の安寧と、皆が仲良く暮らしてくれる事じゃ」

「しかし重秀殿は戦が好きなのは？」

「確かに戦は好きじゃ・・・戦が来ると血が滾るのを感じるが、それと同時に民の事を考えてしまうのじゃ」

「民の事？ 戦に犠牲はつき物です」

「若いときは確かにわしもそう考えておった。じゃが気付いたのだ、戦は戦を呼ぶ。戦が起これば民が疲弊し国が衰える。わしはそんな事でこの長津の地を滅ぼしたくないのだ」

「重秀殿・・・」

重秀が手を強く握り締めると、永重達も思うところがあるのか黙り込んだ。

その空気を打ち破り重勝が反発する。

「兄上は長津の地を滅ぼすおつもりですか？」

「何を言うのだ重勝。皆が戦をしなければ平和になるではないか」

「その情弱な考え方が国を滅ぼすのです！ 現に浅井朝倉連合軍がすぐそこまで来ておられます！ このままでは長津の地に大量の血が流れまするぞっ!？」

「・・・わしが長津を守らぬと何時言った？」

重秀の顔つきが変わる。その顔つきは戦場のそれだった、広間の空気がしんとなつ

た。

重秀の威圧感に押されて重勝も怯む。

「いえ……そういうわけでは」

「確かに戦は避けなければならぬ。じゃが、奴らが攻めてくるなら話は別じゃ。その身にたつぷりと長門家の槍の味を味合わせてくれるわっ!!」

重秀がいきり立つと永重達や重臣達もおお!!と歓声を挙げて立ち上がった。

こうして長門家対浅井、朝倉連合軍の戦が始まったのである。

昌秀が今回の戦で命じられたのは霧生城、津川城の防衛であった。

戦に出向いたのは重秀殿と重勝、義重の三人と宮部継潤含む重臣一同である。

正直な所戦に出なくて良かったと胸を撫で下ろす昌秀。

「昌秀様は此度の戦はどう見ます?」

「そうだなあ……連合軍は己の欲にしか目が行かぬ烏合の衆、恐らく重秀殿が勝つだろうな」

「しかし、連合軍は一万を超える軍勢ですよ? それに対してお味方は我等の兵を入れて五千程度、倍の兵力です……野戦では勝ち目は無いと思えますが」

「前の戦と一緒さ、兵が倍もいるんだ。自然と気が緩んでくると思うぜ? そこを重秀

殿は狙っているのだろうか……」

且元は成る程！と手をポンと叩くと、お茶を淹れる為何処かに行ってしまった。

昌秀は広間から見える霧生の地を見ながら思う。

(嫌な予感がする。何も起こらなければいいが……)

高虎は昌秀を見つけると新しく増えた領地の事を報告に来た。

「殿、先の切り取った領地の事なのですが……」

「ああ、どうだ民心の方は？」

「それが比較的友好的です。重秀様の人徳が行き届いているのでしよう」

「そうか……すごいなあの人には」

「殿？ どうかしたのですか？」

「いや、何でもない……」

高虎は首を傾げると仕事が山積みだったと駆け足で広間から出て行った。

昌秀はそれを見送って再び外の景色を眺めた。

すると見覚えのある人物を見かける。

「ん……？ あれは……」

よく目を凝らしてみると長秀と良晴だった。

すっきり長秀の事を忘れてたと昌秀は急いで出迎える為に外へと向かった。

昌秀は予想だにしなかつただろう、自分の嫌な予感が最悪の形で当たるとは……

長門家 窮地に立たされる

昌秀が長秀達を出迎えるため外に出ると、城内の兵は長秀達を警戒してか弓を構えていた。

昌秀が手を挙げて制すると兵達は渋々弓を下げた。

昌秀は申し訳無さそうに言う。

「すまんな。浅井朝倉が迫ってきているんで殺気立ってんだ」

「兵達が警戒するのも無理ありません。それよりお話があるのですが・・・」

「ああいいいぜ。早速あがってくれ・・・もてなそう」

「すごいな昌秀。もう城持ちなのか？」

「まあ・・・成り行きでな」

「どういう成り行きだよ・・・」

昌秀は気にすんなど言うとか城内へ案内した。

昌秀は自分の書齋に案内すると部下に茶と茶菓子を用意させた。

長秀は無言で茶を手にとると一口啜った。

「美味しいお茶ですね八十点」

「本当だ・・・インスタントのお茶とは全然違うな昌秀」

「インスタントとか言うな」

長秀は『いんすたんと? またサル語ですか・・・』と首を傾げると、茶菓子を手にとりそれも美味しそうに頬張った。

「あら、この茶菓子も美味しいですね九十二点。これは何と言うお菓子ですか?」

「内緒だぞ? これはカステラと言う食べ物だ。元々、西洋のお菓子なだけども。見よう見まねで作ってみた」

「うお!? 本当だこれカステラじゃねえか!? 昌秀、よく作れたな?」

「仲の良くなつた行商人に砂糖やら小麦粉やら材料を注文したんだよ。オーブンは無かつたから釜作つてそれで焼いた。でもやつぱりあの味は再現できないんだ・・・」

「それでも充分凄いや! この時代に来て久しぶりに食つたよ」

「そりゃあ良かった・・・つて違うわっ!? お前ら何しに此処に来たんだよ? それを聞くためにここに案内したんだから」

「そ、そうですね・・・私としたことがつい珍しい茶菓子が目が入つてしまい本題を忘れる所でした。二十点」

長秀は顔を赤らめながら手に持っていたカステラを皿の上に置いた。

そしてキリツと何時もの表情に戻すと昌秀を真つ直ぐ見ながら話し始めた。

「単刀直入に言います。昌秀、織田に来ませんか？」

「な、長秀さん!？」

「・・・それは俺に長門家を裏切れと言っているのか？」

「ええ、相良殿より貴方の過去の話をお聞きしました。貴方が無理に長門で謀略をふるう事はありません。どうでしょう？ 織田に来ませんか？」

昌秀が無言で良晴を睨み付けると良晴は口笛を吹きながら目を逸らした。

「・・・ワザとらしいなこの野郎と思いつながら目線を長秀に戻す。

「せつかくの誘いだが断らせてもらう。俺は重秀殿に命を救われた。この恩を返さなきゃいけないからな」

「昌秀・・・」

「話は終わりか？ なら帰ってくれ・・・俺は万一の際に軍備を整えなきゃいけないんだ」

昌秀が話を一区切りして立ち上がると甲冑を着た部下が大慌てで戸を叩いた。

「昌秀様！ 昌秀様！ 大変です!!」

「どうした？ そんなに慌てて・・・」

「重勝様が・・・」

「重勝殿がどうした・・・？」

「浅井朝倉との戦で流れ弾に当たって．．．お亡くなりになりました」
「．．．何だと？」

昌秀の書齋が一気に静まり返る。

長秀は信じられないといった顔をして、良晴は何が何だか分からない様子であった。

昌秀も馬鹿な．．．と驚きが隠せない様子だった。

「一体どういう事だ．．．説明してくれ」

「はっ．．．それでは」

伝令の話によると、長門軍はかなり善戦したようだった。

戦の初日は重勝率いる二千の兵が敵将三人を討ち取り、五百の死傷者を出させ敵を三
里程撤退させたという。

二日目も敵は力攻めで迫ってきたが、城兵の激しい抵抗と突如現れた重秀率いる千五
百の奇襲で敵は総崩れになったという。

問題の三日目、連合軍は力攻めは無理と判断したのか城を包囲した。しかも包囲して
いる最中に重秀の事を罵倒し始めた。これに腹を立てた重勝は二千の精鋭を率いて出
陣、二千の兵は物凄い強さで敵を攪乱したが最後には包囲されて全員討ち取られた。

昌秀は話を聞きながら残念そうな顔をする。

「これで俺らの総兵力は三千足らず……いや、今霧生城にいる兵も合わせれば五千がい
い所か」

長門家は美濃の一部と近江の一部を切り取っていたので総兵力が以前より上がって
七千前後に膨れ上がっていた。

長秀が心配そうに尋ねる。

「重秀殿は如何に？」

「はっ……実の弟の重勝様の死が堪えたようで今は床に臥せっておいでです」

「重秀殿は病にかかったのか？」

「はい、そのせいで城内の士気が著しく落ちてきております。今は義重様が何とかして
いますか……」

昌秀が黙り込んで机から吉備津城一帯の地図を取り出す。

昌秀は伝令に高虎と片桐親子を呼んで来いと命じた。

霧生城の広間は鬱々とした空気に満ちていた。

家臣の中には降伏するしか無いのではないかと言う者も出て来たほどだ。

長秀と良晴は昌秀が最近召抱えた者と誤魔化した。

無論、高虎と且元は織田の者と言う事は知っている。

「昌秀様っ！ 今すぐ救援に向かいますよう！」

且元の父である直貞が言うとか家臣の半分がそれに同調する。

しかし一方では降伏すべきではないかと言う意見が出て、これまた残りの半分の家臣が同調した。

降伏か救援か二つに意見が分かれている状態である。

「昌秀様は重秀殿を見殺しにするおつもりですか!？」

「父上っ！ それは言いすぎです!!」

「且元は黙つとれ！ 武士は主君に忠義を尽くすからこそ武士なのだ!」

ギヤアギヤアと広間は騒がしくなる。

それを心配そうに見つめる良晴と長秀。

「なあ長秀さん。昌秀は大丈夫かな？」

「大丈夫です。書齋を出る時の昌秀の目を見ましたか？」

「えっ？ いや見てないけど・・・」

「あの鷹の様な目はきつと策を思いついた顔です。策と言うのは私にも分かりませんが・・・」

二人はジッと昌秀を見つめる。

昌秀はいきなり立つと家臣達を一喝した。

「今は仲間同士で争っている場合じゃないだろうっ!! 重秀殿を救うには俺らが団結して当たらなきゃならねえ。今のバラバラの状態じゃ戦う前に負けてしまうぞ!!」

昌秀の言葉で広間は一気に静まり返った。

昌秀はスウト一呼吸すると再び口を開く。

「・・・いいか、これより吉備津城を救援に向かう。そこでこれから策を言うから良く聞け」

昌秀は吉備津城周辺の地図を出して作戦を説明し始めた。

翌朝、昌秀は城内の兵二千の兵を率いて出陣を開始した。

昌秀 連合軍を退ける

昌秀率いる二千の兵は吉備津城の近くにある山に陣を張った。

吉備津城は完全に包囲されていて、重秀殿達が脱出するには包囲を突破するしか無かった。

昌秀は陣から見える敵の包囲を眺めながら考え込んでいた。

「敵は一万はくだらんな．．．重勝殿が善戦してこの兵力差とは」

床机に座りながら抱え込む昌秀に何故か一緒に付いてきた良晴達が心配そうに声をかけた。

「おい昌秀、本当に大丈夫なのか？ この兵力差で．．．」

「策はずでに打つてあるが、まだ少し不安だな．．．」

「昌秀、敵は固く包囲していてこれを破るのは不可能です。四点」

「お前ら、何でついて来たんだよ．．．ここは危ないんだぞ？」

「安心しろ。俺らは戦わないから」

「いや、そういう問題じゃねえよ!? ここは戦場になるから危ないって言うてんだ!」
慣れないツツコミをして疲れたのか昌秀はハアと溜め息を吐いた。

すると高虎達が慌てて陣に入ってくる。

「殿！ 先程、浅井に送っていた間者が文を持ってきました」

「見せてみる・・・何？ 朝倉が撤退するだと・・・？」

文には確かに朝倉勢撤退の文字が書いてあった。

にわかには信じがたい話だが敵を見ると確かに朝倉方が撤退を準備していた。

「追撃しますか？」

「いや・・・今は城を救うのが最優先だ。まず浅井勢を叩く、恐らく敵の大將は長政だろう」

これが浅井久政であつたなら城の士気が落ちた瞬間に力攻めをしていただろう。

俺は長政の用心深さに少し感謝しながらホツと胸を撫で下ろした。

正直、俺の練つた策は高確率で連合軍を撃退できるものの、かなりの犠牲を覚悟しなければならなかつた。

「これより浅井を殲滅する。高虎、お前は鉄砲隊四百と騎馬兵二百を率いて敵の退路を断て。残りの者は俺と供に、敵の包围を破る」

「はっ!!」

高虎はハキハキとした声で返事をする、意気揚々と陣を後にした。

且元達も城を出る前より生き生きとした表情になった。

「それじゃあ行つて来る。お前らはここで長門家の戦を見てな」

「昌秀!! ……生きて戻れよ?」

「当たり前だ……こんな時代で死んでたまるかよ」

昌秀は少し笑うと家臣に取つて貰つた十文字槍を挙げて戦場へと向かつた。

山を下りた昌秀は陣形を突破力の高い鋒矢の陣を敷いた。先方を昌秀率いる五百の騎馬兵、左翼を片桐直貞率いる四百の足軽隊、右翼を且元率いる足軽隊三百、真ん中に弓兵二百の兵を置いた。

昌秀は敵の見える位置まで近づくと大きく息を吸つて味方に聞こえる声で叫んだ。

「これより吉備津城を救う!! 全軍突撃!!」

千四百の兵が浅井勢の包囲の一角に突撃を開始した。

その行軍は見事で陣形を崩さず真つ直ぐに浅井の包囲に突き刺さつた。

奇襲を受けるとは思わなかつたのか浅井勢の包囲は容易く崩れ去つた。

義重は昌秀の姿を確認すると、すぐに城内の兵に打つて出るように伝えた。

「長津の地に敵を入れてはならぬ!! 死んだ重勝様の弔い合戦ぞっ!!」

「おおおおおお!!」

義重の鼓舞に味方は士気を取り戻し、義重率いる三千も浅井勢に突撃を開始した。

長政は形勢不利と判断したのかすぐに軍を引き上げさせ近江へと向かった。

——近江国境にて

浅井勢は吉備津城からやつと逃げて、撤退時の奇襲を警戒して遠回りの森を通っていた。

「この先の峠を越えれば近江である。」

「くそ、まさか昌秀がここまでやるとは……」

「長政様、もう少しで近江に入ります。ぐ辛抱ください……」

浅井勢はボロボロの状態でもうすぐ近江と言う所までやってきた。

兵達がドツと湧いて、長政の近習が『長政様、もう直ぐですっ!』と言った瞬間、パ
ンと乾いた音が鳴り響いた。

近習は胸から流れる血を見て不思議そうな顔をする。

近習が上を見上げると峠の上に鉄砲隊が陣取っていた、それを率いていたのは黒い髪
を一本に結び、水晶のような綺麗な目が特徴的な女だった。

不覚にも近習は今死ぬと言う時にその姿をみて『美しい……』と思った。

近習が自分の血にまみれた手を上にかざすと、上からは容赦の無い弾丸の雨が降り注

ぎ近習の視界は真つ黒になった。

長政は上手く近習を盾にすると全速力で走って近江へと逃れた。

浅井勢はある者は降伏し、ある者は射殺されてちりじりになった。

昌秀達が吉備津城へ入場すると城兵達が歓声を挙げて出迎えた。

義重も宮部も笑いながら近づく。

「昌秀、此度の戦見事であつたぞ」

「私の見立て通り昌秀殿は稀に見る才をお持ちでしたな」

「やめてくれ。朝倉が撤退しなければ救えなかつたかもしれない……」

「しかし結果はお味方の大勝利でございます。浅井勢は武具弾薬や兵糧まで置いて逃げ去つていきましたぞ!!」

宮部は坊主頭を光らせながら浅井が逃げ去つた後を指差した。

三人で談笑していると重秀が体を引きずるようにやつて来た。

「昌秀、ようした。これで敵も当分は攻めてはこれまい……ゴホツゴホツ!!」

重秀は片膝をついて口に手を当て咳き込んだ。慌てて昌秀達が駆け寄る。

その手には血がついていて顔も青ざめている。誰の目を見ても長くはない事は明らか

かであつた。

「父上……」

「義重、わしが死んだら家督を永重に譲る。お主ら若い者達で長門を守ってくれ……」
「何を弱気な事を……父上にはまだ生きて教えてもらう事が沢山あります!! ここには
いない兄上もそれを望んでおります!!」

「弱気な事を申すでない!!」

重秀の力強い言葉に義重はビクリと肩を震わせた。重秀は一呼吸して呼吸を落ち着
かせる。

「いずれはお主らが守らねばならぬのだ。それが只早いか遅いかと言う事じゃ」

義重は最初は号泣していたが、しばらく経つと重秀の目を見ながら黙つてコクリと頷
いた。

重秀はそれを見るとニコリと父親らしい笑顔をして昌秀に視線を移した。

「昌秀よ……」

「重秀殿……」

昌秀は何ともいえない顔をしながら重秀を見た。

「お主はもう大丈夫じゃ。もう充分他の家でもやっていける……もう長門家に縛られる
必要ない」

「縛られるなど……」

「よいのじや。好きに生きよ……無事に元の時代に帰れるとよいのう」

その言葉を聞いた瞬間、自然と涙が出た。

周りにいる兵達も同じように涙を流している。

重秀の病状はさらに悪化し、咳をする感覚も短くなってきた。

「昌秀……お主にわしの所有している家宝を全部やる。好きに使うが良い……よいな義重？」

「はい……私は異論ありません」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。そういうのは時期当主である永重にやるべきじゃないのかっ!？」

「よいのだ……お主になら託せる。永重も分かってくれる筈じや……」

「しかし……」

重秀はカツと目を見開いて、無理矢理立ち上がると病人とは思えないパンチを昌秀に食らわした。

あまりの衝撃に吹っ飛ぶ昌秀。

「痛つてえ!! 何すんだよ!？」

「よいかつ! すでにお主は我等の家族の様な者じや! 息子に家宝を渡すのは当然で

あろう！」

重秀は激しく咳き込むとその場に倒れこんだ。

昌秀は殴られた頬を押しえながら体を起こして重秀を見る。

「昌秀よ・・・好きに生きよ。お主がこの乱世に深入りする必要は無い。この時代の事はこの時代の人が何とかせねばならぬ・・・」

重秀は再び咳き込むと何とか呼吸を整えて口を開いた。

「長門は永重達に任せよ・・・この二人でも充分長門を守りぬける」

昌秀は黙って頷いて答えた。

重秀は満足そうに笑うと仰向けになつて空を見上げた。

「未練は無く・・・恨みもなく逝けるとはわしは果報者じやのう——」

連合軍を追い払った翌日津川城で重秀の葬儀が行われた。

あの後、後から来た高虎と長秀達が重秀の死を知つて落胆した。

昌秀は葬儀の途中、ひっそりと抜け出して縁側に出て人が死んだのに澄んだ青色の空を眺める。

昌秀は殴られた頬を気にしながら思う。

あの時の重秀の顔は今までに無いくらい穏やかな表情だったと・・・そして重秀は俺

の父親よりも父親らしい人だったと……

(重秀殿……あんたの言うとおりで。俺は長門に縛られていたのかも知れないな……あんたに命を救われたからその恩を返そうと必死になつて……)

昌秀は流れている雲を眺めながらハアと溜め息を吐いた。

「馬鹿だなあ……俺」

「誰が馬鹿なんです？」

昌秀が振り向くと見慣れたリボンをつけた長秀が立っていた。

昌秀 出奔する

長秀は真剣な眼差しで昌秀を見ると昌秀の隣に座った。

何処から持ってきたのか、カステラを乗せてある皿を置く。

長秀は残念そうな顔をしながら昌秀に話しかけた。

「重秀殿の事は残念でした・・・あの方は私の父上の親友でして、私が小さかった頃はよく遊んで貰った事もありました。あの人は長津の地をよく治めていたと思います」

昌秀は黙って長秀の話聞く。どうやら予想以上に重秀の死は堪えていたらしい・・・

「しかし重秀殿が死んだ今、長津の地は混乱が起きるでしょう。そんな時に霧生の地を治める貴方がしつかりしなくてどうするのですか・・・？」

確かに重秀が死んだ日から吉備津城周辺の豪族が浅井方に寝返るといふ事態が多発していた。

昌秀の家臣でも降伏を願い出た者達が裏切るのではないかと言う噂も広がっている程であった。

昌秀は死んだ魚のような目で長秀を見つめる。

「分かっている・・・頭では分かっているんだ・・・けど」

「けど?」

「あまりに急すぎてな．．．お前にだから言うが、俺は重秀殿の事は結構慕っていたんだよ。いや、慕っていたってのは間違いだな、俺はきつとあの人のことを尊敬していたんだと思う」

「尊敬ですか．．．?」

昌秀は義重が渡してきた重秀の脇差を懐から出すと長秀に見せる。

長秀は脇差を手にとると『これは中々の脇差ですね．．．』と刀身を眺める。

「脇差自体は名刀と言うわけじゃないが、義重が言うに毎日手入れを欠かさなかったぞうだ．．．しかも死んだ日も手入れをしてたって話だ。笑えるだろ?」

「重秀殿らしいですね．．．」

「あの人は何ていうか．．．こう竹を縦に割ったようなスカツとした性格だ。戦のときは自分から馬を駆って突撃して敵を蹴散らした。民や部下から信頼され、敵からは畏怖される存在だった。俺はあの人とは違って損得勘定で考えてたから、よく重秀殿に怒られたよ」

昌秀が言うのと長秀はクスクスと笑い始める。

昌秀が『何が面白いこと言ったか?』と尋ねると長秀は『何でもありません』と首を振った。

「長秀、ありがとうな。お前に話したら気が楽になったよ」

長秀は笑いながら『どういたしまして』と言うと、カステラを昌秀に渡して何処かに行ってしまった。

昌秀は両手で頬を叩いて気合を入れる。

「うしっ！　まずは霧生から手にかかるか・・・」

昌秀はそう言いながらカステラを頬張ると急いで霧生に向かった。

重秀の死から三日後、昌秀は領内の事で走り回っていた。

重秀の死は予想以上に影響しており、家臣達の中に不穏な空気が満ちていた。

そこで昌秀は永重に浅井の領地を少しでも切り取ってはと進言すると、永重はこれ快く承諾。永重率いる四千の軍勢は吉備津城を北上、周辺の城を次々と攻略した。

これを見た家臣達は長門家優勢と判断したのか、態度を一変して長門家に忠誠を改めて誓った。

長津の地が安定してきた頃、永重と義重が昌秀を尋ねてきて重秀の家宝を渡しにやってきた。

重秀の持っていた遺産は様々で、特に長門家に代々伝わる名刀『蔓丸』は中でも群を抜いて見えた。

しかし昌秀が欲したのは馬だけであった。

「昌秀、遠慮する事はないのだぞ？ 父上がお主にすべてやると申したのだから・・・」

「そうだ昌秀、何なら全部やつてもいい」

「いや、俺は馬だけでいい。それに俺は長津の地を出て行くつもりだ」

昌秀の出奔発言に開いた口が塞がらない永重とそれを黙って見る義重。

「な、何を言う。お主がいなければ誰がこの霧生の地を治めると言うのだ？」

「俺は片桐直貞殿が適任だと思う。それに娘の且元もいるしな・・・」

「・・・本気か？」

「本気だ。ここに居ても元の時代に帰る手がかりも得られなさそうだしな」

「・・・分かった、止めはすまい。義重異論はあるか？」

「無論です兄上。昌秀、父上の遺言どうりに好きに生きよ。だが、もし辛くなったら何時

でも帰って来い」

「なあと、長門は我らで守って見せるさ。だから安心していつて来い！」

「・・・ありがとう」

昌秀は二人に頭を下げて深く感謝した。

その日の夜は三人でここ最近の思い出話や、昌秀のこれから長門はどうするべきかを

話し合った。

一週間後、昌秀は高校の制服を着てバッグを背負つて、貰つた重秀殿の名馬『麻月』に乗つて霧生城を出た。一応護身用に太刀を一本身につけている。

とりあえずは尾張に行こうと思つていた、近場から帰る手がかりを探そうと昌秀は考へていた。

長秀達はと言うと、重秀殿が死んだ日から俺の家臣達に内政の事を教えるとつい先日織田に帰つた。

昌秀が麻月に乗つて大分進むと手ごろな岩場があつたのでそこで休憩する事にした。

昌秀が竹筒に入つた水を飲んでみると、見慣れた二人が目の前で息切れをしながらやつてきた。

高虎と且元である。

「昌秀様、何ゆえ出奔なさるのですか!？」

「殿、長門はこれからなのですよ?」

「・・・俺はこれから元の時代に帰るための旅に出るつもりだ。城の事は且元、お前の親父に託した」

「知つてます・・・先日、永重様から聞きました。それより、何故一人で行こうとするの

ですか……」

「これは俺の問題だ。お前らまで巻き込めないだろ……」

「殿、私は貴方に忠誠を誓いました。たとえ地獄に落ちても貴方について行きますよ」

「私もです。私は腕に自信はありませんが、それでも貴方に忠誠を誓った身。お供しますよ?」

「……馬鹿だなあ、お前ら」

昌秀の言葉に二人は『なっ!』と顔を赤らめた。

「まあいいや。だけど且元、お前は駄目だ。後ろを見てみる」

且元が後ろを見ると直貞達が追ってきていた。

且元は涙目になりながら戻るのを拒否する。昌秀は近づいて且元の頭を撫でる。

「且元、お前は霧生城を守っていてくれないか? 帰る方法見つけたら必ず戻ってくるからよ」

「……信じていいんですね?」

「当たり前だ。嘘を言う男に見えるか?」

「殿、恐れながらメチャクチャ見えます」

「……マジで? つて違う違う。且元、霧生城を頼んだぞ?」

「……分かりました。昌秀様、どうかご無事で」

且元は涙を袖で拭うと、振り返って直貞の元へと向かった。

高虎は腰につけている太刀を取ると昌秀に渡した。

「これは……もしや蔓丸か？」

「ええ、永重様が殿の事を心配だからこれだけでもと預かりました」

昌秀は『あいつ……』と呟くと蔓丸を腰に差して麻月に跨った。

「さて、そろそろ行くとするか？」

「ええ、お供します」

二人は馬蹄を鳴らして尾張へと向かう。

その時、高虎が見た昌秀の顔は凄く生き生きしていたという。

昌秀 お金を稼ぐため寺子屋を開く

昌秀達は尾張に着くとある厳しい現状に直面する。

お金が無いのだ・・・理由としては道中飢えて苦しんでいる農民がいたので自分の金を農民に分け与えていたためである。

昌秀は『やつちまった・・・』とガクリと膝を落として落ち込んだ。

「殿、大丈夫ですよっ！ お金が無ければ働けばいいんです!!」

「それはそうだが・・・どうやって?」

「それは・・・仕官とか?」

「阿呆、こゝは尾張だぞ・・・って事は織田家の領地だ」

昌秀は極力長秀には顔を合わせたくはなかった。何故かと言うと単純に苦手なのと、ご先祖様かもしれないと言う可能性が頭をよぎるからである。

しかしこのまま無一文というわけにはいかないのです、昌秀は適当に廃寺を借りる事にしました。

高虎は首を傾げて何をするか尋ねた。

「殿・・・一体何を?」

「仕方ないからここで学問を教えようと思ってな。まあ、最初は百姓辺りに教えていく事にするよ」

「……私は何を？」

「……客寄せってどこか？」

「殿……私は武士ですが」

昌秀は知つてると笑いながら答えると、バッグの中から女性用の涼しい色の着物を取り出した。

高虎は昌秀の顔を見ると、嫌な予感がすると直感した。

「殿……これは一体」

「いいか、ここではお前の名前は『お菊』だ。そして俺は『天安』と名乗る。高虎、俺と夫婦を演じろ」

「な、ななな何を……?」

「俺とお前の正体がばれたら色々マズイだろ。しかし逃げてきた避難民なら織田も疑うま、」

高虎は頭では分かっているようだが、どうも心の決心がつかないらしい。

昌秀はもどかしくなって着物を高虎に押し付ける。

「いいから着ろ！俺だつてこの坊さんの服着るんだからっ！」

「うう……辛い道のりだとは思ってましたが、これは予想しておりませんでした……」
「泣くな、きつと人生良いことあるさ」

「そう信じます」

こうして天安とお菊は寺子屋を開く事になった。

これは余談だが百姓から思いのほか人氣が高く、廃寺では入りきらなかつたので百姓達が力を合わせて新しい寺を作った。これを百姓達は『天安寺』と呼んだ。

清洲城の廊下を歩いてた長秀はお茶を啜りながらハアと溜め息を吐いた。

溜め息の理由は昌秀の事である。つい数週間前に昌秀は長門家を出奔、現在は行方知らずとなっておりそれを聞いた相良良晴は随分心配していた。

「まったく一体何処で何をしているのやら……四十点」

長秀が少ない休憩時間を茶を啜りながら満喫していると、部下が一人長秀に近寄り耳打ちする。

「長秀様、姫様がお呼びです」

「姫様が？ 分かりました、すぐ参りますと伝えなさい」

「はっ」

長秀が広間に着くと、織田信奈は尾張名物のうしろ手を頬張りながら言った。

「万千代……あなた最近、『天安寺』って聞いたことある？」

「ええ、確か流れ者の破戒僧とその妻が百姓達に色々教えていると言う話ですね」

「そう。でもこの破戒僧、ちよつと怪しいと思わない？」

「??? 何がですか？」

「この破戒僧はね、百姓達の噂ではどうしても頼んだところ、治水作業を指揮したそうよ。一介の破戒僧如きがこんな芸当出来ると思う？」

「……確かに怪しいですね。それが他国からの間者だとするなら……二十点です」

「そうですね。でもいい才能を持つてると思うの。どうにかして登用できないかしら？」

「そうですね……では私が参りましょう」

「ええ、お願いね」

「はい、お任せを♪」

長秀は笑いながら答えると広間を後にした。

翌日、長秀はその破戒僧に会うため天安寺に向かった。

天安寺に向かう途中、長秀は行く先々の百姓達の顔を見る。

百姓達は何時もより生き生きとした表情で農業に励んでいた。

長秀が少し進むと、見慣れない水車と今までには無かった池が見えた。

長秀はそこらの百姓を捕まえると水車の事を尋ねた。

「あれは天安様が考案した物だみやあ。あの池は溜池つて言うらしくて、もし水不足の時はあの池から引つ張つて来る事ができるようになつてゐるらしいみやあ」

「成る程、天安殿は中々の才人と見ました。出来れば織田家に仕えて欲しいものです」

「天安様を？ 長秀様、それは無理だみやあ」

「何故ですか？」

「天安様は、何故か織田家の人とは面会しないみやあ。つい先日にもサル殿が出向いたのですが門前払いされたらしいみやあ」

「良晴殿が……？ そのような話聞いておりませんが……」

長秀が不思議そうな顔を見ると、百姓はそれでは……と何処かに行つてしまった。

長秀は遠くに見える寺を見ながら『とりあえず会つて見ないと分かりませんね』と眩く天安寺へと急いだ。

一方昌秀もとい天安は百姓に貰った食材を調理していた。貰った物は主に野菜、それと自分がとってきた魚である。

昌秀は野菜を切って味噌汁にし、魚は塩焼きにした。

昌秀は高虎と向かい合わせで手を合わせた。

「と．．．じゃなかった。あ、あなた．．．」

「無理するな。俺だつてそろそろきつくなつて来た」

「殿．．．最近百姓達が『仲の良い夫婦だみやあ』と噂しておるのですが」

「ふつ．．．やつと俺達も天安とお菊として馴染んできたつてことだろう」

「私は耐えられそうにありません。それにこの着物も．．．」

高虎は顔を赤くしながら自分の着物を見る。

「私は女物の着物は似合わないのです。やはり何時もの甲冑の方が．．．」

昌秀はこいつは何を言っているのだろう．．．と思った。

．．．その容姿で似合わない何て言ったら且元が大激怒するぞ？

ぶつちやけ良晴だったら襲いかねないレベルだ。

昌秀は先日追い払った良晴を思い出しながら思う。

昌秀が気を取り直して焼き魚に手をつけようとした所、不吉な事に片方の端の先端がポキリと折れた。

高虎はそれを見ながら『不吉ですね．．．』と呟く。

昌秀も『まったくだ．．．』と言いながら、折れた箸を見つめた。

「．．．嫌な予感がするな」

「嫌な予感？」

二人が話していると教え子の一人が客人が参りましたと駆け寄ってきた。

「客人？ 誰だ．．．？」

「織田家重臣の一人である。丹羽長秀様です」

「．．．嫌な予感って本当に当たるんだな」

「と．．．じゃなかった。あ、なた．．．」

高虎は教え子の前なので無理して未だに慣れない妻のフリをする。

昌秀はハアと溜め息を吐くと、視線を教え子に戻す。

「対応は決まってる．．．追い返せ」

「分かりました」

昌秀 長秀達に誘拐される

長秀は一度追い返しても諦めず、二度三度と尋ねてきた。

四度目の訪問となると流石に昌秀も根負けしそうになった。

「また来たのか・・・いい加減諦めて欲しいもんだ」

「そうですね。長秀殿がここまでするとは思いませんでした」

二人がハアと溜め息を吐くと、何時もと違って外が騒がしくなってきた。

「何だ・・・喧嘩か?」

「天安様、一大事です! 門前で長秀殿が妙な輩に囲まれていますっ!」

「・・・何だと? 供の者はいないのか?」

「はい、今日はお一人で来られたようです」

高虎の顔が険しくなり昌秀に目をやった。

昌秀もコクリと頷くと、頭に笠を被って床下に隠していた蔓丸を手にとった。

「天安様、外は危険です!」

「安心しろ、ちよつと注意するだけだ」

「刀を持ってですか?!」

昌秀は安心しろと言いながらズカズカと門前へと向かった。

高虎も懐に隠した小太刀を持って昌秀の後を追う。

昌秀は扉を少し開けて状況を確認した。

確かに長秀が笠を被った山賊のような格好をした三人に囲まれていた。

しかも一人は胸があるのを見ると女のようなようだった。

昌秀は女山賊とは珍しいな・・・と思いながらも出るチャンスを待った。

やがて一人の山賊が刃物を持って斬りかかろうとした瞬間昌秀は動く。

素早く蔓丸の柄で鳩尾を打つと山賊は腹を抱えてその場に崩れ去った。

もう一人の山賊が仲間が倒れたのを確認すると、こちらは拳で殴りかかって来た。

昌秀は拳を受け止めて刀を握っている手で殴り返す。

すると何時の間にか女山賊が刀を抜いて昌秀の背後をとっていた。

(いっつ・・・!? マズイ・・・やられるっ!?)

昌秀が斬られる覚悟をした瞬間、高虎が現れて持っていた小太刀で相手の斬撃を受け止めた。

女山賊は高虎に驚いたのか体制を崩す、昌秀はそれを見逃さずに蔓丸を鞘ごと下段から相手の頭へと向けた。しかし女山賊も反応し、後ろに飛んでかわした。昌秀の攻撃は

相手の笠を破く。

そして女山賊の素顔を見た瞬間、昌秀は固まった。

「……勝家？」

「お、お前何で私の事を知っているんだっ!？」

「勝家殿……素顔を見られては意味が無いでしょう。三点です」

「そ、そんなあ……急に出てきたあいつがいなければ一撃で仕留められたのに」

「おいおい勝家、お前の役割はそんな事じゃないだろ?」

「うるさいサル! 大体お前はすぐにやられすぎだっ!! 何で一回殴られただけで伸びているんだっ!」

「し、仕方ないだろう?! 以外に天安つて奴が強かったんだから……」

ギヤアギヤアと騒ぐ二人に昌秀達は状況が理解できず混乱する。

長秀はニツコリと笑いながら昌秀に近づく。

「お騒がせして申し訳ありません。こうでもしなければ天安殿に会えないのでやらせて頂きました」

「……織田の者は破戒僧に会うために騙まし討ちを仕掛けるのか?」

「騙まし討ちなど滅相も無い。私は只あなたとお話があっただけです。まあ、確かに勝家殿が暴走してしまいましたか……」

長秀がチラリと勝家を見ると、勝家は『ええく！ 私のせいなのかつ!』と頭を抱えてうな垂れた。良晴はそれを見てざまあみろと笑う。

「・・・織田と話す事など一言も無いのだがな」

「貴方には無くても私にはあるのです。お時間頂いてもよろしいですか？」

昌秀は少し悩んだが長秀達を入れることにした。

長秀、勝家、良晴の三人は天安寺の客間に通された。

三人の山賊の内、昌秀にやられた最初の一人は川賊の一人だったようで先に帰ったようだった。

昌秀は笠を被ったまま長秀達の向かいに座る。

「おい、お前は客の前で笠を被るのかっ!？」

「無礼な奴らを客と認めた覚えはないな」

「何だどっ!？」

勝家が刀に手をかけると長秀がそれを止めた。

勝家は渋々手を離す。

「失礼いたしました。天安殿、貴方の力量を見込んで言います。織田に仕官しませんか？」

「断る」

「おい返答早すぎだろっ！ なあ天安さん、信奈に会うだけでもいいから一緒に来てくれないか？」

「嫌だね、大体俺はお前らがよく知ってる人物だぞ？」

「……はっ？」

昌秀は意地悪な笑みを浮かべると、笠をはずして横に置いた。

三人は笠を取った昌秀を見て啞然とする。

「ま、昌秀っ!? 何で尾張にっ!」

「何でって長門家を出奔してきたんだよ。今は元の時代に帰るために旅をしているんだ」

「……零点です。まさか天安の正体が昌秀だったとは……」

「どうりで私の事を知ってるわけだ……」

「で? どうする? これでも俺を連れてくか?」

「……そうですね。とりあえず姫様に会ってもらいましょう」

「えっマジで……?」

長秀が昌秀の腕を抱えると勝家が反対の腕を掴んだ。

昌秀はそのまま長秀の馬に無理矢理乗せられる。

高虎がそれを見て着物姿のまま昌秀の麻月に乗って追いかけてきた。

「殿っ!? おのれ織田めっ! 殿を連れ去るつもりだなっ! 許せんっ!」

「昌秀、何だあの可愛い子はっ! お前あんな可愛い子に慕われてんのかっ! 説明しろ!」

「こらサルっ! 大人しくしろっ!」

良晴は勝家の後ろでワケのわからん事をギヤアギヤアと騒いでいた。

昌秀はそれを見ると溜め息を吐く。

「昌秀・・・霧生の方はいいのですか?」

「・・・霧生には片桐親子を残してきた。あいつらなら大丈夫だろ」

「片桐親子を・・・六十三点」

「何だ、随分微妙な点数だな」

「貴方が守っていれば百点満点だったのですけどね」

長秀は残念そうにハアと溜め息を吐く。

「珍しいなお前が溜め息なんて・・・」

「四日もかけて会えた天安殿が知り合いだったら溜め息だつて吐きたくなります」

「・・・それはそうだな」

昌秀がうんうんと頷いていると、長秀は凄い殺気を出しながら昌秀をにらんだ。

「な、何だよ……」

「……何でもありません」

長秀はムスツとした表情になると手綱を握り締めて尾張へと急いだ。

昌秀 再び丹羽屋敷にお邪魔する

清洲城の広間では織田家の当主である織田信奈が、見るからにイライラしながら昌秀を見ていた。

長秀は申し訳無さそうに目を瞑っていた。

昌秀も昌秀でムスツとした表情でどっしりと構えている。高虎は昌秀の後ろで不機嫌そうにうつむいていた。

そんな彼らを何事もないようにと見守る家臣一同。

「……これはどういう事かしら万千代？ 私は天安を連れてきてって言ったんだけど……？」

「申し訳ありません姫様。実は天安は昌秀だったようで……」

「はあ……. よりにもよって正体があんたとはね」

「あのかな……. 一番の被害者なのは俺だぞ。俺としてはここに来る気は無かったのにこいつらが無理矢理連れてきたんだ」

「うるさいわね!! 大体あんたがそんな紛らわしい事してるからいけないんですよ!」

「……. 逆ギレかよ。まったく本当にこんなのがあの織田信長の代わりなんてな……. 本

当に大丈夫か日本……」

昌秀は信奈を見ながら日本の行く末を心配すると、信奈はサルのように唸った。

「本当に何なのよこいつはっ!? この私に対してその態度は何っ!?」

「姫様、少し落ち着いてください。昌秀は今長門を出奔した身との事。昌秀の才は簡単に手放すのは織田の脅威になります。そうなつては零点です」

「分かつてるわよ……」

信奈は深呼吸して心を落ち着かせるとキツと真つ直ぐ昌秀を睨んだ。

昌秀を見る目は本気で殺す気の間であつた。

「昌秀……あんた、私に仕える気はある?」

「……それは本気で言っているのか?」

昌秀は挑発的な視線で少し笑いながら答える。

良晴はそれを心配そうに見つめていた。

信奈は今にも刀に手をかけようとする手を押さえる。

「……仕える気が無いなら私はあんたを殺すわ。あんたを他の所にやつたら織田の脅威になつちやうもの」

「貴様、先程から黙って聞いていればそれは殿を脅しているのかっ!?」

高虎が耐えられずその場を立ち上がろうと膝を立てようとするが、昌秀が睨んでいた

のでグツと黙った。

「・・・そういえば気になっていたけど、その子はあるの何なの？」

「私は藤——」

「これは俺の嫁のお菊だ」

「なっ!!? 殿っ!!?」

高虎が顔を真っ赤にしながら昌秀を凝視する。

良晴もマジかと言う顔をして、長秀もギョッと目を丸くした。

勝家は一人でそうだったのかと納得していた。

「へ、へえ・・・お、お嫁さんなんだあ。ま、まさかあなたにお嫁さんがいるなんて知らなかったわ」

初心なのか信奈は顔を真っ赤にしながら目線を泳がせる。

「そうだ、ちよつと男勝りなのが傷だがな」

昌秀がフツと笑いながら眩くと、良晴は完全に放心状態になっていた。

長秀も何故か動揺している様子で、広間はガヤガヤと騒がしくなる。

「まあ俺としても殺される気は毛頭無いんでね。そうだな、それじゃあ俺に監視役でもつけたらどうだ? それなら安心だろ?」

「・・・そうね、問題は誰を監視役にするかだけけど・・・」

信奈が監視役を任すに足る人物を広間の中から探す。

すると、良晴の隣にいた銀髪の小さい女の子が申し訳なさそうに手を上げた。

「何、あんたがやるの半兵衛?」

どうやらあの小さい女の子が竹中半兵衛らしい。

そういえば以前稲葉山城であつたような気がする。

「い、いえ・・・私は長秀さんにやつてもらつた方がいいと思います。長秀さんならこの人の事を十分に監視出来る筈です」

「流石は半兵衛ね、私も同じことを考えていたわ。万千代、お願いできる?」

「お任せを。出来れば勝家殿も監視役にお願ひします。私一人だと彼らを力づくで止めるのは難しいかと・・・」

「分かつたわ。六、頼んだわよ」

「分かりました姫様! 期待しててくださいいっ!」

勝家が嬉しそうにガッツポーズをとる。

昌秀が心の中で面倒な事になったと毒づいていると、長秀と視線があう。

長秀は昌秀を見るとクスクスと笑っていた。

解散してすぐに昌秀と高虎は天安寺にある荷物と一緒に丹羽屋敷に移送された。

どうやら初日の監視役は長秀のようである。

昌秀は高虎を少し外させて長秀と居間で向かい合うように座った。

「……長秀、何で高虎の事を黙っていた？ それを言えば俺を始末する事も出来ただろうに」

「昌秀、和議の条約を忘れましたか？」

「和議？ 確か俺が尾張に……ってそんな事で見逃したのか？」

「ええ、どの道昌秀が織田に仕官するとは思ってませんでしたから。逆に仕官したら疑ってますよ」

「……お前にとつて俺って何なの？」

「決して気を許してはいけない鬼謀の士ですが何か？」

「さいですか……」

長秀は『俺ってそんなに信用ない？』と落ち込んでいる昌秀を見ながらハアと溜め息を吐くと、襖の穴から覗いている高虎に気付く。

「まったく貴方達は……」

「……長秀、あんまり考えすぎると皺が出来るぞ？」

「乙女にそういう事を言うのは零点です」

「ゲフツ!？」

長秀の拳が昌秀の鳩尾に減り込む。昌秀は今回は氣を失わず腹を抑えて耐えていた。ぶつちやけ、こんなに苦しいのなら氣絶した方がマシだと思う……

「殿っ!! 大丈夫ですかっ!!」

高虎が慌てて入ってきて昌秀を抱えた……と言うより膝枕をした。

長秀は高虎の膝枕でうな垂れている昌秀を見るとより不機嫌になった。

「……とりあえず今日はこの屋敷で大人しくしててください。勝手に出たら……分かつてますね?」

長秀がニコリと笑う。

昌秀はぶるぶると体を震わせ、無言でコクリと頷いた。

「よろしい。それでは私は仕事がありますのでこれにて……」

長秀が去った後、ようやく痛みが引いて昌秀が高虎の膝枕から身を起こした。

高虎が心配そうに声をかける。

「殿、大丈夫ですか?」

「ああ問題ない。まったく長秀め……」

昌秀がいまいました首をぎぎぎと鳴らすと、高虎はホツと胸を撫で下ろした。

「殿、最後の丹羽殿何か様子が変ではありませんでしたか?」

「そうか？ 別に何時もと変わらずニコニコとしてたじやないか」

「私には丹羽殿の笑みが固そうに見えたのですが・・・気のせいですね」

「当たり前だ。長秀がそんな嫉妬している女みたいな笑い方するかよ」

「それもそうですね」

二人は居間でアツハツハツハツ！と笑い出した。

そんな二人の笑いは思いのほか声が大きかったらしく、長秀の書齋にも届いていた。

「全部聞こえていますよ昌秀・・・零点です」

昌秀 長秀の手伝いをする

突然だが女性とは時に山賊よりも恐ろしいものだ。

例えば、真田昌幸の息子である真田信之の妻小松姫は関ヶ原の戦いの際、夫の代わりに沼田城を守っていた時、西軍方である真田昌幸が孫の顔が見たいと言った所、小松姫は戦装束でそれを断ったという。

まあ、何がいいかと言うと女性を女だからと舐めてかかると痛い目に会うと言う事だ。

さて、何故今こういう事を話すのかと言うと・・・つい先日、高虎と昌秀の全ての会話が長秀に丸聞こえだったようで、長秀は当然の如く怒っていた。

顔は笑ってはいるが目が笑っていない。昌秀はその後ろに不動明王が見えたと言う。お陰で昌秀の監視はより強化されつつあった。

屋敷の門の前には長秀の兵が見張っており、屋敷を囲んでいる状況になっていた。

昌秀は思う『どうしてこうなった・・・』と、一人部屋の隅で暗く沈んでいた。

高虎はあれから長秀を見ると、肩をビクツと反応するようになり、長秀が笑うと顔を青ざめさせる始末であった。もちろん昌秀も心境は同じであり、出来る事なら一刻も早

くここを逃げたいと思つていた。

高虎は縁側で澄み切つた空を見ながら悟りを開いているように見えた。

「よほどシヨックだつたんだらうな。まあ、気持ちには分からなくもないが……」

あれは信奈を怒らせるよりマズイのではないかと昌秀は自問自答しながら、蔓丸の手入れをしようと刀に手をかける。

刀身は美しく光つて、切れぬものは何も無いと刀が主張しているようだった。鏢は丸く波をかたどつており、柄に長門家の家紋の三つ蜻蛉が彫られている。柄と鞘は黒漆で塗り固められている。

古いものに違いは無いが、初めて見る人は新品の刀と思うに違いない。

「中々良い刀ですね九十二点♪」

「な、長秀?! ……さん」

何をかしまつて……と急に現れた長秀は目の前に腰を下ろした。

縁側を見ると高虎は姿が見えなかった。どうやら逃げたらしい……

彼女は刀の手入れを見ながら少し沈黙すると、あつ……と思ひ出したといわんばかりに口を開いた。

「そうでした、ここに來たのは昌秀にお願いがあつたのです」

「お願い? お前が?」

昌秀は怪訝な顔をしながら慣れた手つきで手入れを進める。

以外に器用なんですわねと思いつながら長秀は話を続ける。

「実は美濃の国人達が姫様の仕置きに不満を感じて謀反を起こしたのです。まったくこれからと言うときに……二十点です」

昌秀はふうんと興味がないと言わんばかりに手を動かす。

その態度に長秀は少しムツツしながらも感情を押し殺した。

「実はこの謀反の鎮圧を昌秀に手伝って欲しいのですが……」

「断る。大体、俺は織田の家臣じゃないしお前らに一切手を貸すつもりもない」

昌秀は当たり前だと手入れが終わった刀を確認すると鞘にしまった。

確かに昌秀の言い分は最もである。

自分の言い分がおかしい事も承知していた……が、長秀は昌秀の軍略の才能を買っている。

そんな彼に手伝って貰えば絶対に城を取れると確信した上で、こうして無理して頼み込んでいるわけである。

「どうしても駄目ですか……?」

「くどい。これは既に決めている事だ」

長秀は残念そうに肩をすくめると、それでは私一人で行きますと部屋の戸に向かう。

待てよ……一人?と昌秀はピクリと反応した。

「長秀……お前が一人で指揮するの?」

「ええ、一応勝家殿もおりますが指揮するのは私です」

姫様から承りましたのでと髪を指で少し持て余しながら答えた。

長秀が指揮をして長秀が死ぬ。俺も同時に消滅するのでは?

……それは困ると昌秀は長秀の顔を見ながら考える

「な、何ですか……私の顔に何か付いてます?」

「長秀……その話乗った」

「ほ、本当ですか?!」

信じられないと言った表情で長秀は戸にかけようとした手を止めた。

昌秀は頷いてただと手を前に出して長秀を制した。

「金をくれれば手伝ってやらん事もない」

「お金ですか? 昌秀が……?」

長秀は珍しいと昌秀の前に座りなおす。

長秀に言われたのが心外だったのか昌秀は機嫌を悪くしてムスツと固い表情になった。

昌秀だって金が欲しいに決まっている、金をいらんと言う奴は高位の僧か義に厚い人

物くらいだろう。

もしくはよほど阿呆じゃないと言わないはずである。

「ふふふ、分かりました。謀反を鎮圧したら私が姫様に掛け合って見ましょう」

「約束だぞ?」

「ええ♪ 昌秀が手伝ってくれるのならこの謀反、一ヶ月以内に収まるでしょう」

それは大袈裟だと昌秀は丁度長秀の小姓が持つてきてくれた茶を啜りこんだ。

長秀は本当に彼が手伝ってくれるのが嬉しいのか、毎日見ている笑みは何時もとは少し違う気がした。

清洲城の広間では長秀と昌秀が生き生きとしながら、これからの鎮圧戦の話をしていった。

二人の様子はまるで久しぶりに会った旧友が話している様に見える、とても監視対象との会話には見えなかった。

あの二人仲が良いのか?と織田家臣団は噂しはじめ、昌秀を連れてきた日に長秀が嬉しそうに笑っていたという噂が広まり、拳句の果てにはもしや長秀殿は昌秀殿に……と長秀が聞いたなら長刀を持つてきそうな噂まで存在していた。

「それで敵方の兵力は八百程度、瀬名城は山城で難攻不落と来た。それを勝家の馬鹿が二千の兵で力攻めで落とそうとした所、あえなく返り討ちに遭い大損害をこうむつたと……」

腕を組んで昌秀が状況を軽くまとめて長秀に確認する。

概ねその通りですと長秀は扇で口元を隠した。

馬鹿つて言うな！と後ろに引つ込んでいた勝家は少し涙目になりながら昌秀に反論する。

「だってその通りじゃないか。こんな城に力攻めでいったら大損害を被るのは当然だろう？」

「そうですよ勝家殿。先の失敗で勝家殿が腹を切ろうとしたのを皆で全力で止めたのは大変だったのですよ？」

ハアと当時の事を思い出して忘れようと首を振る長秀。

だが……と昌秀は顎に手を当てた。

「それでも勝家の率いる二千の部隊に大打撃を与えて撤退させた、この瀬名城の城主は相当やるな」

敵方の腕に感心した昌秀はずっと座っているのが疲れたのか横になって手足を伸ばした。

だらしないですよ昌秀、四十点と長秀が扇を閉じながら忠告する。

「こうずつと座りつばなしだともうもなあ。さて、俺らの兵力は？」

「姫様から二千の兵を借り受けました。兵力は二倍です、ね八十三点」

「二千？ あつはつはつはつ!!」

昌秀は数を聞くと腹を抑えて笑い出した。

「な、何が可笑しいのです昌秀？」

「まったく織田の姫様も俺を馬鹿にしていると見える。その兵力は俺が軍儀に参加しているのを踏まえての兵力だろ？」

「ええ・・・そうですが」

「二千もいらん。百あれば充分だ」

昌秀の言葉に長秀は目を丸くした。

一番驚いたのは勝家である。自分が二千の兵で落とせなかつた瀬名城をたつた百の兵で落とすと言うのだから。

「昌秀・・・信頼してないわけではないですが百の兵で瀬名城を落とすのは無理です。二十点」

「そうだつ！ 私が二千の兵で落とせなかつた城なんだぞつ!?!」

「もう一つだけ言ってやろう。あの城は一週間で落ちるとな」

横になりながら昌秀が意地悪そうにくくくと笑う。

「……これは良からぬ事を考えている顔ですねと長秀は昌秀の顔を見ながら直感する。
「う、嘘だっ!!」　そ、そんな事出来るわけないだろうっ!!?　あ、あたしは信じないから
なっ!」

「そうか。それじゃあ、一週間以内に城を落とせなかつたら俺の首をやる。正し、城を一週間以内に落とせたら勝家、一日俺の言う事何でも聞けよ?」

な、何でもって……と勝家は顔をさくらんぼの様に赤らませながら胸を隠した。

「お、お前もサルと一緒にするのかっ!!?　わ、私の胸を……」

「阿呆、あいつと一緒にするなっ!　安心しろ、そんな変な事は言わないから」

「ほ、本当だな?　や、約束だぞ……?」

ああ約束だ……と昌秀は握手を求める。勝家も最初は動揺していたが、ちゃんと握り返した。

そこでコホンと長秀が咳き込む。

「昌秀……信じてよいのですね?」

「当たり前だ。信用してくれていい……」

「よろしい♪　昌秀を呼んで正解でしたね七十点」

言葉のわりに点数が低いのは昌秀の無茶振りを指摘しての事であろうか、長秀はいっ

もの涼しげな表情を険しくする。

「そんな顔をするな長秀。なあに、勝家との約束のお陰で俄然やる気出てきた所だしな」心配するなど昌秀は笑いながら右拳を握り締めて長秀の前に突き出した。

長秀はクスツと手を口に当てて笑う。

ああ、本当の昌秀はこういう人なのだ・・・長秀は長門家にいた時の昌秀と、今日の前にいる昌秀を比べる。今までの彼は研ぎ澄まされた一本の刀の様な雰囲気だったが、現在の彼はもつと大らかで例えるなら同じ刀でも練習用の木刀を思わせた。

良晴殿の言ったとおりなのでしょうと長秀は心の中で安堵した。

以前の昌秀は何処か危なっかしい所があつてハラハラしたが、現在の昌秀は勝家殿と笑いながら会話している。そんな彼を見ながら長秀は微笑んだ。しかし、長秀は不思議に思った。

はて、何故私はこんなにも昌秀に執着するのだろうか・・・と。

長秀はしばらく扇で扇ぎながら悩んだ末、まさか・・・と一つの考えが頭に浮かんだ。しかし長秀はそれをブンブンと頭を振って否定する。

「そんな筈不是吗・・・まったく、私らしくありません。十点です」

長秀はそう言うのとフツと軽く笑って扇いでいた扇をパチンと閉じた。

昌秀 瀬名城を攻略する

昌秀は百人の兵で瀬名城を攻略すると言った日から三日たつても屋敷を動かず、高虎と囲碁の練習をしていた。子供のように無邪気に遊んでいる昌秀を見ながら高虎は焦っていた。

「殿・・・すでに三日目です。なのに何故動かないのですか？」

「うくん、ここに置けば・・・駄目だな、ここに置かれて囲まれる」

「殿・・・」

碁石を何処に置くかで悩んでいる昌秀は本当に何も考えてはいないのではないか。高虎は外の景色を見ながら思った。時刻は昼時、どんよりとした空は今に雨が降るといふ事を予兆していた。

昌秀はよしと言いながら碁石を碁盤に置くと、どんよりとした空を見て少し笑っていた。

「殿・・・？」

「囲碁つてのは面白いな高虎。まるで戦の陣取りをしている気分だ。だが、本当の戦はこんな囲碁みたいには上手くないかもしれないもんなだよな」

その時突風が盤の上にある高虎の碁石を動かして別の場所に移動した。

「どんなに大軍でも些細な事で統率が乱れる事もあれば、逆に寡勢でも兵の士気や将の質で何倍もの活躍をする……か」

この時代に昌秀は突風でずれた碁石を見ながら重秀に教えられた事を復唱した。

来た時は戦をする時緊張しまくっていたが、今は命が懸かっているのに異様に落ち着いている。慣れとは怖いなど昌秀はずれた碁石を戻しながら思った。

二人が囲碁をやめてからしばらく経つと庭に兵が一人密書を携えて戻ってきた。

昌秀はそれを受け取って早速読み始めると声を出さずに深く頷いた。

「高虎、戦支度をしろ。お前も他の兵に伝えろ。出陣するとな」

「はっ！」

瀬名城は稲葉山城より東に三キロばかりの場所にあつた。

稲葉山城には劣るが山城で、普通に攻めるには相当の犠牲が覚悟された。

高虎は馬上で揺れながら昌秀に尋ねる。

「殿、先程の文には何が……？」

「敵方は勝家に勝ったからか、すっかり宴会騒ぎだそうだ。まあ、そうなるように仕向けたのは俺だけだな」

「?」

「城に行つた帰りにすぐにそこら辺の遊女を雇つて瀬名城に部下と一緒に旅芸人として送り込んだのさ。今晩は俺らにとつても祭りになるだろうよ」

普段の温厚な表情から策士の顔になつている昌秀を見ると、高虎はゾクツと背筋に悪寒が走つた。

自分が好んで仕官した主君とはいえ、謀略を使つている昌秀を高虎はあまり好きではなかつた。

謀略は乱世において致し方の無い事と高虎は割り切つてゐるつもりではいるが、あまり謀略を良しとしてゐない。

齊藤道三の事もある。彼も自身の息子に命を取られかけたのだ。昌秀も例外ではない。

高虎は昌秀が道三のように危険な状態にならない事を祈りながら瀬名城へと向かつた。

瀬名城に近づいたのは真夜中で城は真つ暗な海のように静まつている。遠くに焚か

れている篝火は螢の光のようだ。高虎は思った。

風は木々を揺らして、空は月も星も見えず今にも降ってきそうな空である。

昌秀達がさらに近づくと、上から敵方の兵が首から血を流しながら落ちてきた。

そして城の門がゆっくりと開かれ部下がお待ちしておりましたと頭を下げる。

「いいか。油断してても敵は八百、一気に攻め落とすぞ」

昌秀の言葉に、最初こそ頼りにならない大將だみやあと話をしていた足輕達も活気があふれた。

「よし、抵抗する者は殺せ。降伏する者は捕らえろ。行くぞ!!」

昌秀が蔓丸を抜いて合図を出す。

合図を見て百の兵が瀬名城になだれ込んだ。寝込みを襲われた敵方の兵は織田の兵が来ると思わなかったのか大混乱に陥った。

「お、織田の夜襲だ!! 逃げろっ!」

大概の兵は逃げ、立ち向かう剛の者も囲まれ討ち取られる。

雑兵を部下に任せて高虎と昌秀は広間へと向かった。

広間に向かう途中の敵は高虎が簡単に斬り伏せ、昌秀は抜いている蔓丸を持って余しなから足を進める。

広間に着くと一人のがっしりとした体格の男が、悲しそうな表情をしながら外の様子

を見ていた。

「おい、お前がここの城主か？」

「・・・貴様は誰だ？ 織田の者ではないな？」

「俺は長門昌秀。ある事情でお前らを黙らせなきゃならなくてな。死ぬか降伏か選べ」

「長門昌秀だと・・・？ 長門家の謀神が長門を出奔したのは聞いていたが、何故織田に？」

「・・・早く答えてもらおう」

「残念だが、降伏するつもりはない。いざ・・・」

城主は腰の刀を抜いて、上段から昌秀に向かって振り下ろした。

何合か経つと酔っている城主は早くも息を荒げ始める。

「どうした？ もう終わりか？」

「おのれ・・・酔ってさえないなければお主なんぞ一太刀で終わらせられるものを」

・・・そうかいと昌秀はフツと笑いながら蔓丸を下段で構える。

「・・・お主は正々堂々と言う精神は持ち合わせておらぬのか？」

「正々堂々？ お前、それでも乱世を生きる武士か？ 騙してなんぼのこの時代、騙される方が悪い。歴史つてのは勝者が作つてくもんだ。敗者の歴史なんてのはな、負けた時点で既に終わってるんだよ。これは持論だが・・・誇りを掲げて全滅するのは美しいか

もしれんが愚かだ。だったら、誇りを捨ててでもどんなに汚い手を使おうが勝つ方がいいに決まっている」

「貴様……それでも武士か!!」

城主が昌秀の侮辱の数々に血を昇らせ昌秀に斬りかかろうとした瞬間、ごぶつと吐血して膝をついた。その光景に高虎は目を見開いた。

城主も何かなんだか分からない表情をしている。その中で笑っているのは昌秀一人だった。

「がっは……何だ?」

「毒に決まってんだろ。遊女達に毒を持たせておいて良かった。いやあ、あんたが降伏と言ったらどうしようかと思っていたが、安心したよ」

「初めからそのつもりだったか……」

「こうでもせんと、あんた達がまた謀反を起こすかもしれないからな」

保険は多い方がいいと昌秀は歩き出し城主の隣に着くと、首を取るため刀を上段に構えた。

「旅芸人達を城の中に入れた時点で我等の負けは決まっていたとはな……」

「その通り。だが、毒が回るのが予想より遅かったな。あんたが丈夫なのか、それとも遊女達が盛るのが遅かったのか。まあ、どちらでもいいか……」

「……最後に言っておく。貴様、地獄に落ちるぞ?」

「……」

昌秀は無言で蔓丸を振り下ろす、城主の首は宙を飛んで高虎の前に落ちた。

高虎は顔を青ざめさせながら、反射的に城主の首から目線を外す。

昌秀は返り血で服と頬が赤く染まっただけで、刀は血がしたたっていた。

「高虎、お前は下に行つて部下を休ませてやつてくれ。少し独りになりたいんだ」

「……分かりました」

高虎は味方の兵を休ませ、昌秀に報告しようと昌秀を探すが見つからない。

殿は大丈夫だろうか……と高虎は腕を組みながら歩いていた。

殿は間違つた方向に進もうとしている様な気がする、ならばそれを止めるのが家臣の務めなのではないかと高虎は考えた。

「そうです、且元がない今私が殿を諫めなければ」

よし!!と高虎が気合を入れなおすと、不意に誰かに肩を叩かれた。

気合を入れなおした高虎の鉄拳が曲者!と言う掛け声と同時に後ろの人物の腹に命中する。

後ろの人物は「ふう!?!」と言う声と共に後ろに吹き飛んだ。

「まったく誰・・・って殿!?!」

「な、ナイスパンチ・・・世界狙えると思うぞ?」

「殿! しっかりしてください!!」

「ああ・・・お花畑が見える。高虎、俺あそこに行つていいかなあ?」

「と、殿お!?! お気を確かにいいいい!!」

「ぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐん!!?」

高虎の往復ビンタが昌秀に炸裂、革のベルトを叩き付けたような音が城の中に響いた。

その音は眠っていた城兵達が全員起きるほどだったと言う。

昌秀と良晴

城の広間は何時もの活き活きとした朝議ではなく、鬱々とした空気になっていた。

それもそうだろう、朝っぱらから生首の入った木箱を持ってこられたら誰でも気分を害する。

しかしこの女武將達の反応はどうかと昌秀は思う。

謀反人の首を持ってきたのだから、普通の反応なら喜んでいそうなものだ……

「何かご不満でも？ 謀反人の首を持ってきたんだ。喜んでくれてもいいのに」

「あんなねえ……朝早くから生首を見て気分が良くなる人がいると思う？」

「目の上のたんこぶが取れたんだから嬉しさのあまり踊る所だと思うが？」

はあ……と信奈は頭を抱えながら溜め息を吐く。

昌秀は約束どおりの報酬を手にとって感謝の意を告げると、長居は無用とばかりに広間を後にした。

「……分かってはいたけど、あんまり気持ちの良い勝利とは言えないな」

帰る途中に緩やかに流れる川で、先程貰った金子を眺めながら昌秀は呟いた。

すると、昌秀の後ろに石段を下りてきた見慣れた人物が一人息を切らして膝に手を当てている。

「良晴か……」

「昌秀、何で殺したんだよっ!? 二千の兵で包囲していれば犠牲が出さずに勝てたんだぞっ!」

「犠牲を出さずに……か」

ふつと笑いながら川辺で丁度良い石を拾って、川に向かって投げる。

投げた石は水面を四、五回跳ねると水面にポチャリと落ちた。

沈んでいった石を見ていた昌秀はギロリと良晴に視線を移した。

「良晴、お前も分かっているとは思わが……戦つてのは犠牲はつきものだ。犠牲を出さない戦なんてこの世にありやしない。お前といい、あの馬鹿姫さんといい……お前らは甘すぎる」

「昌秀、何かあったのか……? お前はそんな奴じやなかった筈だ!」

「質問を質問で返して悪いが……お前は元の時代に帰る気はあるのか? 帰る方法を探そうとしたのか?」

「それは……ただだけど……」

「まだ? はっ! お前を心配して探していたら、戦国時代に来ていて再会したと思え

ば、いなくなつた本人は戦国ライフを満喫していると来た！……笑わせないでくれ」

「昌秀……？ 何怒つてんだよ？」

「お前、自分がした事分かつているのか？ 今川義元を殺さず、斉藤道三を助け、織田信勝の謀反もお前の助言で信奈は許したらしいじゃないか。そんな事をすれば歴史が変わるぞ？ そうすりや、俺らの持つている知識はいずれ役に立たなくなる。分かるか？」

「だけど……義元ちゃんが殺されそうだったんだぞ？ 普通助けるだろっ!!」

「俺は義元に会つた事が無いから分からんが……どんなに美人でもそいつは桶狭間で死ぬ筈の今川義元だ。知つてるか？ 足利義輝と足利義昭が三好三人衆と松永久秀によつて、暗殺されかけて明国に逃げた事を」

「えっ!! 確か義輝の方は暗殺されるんじや……」

「お前が今川義元を殺していたらそうだったのかもな」

黙り込む良晴に昌秀はハアと溜め息を吐きながら近づく。

そして良晴の頬を思い切り殴ると、良晴は二メートル程吹っ飛んだ。

「痛つてえ!! 何すんだよっ！ 昌秀っ！」

「……こうなつてしまった以上、もうやるしかないだろ？ 帰る気がないなら、お前なりに筋を通してみるよ。お前が頑張っている間に、俺なりに元の時代に帰る方法を調べて

みるから」

「昌秀……」

昌秀は少し悲しそうな表情をして、また手頃な石を見つけるとおつと言いながら手にとった。

良晴は殴られた頬を押さえながら、ポカンとした表情で昌秀を見る。

「懐かしいな良晴、昔はこうやって水切りしながら遊んでたっけ……」

「もしかして昌秀……何か理由があつて殺したのか？」

良晴の問いに昌秀は何も答えなかつた。

これでもかと言わんばかりに昌秀は手頃な石を見つけては投げていた。

手頃な石が見当たらなくなると、昌秀はその場に爺さんのようによつこらせと腰を下ろした。

「……あのまま、あいつを許しておけば必ずまた謀反を起こすだろう。しかも、今度は同じ境遇の者を誘つてより強大な勢力になつてからな。その時、誰かがあいつを……いや、もっと大勢の人々を殺さなければならぬ。そろそろ、織田家が上洛の軍を起こす頃だ……上洛の途中、謀反を起こされたらどうする？」

「それで……殺したのか？」

「そうだ。あいつらは武将である前に女性だ、首を取る方法を知つてもやつぱり抵

抗があるんだろう。彼女達の反応を見ていれば分かる」

昌秀は川の流れる音を目を瞑って聞いていた。

そこまで考えてと良晴は頬を押さえながら立ち上がった。昌秀の隣に腰を下ろした。

「……なあ、人を斬るってどんな感触なんだ？」

「……聞かない方が幸せだぞ。まあ、昼飯が食べられなくなってもいいなら話すか？」

「……やっぱやめとく。それより、何でその事を信奈達に言わなかったんだ？ それを言えば信奈も納得するのに……」

昌秀はゆつくりと瞼を開けると、笑いながら良晴に顔を向けた。

「良晴、これは持論だけだな……この時代、誰かが汚れ役をやらないと上手くいかないと思うんだよ。それに、あいつ等は虐殺を良しとしないだろう……只でさえ、信長……じゃなかった信奈の考えは周囲に敵を生む。そんな時、どうやって敵を黙らせるんだ？」

「それは話し合いで何とかなるんじゃないか？」

「無理だ。そんな事をしていたら、爺になっても天下は取れん。取りたかったら、魔王になるしかない……」

「だけど魔王になったら信奈は……」

「お前……もしかしてあの女に惚れてんのか？」

なつと良晴は顔を赤くして首を必死に横に振った。

マジかよと昌秀も冗談のつもりだったが予想外の反応に目を丸くさせた。

「やめとけ……相手が悪すぎる。他の女を見つけるんだな」

昌秀が無愛想に言うのと、良晴はだけど……と諦められないのか昌秀に助けを求めるような視線を送る。昌秀はその視線を完全に無視する。

良晴は残念そうな顔を見ると、突然思い出したと手をポンと叩いた。

「あつそうだ。俺、信奈に呼ばれてるんだつた。じゃあな昌秀、また明日」

「ああ、また明日」

良晴が走っていくのを見ながら、こうしてまた明日と言える日がいつまで続くのだろうと昌秀は思いながら再び川を眺めた。

川は戦国も現代も変わらずにゆっくりと流れている。

人の命も同じなのかもしれないと昌秀は眺めながら思う。

例え今生きながらえても結局は死ぬのだ……それに何の意味があるのだろうか。

死ぬ筈だった人間が未来の人物から助けられて生き長らえる、それは俺達のエゴなのではないか？

「……やめよう。さあて、せっかく金子を貰ったし今日はパくつといこうかな」

一応長秀の屋敷でお世話になってるんだしなと昌秀は腰を上げて、陽気な足取りで長秀の屋敷へと向かった。

昌秀が行ったのを確認すると、木の陰から二つの影が現れた。藤堂高虎と丹羽長秀である。

高虎は昌秀の事を心配してついて来た所、丁度昌秀を発見して様子を見ていた。

長秀は昌秀を叱ろうと追っていた時、昌秀と良晴が話しているのを見つけて高虎と同じ場所の様子を伺っていた。

高虎は滝のように涙を流しながら、一度でも主君を疑った事を恥じていた。

長秀も先程までの昌秀に対する感情が恥ずかしくて扇で顔を隠している。

「殿……最初からそう言ってくれば良かったのに、疑った私がうつけでした！　うわああん！」

「高虎殿、そんなに泣かないでください。私達以外は皆、昌秀の事を危険視しているのですから、あなたが昌秀を支えてあげないと……」

「でも……他の人はこの事を知らずに殿を軽蔑しているかもしれないですよっ!? 私、我慢なりませんっ！　ちよつと城に乗り込んで皆に訴えてきます!!」

高虎が城に向かおうとするのを、長秀が慌てて押さえた。

「待ちなさい！　昌秀が自分の意思で汚名を被っているのです。先程の事を伝えれば成る程、昌秀の汚名は挽回されるでしょう。しかし、昌秀の思いを踏みにじる事になるの

ですよっ!?!」

「しかし……殿は織田家の事を思つてやったのに、その織田家から邪険にされるなんてそんな理不尽な事がありますかっ!?!」

「それが昌秀の選んだ道です。昌秀もこうなる事を分かつてやっているのです。貴方も昌秀の家臣なら察してあげなさい」

「……………分かりました」

高虎はギリと歯噛みすると、急いで昌秀の後を追つた。

ポツンと取り残された川辺で、長秀は良かった……と安堵して胸に手を当てた。

「……………昌秀、皆が貴方を邪険にしようとするかと私は分かつてますから……………」

今日位、優しくしてもいいかもしれないねとクスツと笑うと、長秀はゆっくりとした足取りで昌秀達を追つた。

織田家 上洛の軍を起こす

昌秀が信奈から恩賞を貰ってから数日後、信奈達織田家は上洛の軍を起こした。

織田家が上洛の軍を起こした事は各国に伝わった。もちろん、美濃に近い長津の地にもその一報は届いた。

「馬鹿なっ！ 織田如きが上洛の軍を起こすだどっ!？」

「兄上、落ち着きなされ。今の織田家は破竹の勢いです。今は織田に好きにさせるのがいいでしょう。織田が上洛を目指している間に、新しく得た領地を治めねば……」

「永重様、今こそ織田の連中に長門の勇猛さをしらしめてやりましょう!!」

「うむ、宮部の言うとおりに。織田の連中に、長門の戦を見せてやる」

「なりません、兄上!! 戦をすれば、民が疲弊します。さすれば、兄上に対する民の目はどうなると思いかっ!？」

「義重、お主は昔から戦はなるべく回避するように父上に言っておったな。じゃが、今の長門の当主はわしじゃ! 戦が怖いのなら城を守っておれ!」

「あ、兄上……」

永重が広間から出ると、宮部も後に続いて永重の後を追っていった。

シンとなった広間に残された義重は、ハアと溜め息を吐いた。

（昌秀がいなくなつてからというもの、宮部殿が兄上に側近の如くつき従っている。兄上も宮部殿の意見はすぐに聞き入れている。これでは他の家臣から謀反が起きるかもしれないぬ……）

「昌秀に我らで長津を守ると言つてしまつた以上、昌秀に頼る事は出来んな」

俺がやらねば……とブツブツと呟きながら立ち上がつて、義重が広間を立ち去ろうと襖に手をかけると襖に人影が映つていた。

「誰だ……？」

「よ、義重様……お役目ご苦労様です」

「且元ではないか。一体どうしたのだ？ お主は霧生にいたのではなかつたか？」

「そ、それが……最近、霧生で妙な噂を耳にするのです」

「噂じゃと？ 言つてみよ」

且元の話では、永重達の関係が噂になっており、宮部継潤に恨みを持つている家臣達が謀反を企てるのではないかと村人達が恐れていたと言ふのだ。

「……もうそこまで噂が広まっているのか」

「はい。今日私が来たのは先日の織田の上洛軍の件なのですが……」

「兄上は織田と戦をするつもりでいる。私も止めたのだが、宮部に邪魔されてな……」

「宮部殿に……？　こんな時、昌秀様がいてくれれば……」

「よせ、昌秀に頼つてはならぬ。あ奴は自分の帰る方法を探しに行つたのだ。それを邪魔してはならぬ」

「しかし……事は既に大きくなりすぎています。織田軍はすぐにでもやってきますよ？」

「分かつている。私がこの命に代えても止めてみせる」

窓から見える夕暮れを見ながら義重は笑うと、永重を追つてその場を後にした。

(このままでは長門が二分してしまふ。やはり昌秀様に相談に行かねば……)

且元はそう確信すると、猛ダツシユで厩に向かい馬を走らせ霧生に向かつた。

霧生城に帰還して、昌秀が抱えていた諜報部隊に昌秀の居所を尋ねると今は尾張にいらるとの事だつた。且元は場所を聞き出すと、すぐに準備して尾張へと急いだ。

時刻は夜、今夜も長秀は残つていた政務を片付けるため、部屋で残業中である。

毎晩毎晩、ご苦勞様ですと昌秀は心の中で呟きながら、自分の部屋へと入つた。

外からは蛙の鳴き声が響いている。一匹、また一匹とその音は段々と増していつて、最早騒音のレベルになるのではないかと昌秀は思う。

「……ああもう、全然帰る為の手がかりねえな」

「尾張には情報は無かったようですね。次は何処に向かいます？ やはり京に向かつてみますか？」

「京つて荒れてんだろ？ そんな危なっかしい所に行つてたまるか。出雲はどうだ？」

「何故、急に出雲が出てくるのですか？」

「……気分だ」

且元が息を切らしながら向かっている時、昌秀は高虎と次は何処に行くか議論していた。

「大体、出雲に行くための路銀が足りませんよ殿」

「マジでか。そういえば、前にもらった金子はこの前の宴会で使つちまつたんだっけ」

「……それより殿。織田家が上洛の軍を起こしたらいいですね」

高虎が無理矢理話題を変えると、昌秀は読んでいた書物を閉じて横になると大して興味のないように言った。

「ああ、聞いてるよ。まあ、永重も快く奴らを通すとは思うんだけどな」

「本当にそうでしょうか？」

高虎は首を傾げると、立ち上がって昌秀の横に座った。

「永重様は義重様と違い、少し頭が固いのが難点です。もし、家臣達に煽られれば戦と言ふことになりかねないかと……」

「考えすぎだ高虎。流石に永重もそこまで阿呆じゃないだろう」

昌秀が笑いながら横に置いていた書物を手にとって再び読もうとすると、手にとつていた筈の書物が消えていた。

あれ……と昌秀が手を動かすが書物は無い。

「おい高虎、ふざけていないで俺の本返し——」

昌秀が起き上がって、高虎の方を見ると高虎は先程と同じように礼儀正しく座つてい

た。その隣には腰まである黒髪を乱しながら、且元が昌秀の書物を手にしながら座つてい

た。昌秀は久しぶりにあつた且元の胸を見ると、フツと笑つた。

「少しは成長してると思ったが、今だ絶壁とはな……」

「……久しぶりに会つたのにその台詞ですか」

且元は手をゴキゴキと鳴らすと、昌秀の頭を得意のアイアンクローで掴みあげた。

「いででででででで?!」

「悪かつたですねえ……絶壁で。とりあえず、出雲に行く前に冥土に行つてみますか?」

「悪かつた! 俺が悪かつたから、とりあえず手を放してくれ!!」

「それでは謝罪の言葉を……これでも私も女ですからね。結構傷つくんですよ?」

「わ、分かったつ！俺が悪かったゴメンナサイ……」

よろしいと且元が手を放すと、昌秀は頭を抑えながらその場にかがみ込んだ。

そんな中、長秀が眠たそうな目を擦りながら襖を開けた。

「昌秀、騒がしいですよ。こんな夜中に……あら、そちらの方は？」

「な、長秀殿っ!?! 昌秀様、何故長秀様の屋敷でお世話になつて居るのですかっ!?!」

「いや、これには事情が……」

「やはり昌秀様は、長秀殿と……」

「だから事情があるつて言つてんだろうがっ！ちゃんと話を聞けよ！」

よく状況が読み込めていない長秀に、高虎が申し訳無きそうに状況を説明する。

二人がギャアギャアと騒いでいるのを見ながら、長秀達はハアと深い溜め息を吐いた。

宮部 百叩きの刑

「そうか……永重は織田に徹底抗戦の意を示したか」

昌秀が残念そうに肩をおとす。

「殿、このままでは織田と長門で血みどろの戦が始まってしまいます」

「そうなれば得をするのは、近江の浅井の連中です。頃合を見て再び兵を送ってくるでしょう」

昌秀は高虎の意見ならともかく、且元の意見に目を丸くした。

以前はそこまで視野が広くなかった筈である。

「且元……成長したな」

昌秀は且元の成長振りに思わず微笑むと、且元は少し顔を赤く染めた。

しかし、且元はブンブンと首を横に振るとすぐに何時もどおりの真面目な表情に戻る。

「もう……今はそういうのはいらなそうです昌秀様。それより、打開策を考えないと」

「現状は最悪と言ってよろしいかと思われませう。殿」

「確かに……永重はすっかり宮部の意見を聞いちゃまって、義重の言葉にも耳を貸さな

いようだしな。しかも、他の重臣達からも多数の不満があるようだ」

昌秀は苦笑しながら且元が持ってきた重臣達の不満を述べる書簡の数々を手にとる。

「宮部殿が口を出さなければ、永重様も考えてくれると思うのですが……」

且元の言葉に昌秀はふむ……と顎をなでた。

「それなら、宮部の信用を落とせばいい」

「宮部殿に謀略を仕掛けると？」

「謀略……とはちよつと違うな。実際は宮部が自分で破滅するだけだからな」

「自分で……ですか？」

「そう……自分でだ」

昌秀はそう言うのと不適に笑って、文机に座って何かを書き始めた。

長門家が織田家に宣戦布告をしてから数日後、宮部の屋敷に不審な格好をした者が尋ねてきて一通の書状を渡した。

宮部がそれを手にとると、内容はこうである。

『俺は、お前が先の戦で乱捕りの際に奪った家財を溜めている事を知っている』

宮部はその文面を見た瞬間、顔を青ざめさせた。

長門家では、乱捕りをした者は切腹よりも辛い刑に処すと重秀が決めた軍法に書いて

ある。

もしこれがばれたら、自分はどうなるか分からない……

宮部は坊主頭に冷や汗をかきながら、すぐに部下に奪ってきた家財を別の場所に移すように命じた。

「何故、わしが乱捕りを行った事を知っているのだ？ あの時、誰にも知られていなかった筈だが……」

宮部が腕を組んで頭を傾げると、急に戸が破られて先程の部下が縛られて投げ込まれた。

宮部は目を丸くしながら、呆然とその場に突っ立っていた。

「なっ!？」

「とうとう尻尾を出したなっ!! 宮部継潤っ!」

「よ、義重様っ!?! 一体何事ですか?」

「あくまでも白を切るつもりか。お前が先の戦で乱捕りを行い、近江の民に迷惑をかけたのは分かっているのだぞっ!?!」

義重はそう言うのと部下から手渡された茶器を宮部に向かって投げつけた。

慌てて宮部はそれをダイビングしながら受け止める。

「な、何をするのですかっ!?!」

「おい、その茶器は誰の者だ？」

「こ、これは私が買い付けた物です。どうです？ 中々の物でしょう？」

宮部は自慢げに義重にそれを見せると、義重は鼻で笑ってそれを掴んで叩き割った。

「な、何と言う事をつ!？」

「お前が狙ったのは只の百姓だけではあるまい。恐らく、近くの豪商や小さな豪族から奪い取った物だろう？」

「……」

「ふん、凶星か。兄上、これが宮部の正体です。こんな奴の言う通りになつてはなりません」

義重が振り返ると、無言で立っている永重がいた。

少し経つと永重は静かに言った。

「宮部継潤、お主を百叩きの刑に処す。その後、首を刎ねる。……ワシが直々にな」と、殿っ！ 某は——」

永重は継潤の言葉を相手にせず、すぐに城へと戻つていった。

恐らく、家臣達を全員呼んで再び会議をするのだろう。

「年貢の納め時だな。覚悟しておけ」

「一つだけ聞いておきたい。何故、ワシが乱捕りをした事を？」

「且元が昌秀に助けを求めにいったらしくてな。まったく余計な事をしてくれた。しかし、そのお陰でお前の悪事を暴く事が出来ただけでも良しとしよう」

義重はうんうんと頷く。

宮部はそれを見ながら、重秀様の目に狂いは無かったか……鳶が鷹を生むとは言うが、これでは鷹が竜を生んだのかもしれないな、と割れている茶器を拾い始めた。

「そうか、無事に長津は平穏を取り戻したか」

「はい、宮部殿は百叩きの刑を受けた後、斬首されそうになりましたが義重殿が仲裁に入って、持っていた家財を全て元の人物に返す事で決着したそうです」

「ほお、義重が宮部を庇ったのは驚きだな。てつきり見殺しにするかと思っていたが……」

昌秀の言葉を聞きながら、高虎は慣れた手つきで掃除を始めた。

高虎の町娘姿も見慣れてきて、最近の主婦が板についてきた所である。

「且元も霧生城に戻ってしまいましたしね」

「そうだなあ。ま、政務が急がしいんだろ？」

「且元……頑張ってください」

「え？ 何でそこで且元を激励するんだ？ おい、無視か？ おい高虎っ！」

高虎は手にしていた箒を壁に立てかけ、遠くを見ながら且元が熱でうなされながら仕事をしている且元を想像すると胸が痛くなってきた。

昌秀 姫巫女様と出会う

「まったく、何で俺までこんな所に……」

「こちら昌秀っ！ 文句を言わないでさっさと働きなさいっ！」

「……ちっ」

「あっ!? 今舌打ちしたわねっ!? 万千代っ！ やっぱりあいつ打ち首にしましよ！」

「姫様、落ち着いてください。今の昌秀は織田家の客将という扱いなので、殺してしまつては織田の悪い風評が出てしまいます。そうなつては十五点です」

「……分かつたわよ。昌秀っ！ あんた万千代に感謝しなさいよねっ！」

「……はあ」

昌秀の介入もあり、織田軍は無事に長津の国を通り抜ける事が出来た。

近江の浅井家も織田と同盟を組んでおり織田の通行を認めた。

現在織田軍は南近江を支配する大名、六角家と戦を開始。

昌秀は長秀に無理矢理客将として従軍させられていた。

昌秀は客将でありながら六角家を打倒する策を練るように命令された。

とは言つても、それをハイソウデスカと受ける昌秀ではなく、悩んでいるフリをして

サボっている昌秀であったが、それを見た信奈がカンカンに怒り現在に至るわけである。

「昌秀、少しだけでいいので知恵を貸してくれませんか？」

長秀の笑顔に少し眉を動かす昌秀。

「……六角家は兵力を分散させている。恐らく奴らは俺らを一つの城に集中させて、攻撃する腹積もりなんだろう」

「打開策は？」

長秀はうんうんと頷きながら続きを促す。

長秀の続きを促す仕草にぼつが悪そうな顔をする昌秀。

「……幸い織田の家中には優秀な将がたくさんいる。それぞれに兵を分散し、敵の支城を多方面から攻め立てる。それが一番だろう」

「流石は昌秀です。八十八点」

「そうね、それが一番ね」

翌日、信奈は軍勢を再編成しそれぞれの将に支城を攻略に当たさせた。

信奈、長秀、昌秀の軍勢は堅城として知られる箕作城を昌秀の奇策により攻略。

箕作城が落城すると、恐れをなした和田山城の城兵たちは逃げ出して和田山城も同日

に落城した。

六角義治は織田軍の快進撃に怯えて、戦いもせずに甲賀へと落ち延びていった。ここに織田家の上洛が完成したのである。

「……なぐんで俺がおつかいしなきゃならんだ」

「仕方ありませんよ。今の我々は長秀殿に逆らえないのですから……」

織田家の上洛してから数日後、やることのない昌秀が部屋でゴロゴロしていると長秀が

『昌秀、ゴロゴロしているのなら京の町でも見てきたらどうですか？ 皆、京を立て直すために大忙しなのに一人だけ寝ているの言うのは如何なものかと』

と嫌味を言ってきたので、『じゃあ、何か仕事でもよこせよ』と冗談まじりに昌秀が返すと長秀は懐から小さな紙を渡して、とりあえず今夜の食材を買ってきてください、とお金と袋を渡すと部屋から追い出されてしまったのである。

「殿、ニ覧を」

高虎が指差す方向には、巫女装束を着ている女の子が木の上を見上げていた。

「どうかしたの？」

高虎が女性らしく優しい声で尋ねると、女の子は木の上を指差した。

そこには白い凧が引つかかっている。恐らく、飛ばしている最中に引つかかってしまったのだろう。

「そっか、ちよつと待っててね」

女の子は無言で頷く。

「殿、取ってあげましょう」

「そうだな。どれ……」

昌秀が高虎を肩車をしようとしやがむと高虎は中々上に乗らなかつた。

「高虎、早くしろ」

「と、殿……私、上はちよつと……」

「?? 何でだ？」

ワケがわからん、と首を傾げる昌秀。

「と、とにかく……私が下になりましょう」

「え、でもお前……俺の事持てんのか？」

「試せば分かります——」

「「……………」」

全然平気でした。むしろこっちの方がしっくりくるくらいです。

肩車とは思えぬ軽快な動きで、スムーズに凧をゲットする昌秀達。

「ほら、今度は引つ掛けんなよ？」

「……」

女の子が凧に手を伸ばそうとした瞬間、女の子と昌秀の手が触れた。

すると女の子の手が触れた瞬間、目を瞬かせ何かに驚くようにパツと手を放した。

「わ、悪い。ビックリしちゃったか？」

女の子は無言のままだったが、昌秀には何となくだが否定の意を示しているように感じられた。

女の子は凧を手にとると、昌秀達にお辞儀して何処かに行ってしまった。

途中、足を止めて俺の事をジツと見ていたが気にしない事にした。

「不思議な女の子でしたね」

「そうだな。それにしても、京はかなり廃れているようだな」

「そうですね。町の至る所に物乞いが見られます。こんな所で買出しなんて出来るのでしょうか？」

「いやあ……無理だろ」

荒廃した町並みを見ながら昌秀が呟く。

さらに進むとやせ細った子供達が、雑草を食おうと手を伸ばしていた。

昌秀はそれを見ると、目の色を変えてその子供に近づいた。

「雑草を食っても腹は膨れないだろ？ これでも食え」

懐から昼飯用のおにぎりを取り出し子供に渡すと、子供は目に涙を浮かべながら必死におにぎりにかぶりついた。

「殿、それでは殿の昼餉が……」

「いいんだ。腹いっぱい食えよ？」

昌秀の言葉に子供は無言で頷いた。

子供は腹を撫でるとお辞儀をして、走り去ろうとした所、牛車に轢かれそうになった。

「馬鹿っ！ 急に飛び出す奴があるかっ！」

「殿っ!? 危険ですっ！ お下がりください！ 私が参りますっ！」

言葉より体が動き出す。

昌秀は滑り込んで子供を救出すると、子供はいきなり泣き出した。

牛車の中から偉そうな人物が下りてくる。

「危ないでござるっ！ その方……麻呂を関白、近衛前久と知つての狼藉でおじやるかっ!?!」

（関白 近衛前久……か。チツ、厄介なのに関わっちゃまったな）

心の中で舌打ちする昌秀。

無言の昌秀に対し、無視していると思ったのか近衛はムキーと足をばたつかせた。

「お主、麻呂の問いを無視するとはいい度胸でござやるっ！ 貴様のような奴は、麻呂が直々に手を下してやるでござやるっ!!」

とうっ！ と勢い良くジャンプする近衛。

この時代の人間ってここまでジャンプ力あるのかと感心する昌秀。

そして次の瞬間、メキツと言う嫌な音がその場に響いた。

昌秀 長秀と供にやまと御所に向かう

「ぐっ……」

「殿っ!? 大丈夫ですかっ!?」

近衛の蹴りをまともに喰らった昌秀は膝をついて顔を押しえた。

高虎が心配して近寄るが昌秀が手で来るなど合図すると、傍にいた子供を連れて少し離れた。

「ほっほっほっ! 己の身分が分かったでござやるか?」

「……さて、どうだろう?」

「むむっ!? まだ懲りないでござやるかっ!? ならば……」

近衛は懐から蹴鞠を取り出すとそれを空中へと投げる。

それを追う様にジャンプすると、空中で一回転してオーバーヘッドキックを放った。

「これでお終いでござやるっ!!」

「殿っ!!」

昌秀はハアと溜め息を吐いて、目を細めると物凄い勢いで迫り来るボールを蹴り返した。

蹴り返されたボールは近衛の腹に命中。

「げっほお!」

「ふん。重秀殿達の修行に比べればあの位の球なんて止まって見えてる」

「き、貴様……誰に手を出したか分かってるのでおじやるか?」

「関白様だろ? 大体、俺が出したのは手じゃない鞠だ」

嫌味たつぷりの笑みで自分の足をちらつかせる昌秀。

「……覚えておるでおじやる!! 後で後悔するなでおじやる!」

牛車に乗って行く近衛を昌秀は満面の笑みで見送った。

「ああ、スッキリした」

「殿、大丈夫でしょうか? あの方は関白様なのですよ?」

「大丈夫だ。あつちは俺らの名前を知らないからな」

「それはそうですが……」

買物物を済ませた帰り道の途中、高虎が心配そうに尋ねたが昌秀は軽く笑ってやり過ぎした。

そんな話をしてしていると、長秀……と言うよりは織田家の屋敷に到着する。

「ただいま」と

「昌秀？ 随分遅かったですね？」

「まあな。ちよつとした問題があつてな」

「問題なのはこつちの方ですよ。お陰で夕飯がかなり遅れました」

「それについては謝るよ」

昌秀が買ひ物袋を長秀に手渡すと、長秀も笑いながらそれを受け取つた。

その光景をじくと見つめる高虎。

「どうかしましたか高虎殿？ 何かおかしい事でも？」

「い、いえ……お二人はその、お似合いだなあと思つて……」

「お似合い……??」

二人が首を傾げて顔を見合わせる。

瞬間、高虎の言葉の意味に気付いてハツと手を放す二人。

「た、高虎殿？ 私と昌秀はそんな仲ではありませんよ？」

「そうだ。大体、俺はこいつとはどうも上手くいかないんだ」

「そうやって反論する所も怪しいですね……」

昌秀達が必死に反論するが、高虎は目を細めてハイハイと聞き流していた。

二人は諦めたようにハアと深い溜め息を吐いた。

「は？ 仕事を手伝って欲しい？」

「ええ、実はやまと御所の修復のために視察に行こうと思つてまして昌秀も一緒に来てもらえると思うのですが……」

「……いいぜ。正直、やまと御所つてのがどんなのか気になつてたんだ」

「いい返事です♪ 九十点 それでは参りましょうか？」

「そうだな。行くぞ高虎」

「はいっ!!」

昌秀達がやまと御所へと向かうと、そこにはボロボロの御所が存在していた。

恐る恐る壁に手を当てると、ガラガラと音を立てて崩れ去った。

昌秀は引きつった笑みで長秀を見る。

「な、長秀さくん？ これを修復つて無理じゃね？ いっそ、新しいの建ててやれば良いと思うんだが？」

「文句を言うなら姫様に言つて下さい。それにしても、これは想像以上に酷いですね……」

「酷いなんて物ではありませんよ。見てくださいこれ、触れただけで崩れる壁なんて

ありえませんか?」

「確かにこれは流石に……」

長秀達がうぐんと悩みながら、やまと御所を眺めていると聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「そちらたちは一体何をしているでおじやるっ!?!」

「さて、それじゃ次は二条御所だっけか? さっさと行こうぜ」

「そうですね」

「ふ、二人とも……無視ですか?」

やれやれと歩いていく昌秀達をポカンと口を開けて見ている関白、近衛前久。

あまりに華麗なスルーっぷりに呆けていた近衛であったが、ハツと気付いて昌秀達を呼び止めた。

「ま、待つでおじやる?!?!」

怪しい客人

「うへえ……話には聞いていたが、これは酷いな」

「これは再建には時間がかかりそうですね。三十点」

「しかし將軍を襲うとは、松永久秀も恐れ多い事をしたものです」

昌秀達は二条御所の下見に来たのだが、現在見ている二条御所は下見する必要な無
い位に焼け落ちてしまっており、昌秀が見ても再建にはかなりの時間がかかると分かっ
た。

「それでは下見も終わりましたし、早速報告に向かいましょうか」

「そうだな」

昌秀が領いて早速信奈達がいる東寺に向かおうと足を伸ばすと、長秀が昌秀の袖を
引つ張った。

「……何だよ?」

「先程会ったのは、関白近衛前久ですよね? どうやら貴方を見て怒っていた様に見え
たのは私の目の錯覚でしょうか?」

「前に言っただろ? ちょっとした問題があったって」

「もしやそれは、関白様と一悶着起こしたと?」

「……うくん、まあそうだな」

昌秀が少し考えて答えると、長秀の平手打ちが昌秀の頬にヒツトした。

「痛つてえ!?! 何すんだよっ!」

「ただでさえ京の公家衆から織田家は嫌われていると言うのに、よりもよつて関白と一悶着起こすとは何を考えてるんですかっ!?!」

「……それについてはスマン」

「はあ……まあいいでしょう。今さら評判が下がった所で、今と大して変わらないですしね」

「ぜえ……ぜえ……そちたち、麻呂を無視するとはいい度胸でござやるなっ!」

「何だ、追つてきたのか……?」

「当たり前でござやる。あんなに綺麗に無視されて黙っているわけないでござやるっ!」

「はいはい。長秀、高虎、先に行つててくれ」

「……分かりました。それでは昌秀、失礼の無いように」

「殿、ご武運をつ!」

長秀達を手を振りながら見送ると、昌秀はハアと溜め息をついた。

「失礼の無いように……か」

チラリと関白様の方に目をやると、どうやら相当お怒りのようである。

眉間に皺をよせ、額にうつすらと青筋が立っていて、今にも斬りかかつてきそうだ。

「ふふふ……ここまで無視されたのは、生まれて初めてでござる」

「そうかい。人生何事も経験から始まるっていうしな。いい経験になったんじゃないか？」

その瞬間、二条御所跡地にプツンと何かが切れた音がした。

「き、貴様あ……」

「……それは宣戦布告と見ていいのかな？」

関白の手には何処から取り出したのか、一本の日本刀が抜かれていた。

「一度ならず二度までも、麻呂を侮辱しておつて……許せぬでござるっ！」

昌秀は軽く深呼吸をすると一つの結論に至った。

……うん、面倒くさいな。よし、逃げようと。

そう確信した昌秀はダッシュでその場から逃げた。

「ま、待つておじやる!!」

関白が後ろから追ってくるが気にしない。

途中、突き当りの曲がり角を曲がる途中、丁度いい木の枝を見つけ引っ張って角で待

機した。

そして関白が角に迫ってくるのを見計らい、引つ張つておいた木の枝を放した。すると、鞭のようになつた木の枝は関白の顔面に勢い良くヒツトした。

ギャフツ!? という声と共に倒れた関白を確認した昌秀は長秀達が待つ東寺へと向かった。

「あら、昌秀じゃない。遅かつたわね。何かあつたのかしら?」

「まあ、関白様と色々とな……」

「あんたもあのお齒黒と何かやらかしたの? まつたく、サルといいあんたといい、どうして厄介事を増やすのかしらね」

「その点については長秀に耳にタコが出来るほど聞いたよ」

「……まあいいわ。とりあえず座りなさいよ」

「遠慮なくそうさせてもらう」

昌秀は長秀の隣に静かに座ると、長秀が低い声で話しかけてきた。

「昌秀、どうやって撒いて来たのですか? まさか手を出したわけでは……」

「安心しろ。手は出してない」

「なら良いのですが……」

「木の枝なら思い切りぶつけてやったがな」
「……馬鹿」

その夜、昌秀の部屋に一人の来客があつた。

高虎が言うにかなり怪しい奴らしい。

しかし、自分が送っていた間者かもしれないのでとりあえず通すようにした。

「失礼します」

「入れ」

襖が開かれ高虎の言う怪しい奴が部屋に入ってきた。

成る程、確かに怪しい……………

白いフードを被つていて、顔が良く見えない。赤い袴を見るに巫女さんであると予想した。

「あの、此度は長門昌秀様に拝謁できて執着至極でございます」

敬語に慣れていないのか、所々つまずく喋り方に昌秀はちよつとだけ好感を覚えた。

「いや、敬語はよしてくれ。俺は長門家を出奔した身だからな」

「そう……………ですか。それでは……………」

巫女さんはゆっくりと顔を上げると、急に立ち上がった。その手にはキラリと光る刃物が一つ。

「……はい？」

「殿っ！」

高虎が慌てて巫女を押さえようとしますが、巫女が刃物を振り下ろす方が早かった。

電撃和睦

「殿っ!? 大丈夫ですかっ!? お怪我はありませんかっ!?」

「ああ、大丈夫だ。それより、こいつをどうするか……」

二人が目を向けた先には、柱に頭をぶつけて気絶している怪しい巫女が倒れていた。

「斬りましょう」

「即決かよっ!? 斬るのはマズイだろ。ここには長秀達もいんだぞ」

「それなら縛ってそこの川にでも放り投げてきましようか?」

「お前、確実に殺しにきてるよな? とりあえず殺すのはナシだ」

「殿がそこまで言うのならやめますが……放置しておくのも危ないですよ?」

「そうだなあ……とりあえず」

昌秀は巫女を抱えると、そこから辺から取ってきた縄で柱に縛り付けた。

それを見た高虎は遠い目をして昌秀を見る。

「殿……女性に対してそれは如何な物かと」

「お前、さつき自分で縛るとか言ってたじゃん。……仕方ないだろ。さつき殺されそうになったんだし、縄だけでは足りない位だ」

二人がこの巫女の事をどう説明したものかと悩んでいると、巫女がうつと言いなからうつすらと目を開けた。

「あつ、殿氣付いたようですよ？」

「おお本当だ。さて、一体お前は何者だ？ 誰の命令で来た？ お前、年いくつだ？」

「殿、最後だけ関係ない質問ですよ」

「ああスマン。質問間違えた。コホン、とりあえずお前は一体誰だ？」

巫女は寝ぼけているのか目をパチクリさせながら、周りを見渡していた。

「おい、聞いているのか？」

「あ、あのう……」

「何だ？ やつと名乗る気になったか？」

「ここは何処でしょう……？ と言うより、私は一体誰なのでしょうか？」

「……………はい??？」

翌日 昌秀の部屋にて

「記憶喪失?? 何ですかそれ？」

「その名の通り、記憶を失う障害の事だ。多分頭を強く打ちすぎて、一時的に記憶がぶつ

飛んだんだろうな。まったく、この女は厄介ごとばかり持ってくる」

昌秀がやれやれと欠伸をしながら横になって昼寝しようとする、勢い良く部屋の襖が開かれた。

「昌秀、いますか?!」

「お、長秀か。聞いてくれよ。実は昨日の話なんだが——」

「そんな悠長な話をしている場合ではありません。とりあえず話を聞いていただけますか?」

「あ、ああ分かった。高虎、こいつを別の部屋に連れて寝かしてやってくれ」

「はっ。縄は如何に?」

「外してやれ。女性を縄で縛り上げる趣味はないからな」

「承知しました」

高虎が巫女を抱えて部屋を去ると、昌秀はお茶とお茶請けを出して長秀の前に座った。

「……で? 話つてのは何だ?」

「……武田と上杉が電撃的に和睦しました。私達は美濃へ戻って守りを固めなければなりません。京には光秀殿と相良殿が残るそうです」

「武田と上杉がねえ…… にわかには信じがたいな。虚報じゃねえのか?」

「私も一度は考えました。しかし真実だとすれば、たちまち美濃や尾張は蹂躪されてしまします」

「もつともだ」

長秀達が慌てているというのに、昌秀はお茶を飲んで落ち着き払っていた。

長秀はムツとしながら、お茶請けのカステラを一口頬張った。

「……相変わらず美味しいですね」

「そりやどうも」

「じゃなくて、昌秀も早く準備してください。急がないと置いていきますよ」

「……………」

「昌秀?」

（織田家がいなくなつて得する人物は……ああ、あのお齒黒閨白か。動かす駒は、松永弾正久秀つて所だろうな。だとすると、良晴達は危ない状況になるだろう）

昌秀が目を瞑つて考えていると、長秀の大声で昌秀の名前を呼んだ。

「昌秀っ!!」

「うおう!! な、何だっ!! 敵かっ!!」

「何を寝ぼけているのです。話を理解したなら、早く準備してください」

「……分かった」

長秀が部屋を去ると、昌秀は誰もいない筈の部屋で声を出した。

「……話は聞いたとおりだ。お前は霧生に戻って、且元に千程率いてやってくるように伝えてくれ」

『御意』

天井から気配が消えると、昌秀は霧生に戻る仕度を始めた。

「昌秀……その娘は誰です？」

「馬上からだと言明しづらいから、追々話すよ。ざっくり言うと、昨日俺を殺しに来た奴だ」

「はっ？ 殺しにですか？」

「そう。殺しに」

馬上で昌秀が親指を立てて笑うと、長秀はハアと溜め息を吐いて額に手を当てた。

「自分を殺しに来た暗殺者を助けるなんて、貴方は何を考えているんですか？」

「さあて、何を考えてるんだらうな？」

「……また謀略ですか？」

「さてね」

昌秀は話を打ち切り、更に馬の速度を上げて駆けていった。

昌秀の背中を見送りながら、長秀は胸によぎる嫌な予感に表情を曇らせた。

(本当に……何を考えてるんだか。……何で私が昌秀の事を気にかけるのでしょうか?)
とりあえず目の前の事に集中しなければ……)

馬上で悩んでいた長秀は、手綱を握りなおして昌秀の後を追った。

笹の才蔵 槍の勘辺衛

長秀達率いる織田勢が近江の国境付近を抜けると、見慣れた三つ蜻蛉の旗印が緩やかになびいていた。数はざっと見て千程である。

「何故、長門の軍勢がこんな所に……？ まさか織田の足止めのために？ ……三十点」

「安心しろ長秀。あれは足止めのための軍じゃない」

昌秀が長門軍を指差すと、長い黒髪を風で揺らしながら一人の少女が軍勢の中から現れた。

その姿を見て昌秀が笑う。

「昌秀様っ!! 言われたとおりに千の軍勢を率いましたよっ!!」

「おお！ ありがとうなっ！ とりあえずお前らは、そのまま京へ向かってくれっ！

俺もすぐに追いつくっ！」

「はいっ！ どうかご無事でっ！」

且元はそう返事すると、軍に指示を飛ばして進軍を開始した。

且元率いる霧生勢が通り過ぎるのを長秀達はポカンと見ていた。

「昌秀……どういふことですか？」

「嫌な予感がするんだ。もしかしたら、良晴の奴が危ないのかもしれない」

「……分かりました。その代わり、私もついていきます」

「は？ 勝家に軍を任せんのか？ 大丈夫かよ？」

「ご安心を。道三殿もおりますから簡単にはやられません。それに、私達が一刻も早く京から敵を一掃すればいい話です」

「……難しい任務だな」

「お使い程度の働きで済むと思ってたんですか？」

「まさか」

二人は顔を見合わせるとクスクスと笑って、馬を反転させて京へと急いだ。

「状況は？」

「殿の言うとおりでした。やはり、松永勢が京へ侵入しています」

「まさか本当に来るとは……二十一点」

昌秀達は京へ入る前に軍儀を開いていた。

話し合っている最中、どうも且元がモジモジと動いているのが気になった。

「且元、どうしたんだモジモジして」

「今話す時では無いのですが……実は、昌秀様にお会いしたいと言う人物が二人います……」

「何だこんな時に……？ どここの誰だ？」

昌秀が不満げに陣幕を抜けると、編み笠を被った二人の人物が頭を下げていた。

「この度はお会い出来、恐悦至極でございます」

「堅苦しい挨拶は抜きだ。それで、何の用だ？」

二人は顔を見合わせると、黙って頷き編み笠を外した。

一人は黒髪短髪、真つ黒な甲冑を纏った女で、もう一人は背中に笹を背負った青年である。

「名前は？」

「……渡辺勘辺衛」

「某は可児吉長と申します。最近皆から笹の才蔵と呼ばれています」

渡辺勘辺衛って確か、高虎から奉公構を出された奴だよな？ でも、かなりの槍の名手だったはずだ。

こつちの可児吉長もとい、才蔵は美濃の出で高虎と同じように主君をコロコロ変えているので有名な奴だ。こちらもかなりの槍の使い手だったような気がする。

昌秀は二人の目を見つめる。

——眩しい位澄んだ目だ。

昌秀は二人の目を見ながらそう思った。

思えばこの二人は始めてあつた高虎と似ているかもしれない、と昌秀はフツと笑つた。

すると、勘辺衛が恐る恐る話しかけてきた。

「……あの」

「何だ？」

「……何か可笑しい事でも？」

「ああ、いや……」

昌秀はバツが悪そうに手を振ると、勘辺衛の隣にいる才蔵がクスリと笑つた。

「勘辺衛、昌秀殿は思ったより悪いお人ではなかったようだな？」

「……」

勘辺衛が無言で頷く。

その様子を見て、またも才蔵はクスクスと笑つた。

「失礼、実は我らは悪名名高い昌秀殿を試しに参つたのです」

「悪名名高い……か。まあ、否定はしないよ」

「いやしかし、実際に会つて見ると存外、もう一つの噂の方が当たりだったのかもしれないな

いですね」

「もう一つの噂？ 何だそりゃ？」

「それは昌秀殿が、『長津の謀将』ではなく、実は長津で一番優しい領主なのではないか
と言う噂です」

「……優しい領主、ね」

「昌秀殿は、瀬名城の攻略の際や長門家の宮部継潤殿を謀にかけています。しかし昌秀
殿は、謀略の限りを尽くしたにも関わらず霧生の民に慕われております。そんな人物
が、心底謀が好きとは思えません」

「……お前は一つ勘違いしているな」

「は……？」

「確かに謀は好きとは言えない。だが俺は、大事な物を守るためなら何だってするだけ
だ。大事な物の為なら、俺は仏様だって敵に回すぞ」

昌秀が無表情で呟くと、二人は黙りこんだ。

「……まあそう思われるのは悪くない、かな……」

昌秀はフツと笑い二人に背を向けた。

「お前らの目的は分かった。用件は済んだら？ 俺は軍儀に戻る。達者でな」

手をひらひらさせながらその場を後にしようとすると、黙り込んでいた勘辺衛が何時

の間にか昌秀の後ろで昌秀の服を掴んでいた。

「……用は済んだ筈だが？」

「……仕官」

「は……？」

「……私、あなたに仕官したい」

「禄は少しで領地はやれんぞ。それでもいいのか？」

勘辺衛は無言で頷く。

後ろから才蔵も追ってきた。

「そ、某も昌秀殿に仕官したい。禄もいらん、領地もいらんから昌秀殿の指揮の下で槍働きをしてみたい」

昌秀は最初は断ったが、二人がどうしても頼んでくるのでとりあえず自分の側近として雇う事にした。

軍儀の場に連れて行くと、初めは高虎達は反対したが昌秀の説得のお陰で一先ずは納得してくれたようだった。

翌朝、昌秀達は槍の名手として知られる。

槍の勘辺衛こと渡辺勘辺衛と、笹の才蔵こと可児才蔵を仲間に加え京へと進軍を再開

した。

長秀対久秀 前編

「て、敵襲だみゃあ!!」

「逃げるみゃあ!!」

京へ到着すると、織田兵が松永兵に所々で襲われていた。

西側から多くの悲鳴が聞こえる。恐らく、敵は西側に集中しているのだろう。

昌秀はその状況を見て舌打ちする。

「ちっ! 予想以上にマズイみたいだな……」

「殿、如何しますか?」

「高虎と且元と才蔵は六百の兵を率いて西側から鎮庄に当たれ。俺と長秀と勘辺衛は四百の兵で東側から鎮庄に当たる」

「承知しました」

高虎達は五百の兵を率いて西へと向かっていった。

昌秀達も気を引き締めて東側へと馬を走らせた。

「かかれえ!!」

昌秀の号令で長門兵が松永兵に襲い掛かった。

霧生の兵達はほとんどが元山賊で、戦慣れしており恐怖など何処吹く風と颯爽と戦場を駆けていった。

「くっ!? 何故、長門家が京に……」

敵将らしき人物が長門家の雑兵を一突きしようとして槍を繰り出すと、雑兵と思われた人物はいとも簡単に槍をひらりとかわした。

予想外の反応に敵将は『なっ!?』と動揺する。

「こ、こやつら……只の雑兵ではないのかっ!?」

雑兵は無言で敵将の体を刀で斬り付ける。

敵将は血を吐き、膝から崩れ落ちた。

「こ、こやつら……全員、かなりの使い手だぞ!」

「案ずるな。我らにはまだアレがある」

松永勢が手で合図すると、奥から巨大な動物が現れて長門兵に突撃を開始した。

剽悍で知られる長門兵だが、見たことも無い動物が現れて動揺する。

たまたま知らぬ所から悲鳴の声上がる。

「あれは象か? まさかこんな切り札を用意してるとはな。敵も中々どうして……」

「感心している場合ですかっ! これでは貴方の部下がやられてしまいますよっ!」

「これは危険……」

「分かつている」

昌秀は部下を呼び、こそこそと話す。部下に『頑張れよ』と言うと背中を叩いて見送った。

——所詮は動物、火には勝てまい。

昌秀は釣られる釣られると心の中で期待しながら、馬を反転させた。

「……ひと先ず撤退する。全員退けっ!!」

「昌秀っ！ 何を考えているのですかっ！ ここで退けば、京はどうなるのですっ！」

「……私もそう思う」

「黙って従ってくれ。あいづらを一網打尽にするためだからな」

昌秀の何時に無く真剣な眼差しに二人は黙り込んだ。

昌秀率いる五百は、後方へと撤退を開始した。

敵方は勝機と象兵を走らせ、後ろからさらに松永勢が続いた。

やがて道は狭くなり、両側に民家が並ぶ人が四人ほど並んで進むのがやつとの道になった。

そこに松永勢が殺到すると、昌秀は不適な笑みをして軍を反転させた。

「今だっ！」

昌秀が叫ぶと、前に並んだ謎の壺を持った兵が一斉に壺を空中へと放り投げた。それを後方にいた弓隊が火矢を一斉掃射する。

放たれた火矢の一部が壺と衝突すると、中から燃える液体が飛び出て松永勢に降り注いだ。

京一帯に響いたのではないかと思う位、松永勢の悲鳴は凄いものだった。

余りの熱さに悶え苦しむ者もいれば、上から降り注ぐ矢の雨にやられる者、それでも敵を殺そうと身を乗り出すが槍に突かれる者、阿鼻叫喚とはこう言う事を言うのだろう。

「うっ……」

余りの光景に長秀は目を伏せる。

当たり前だ。こんな光景を見て、目を伏せない奴はどうかしている。

——きつと俺はどうにかしているのだろう。

昌秀は自分を責め立てるように、ぼそりと呟いた。

「??? ……何か言いましたか?」

「何でもない。とりあえず、急いで火を消すんだ。このままだと、他の所に火が移りかねない」

「はっ!」

長門家の必死の消火活動が功を勞し、火は最低限の被害に収まったが、そこには真つ黒焦げの死体の山と、火の勢いが強すぎて灰になってしまった家の残骸があった。

昌秀はそれを只無言で見つめていた。

「……すまんな」

冷たく一言呟くと、昌秀は高虎達の報告を待った。

数時間後、高虎達の伝令から西側の松永勢を撃退したとの報告が入ると昌秀は急いで東寺に向かった。

東寺に着くと、所々から出火しており危険な状態であるのは素人から見ても明らかだった。

「おいおい、大丈夫なのか？ 明智光秀は……」

「分かりません。とりあえず、急ぎましようっ！」

「おいっ！ 危ないからお前はここにいろっ！ 中には俺と才蔵が行くから」

「……もしかして心配してくれるのですか？」

「……んなわけ無いだろ」

「じゃあ構いませんよね？」

「あくもう分かったよ。だけど俺もついていくからなっ！」

「お好きにどうぞ」

昌秀は『本当に……可愛げがねえ』と頭をポリポリと搔くと先に行つた長秀の後を追つた。

「もう少し……と言つた所ですわね」

松永久秀は眼前でしやがみ込んでいる明智光秀を見つめながらニヤリと笑つた。

光秀は心の拠り所である織田信奈が撃たれたと言う事実を突きつけられ、心が崩壊寸前であつた。

「実に惜しい才能なのですが……仕方ないですわね。ここで断たせて頂きます」

久秀が光秀の命を得意の十文字槍で刈ろうと槍を振り下ろすと、何処からか飛んできた十文字槍にそれを阻まれてしまった。

「なっ!? 一体何処から……」

「こつちだこの野郎!!」

久秀が振り向くと、そこには黒髪短髪の好青年が一人と隣には青年より少し年上と思われる長髪の女性が立っていた。

「……何者です?」

「長門昌秀」

「丹羽長秀」

「成る程……」

——この青年が長津の謀神ですか、意外とお若いですわね。

昌秀の予想外の若さに少々驚いた久秀だったが、すぐに表情を何時もの妖艶な表情に戻した。

「それで……昌秀殿は私に何か御用でしょうか？ それとも、私と遊びたいのかしら？」
「……嬉しいお誘いだな。だがダメだ。隣に長秀がいなかったら乗ってたかもしれんが」

「残念、断られてしまいましたわ。結構、好みだったので……」

久秀の言葉に『なっ!?』と長秀が顔を赤らめる。

「冗談じゃありませんっ！ 昌秀が貴方のような女と一緒にいるなど、0点ですっ！」

「お、おい。落ち着け、長秀……」

「昌秀は黙っててくださいいっ!!」

「はいっ！ すいませんでしたっ!!」

……どうやら長秀とか言う女性は昌秀殿の事を慕っているようですわね。

久秀の顔から、妖艶な笑みが一層強くなる。

傍に落ちていた槍を拾い上げると、長秀に向けて構えなおした。

「さて、それでは始めましょうか」

「……参られよ」

長秀は腰の刀を抜くと、何時でも迎え撃てるように構える。

昌秀はその場を戸惑った様子で見守るしかなかった。

しばしの沈黙の後、焼けた木が落ちてくると地面に激突する。

刹那、両者とも思い切り地面を踏み込んで渾身の一撃を放った。

久秀は槍の長所である突きを、対して長秀は上段から一気に刀を振り下ろした。

そして、耳が痛くなるような金属音が東寺に反響した。